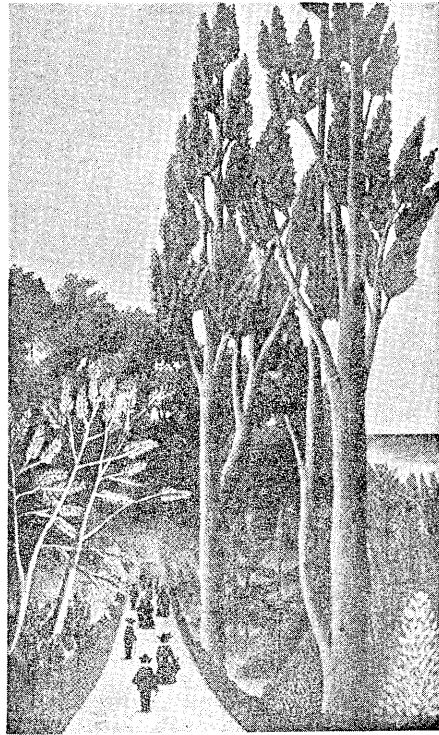


北辰會雜誌



NO. LXXXVIII

VI. MDCCCXX

北辰會雜誌

第八十八號

目次

創作

群	高坂正顯 (一)
甕	北村喜八 (二七)
無盡講	宇田川貞一郎 (三四)
怠惰經	三島寬 (五二)
憂鬱症	各務虎雄 (六二)

附錄

雜報	(八三)
各部々報	(八四)
同人雜記	(一〇〇)

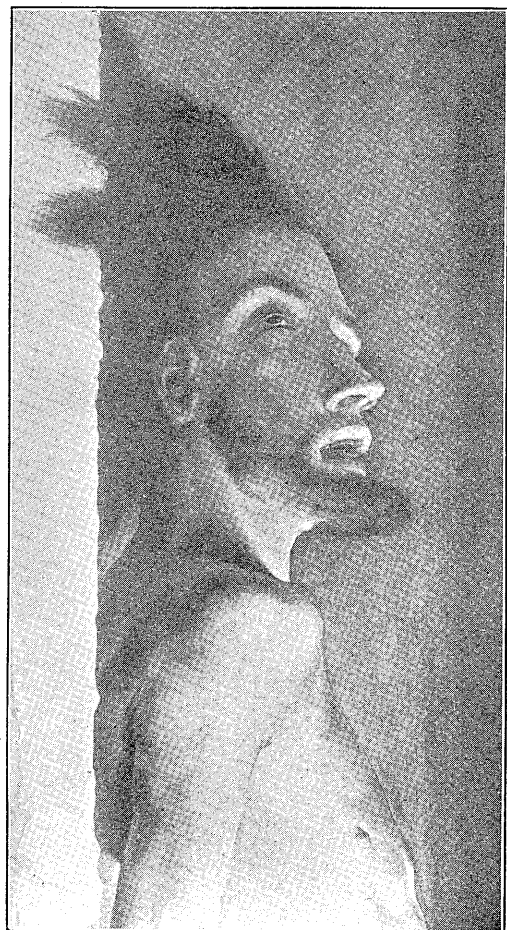
表紙
挿畫

Landscape

Rousseau.

Le Christ au Tombeau (détail)

Hans Holbein.



LE CHRIST AU TOMBEAU

(détail)

HANS HOLBEIN

群むれ

(日記から)

高坂正顯

大晦日の夜であつた。

「あなた、一寸出てきてもいいでせう、すぐ歸つて來ますから……」「坊や」は叔父おぢちゃんと仲よく遊んでゐるわね。」かう言つて抱いてゐた「坊や」を下に降した。「それにおつばいは今飲んだばかりだし」とあとから言ひ譯のやうにつけ加へて姉はチラツと私の方を見た。

私はガチャ／＼と茶碗でも洗つてゐる音が下の臺所の方から響いてくるのを聞いてゐたが、よそ行きよそ行きの着物などをいち／＼とつてゐる姉を見ると妙にちぐはぐの心になつて別に合槌も打たなかつた。姉は兄の方を見たらしい。

「ね、行つてもいいでせう、風邪もこんなによくなつたし、今晚はお天気もいいんですから。」

「何を買ひに行くのだい、買ひに行く／＼と言つて。」と兄はぶつきら棒に口を開いた。

「どうせお正月のものなんだらう、ぢあ定子にでもあいちゃんにでも行つてもらつたらいいぢやないか。まだよく風邪も癒らないのに。」

「お正月のものだけでもないのよ。定ちやんのコートも買つてこようと思つて、定ちやんは自分では解らないつて言ふんですもの。それに色々他人では解らない買物もありますし。」

こんないくつかの會話の後に姉はたうとう兄を承諾させてしまつたらしい。「ぢや、しやうがないな。行つておいで、でも温かくして早く歸つてくるのだよ。坊やだつてあんまりいゝのではないし。」

かう言つてから兄は私に向つて「芳雄、お前姉さんのお伴をしてやらないか。」と言つた。しかし私はなんだか姉について行くのがいやだつた。愛子には臺所で水仕事をさせながら、自分だけ着飾つて出て行くかうとする姉が氣にくはなかつたせもあるし、義兄夫婦が外出したら、さぞゆつくりした氣持になるだらうとも思つて見たからであつた。私は兄に何とか言はねば撥が悪いと思つた、しかしうまく言葉は口に出なかつた。

姉はあまり私のすすまぬらしい様子を見て、「芳ちやんはもうねむいのでせう、大晦日のくせに。」と云つてから今度は兄に、

「あなた、おふろにお入りになつて、まだ、……ぢや

私お先に顔を洗はして戴きますわ。一週間もお湯に入らないんですもの。頸すぢなんか眞黒よ、入りやしないの。一寸顔だけよ、いゝでせう。」と言つた。

姉は「坊や」の風邪がうつつて、一週間ほど前から「ふろ」に入る事は嚴禁されてゐたのだつた。

「しやうがないね、そんな事を言つてさ。また風邪でも引きなほしたらどうするんだい、お前は一人身ではないんぢやないか。本當に家が醫者だもので病氣を馬鹿にしてばかりゐて。」

姉は其の頃妊娠してゐた。しかし慎みのいゝ彼女はあまり目だたぬ様にしてゐた。下女なども「奥様

がお目出たいんですつてね」などと、やつと近頃氣がつかだした位だつた。兄はそれで一層姉の風邪の事をやかましく言つた。「妊娠してゐると風邪にやられ易いからね。本當に氣をつけないといけないよ。」かう兄は絶えず言つてゐたのだつた。しかし姉に「一寸顔だけよ」と言はれて見ると、いけないとも言ひにくかつたので「早く洗つておいで、「坊や」の様だね、しやうがない。」と言つた。

「どうせ坊やの母ちゃんですもの」と言つて姉は立ちかけたが、「あなたもお出にならなくて、どうせ今夜はもう患者さんは誰もいらつしやらないんでせう。きたつてせいせい岡本さん位でせう、春(看護婦)にでもやらしておけばいいことよ。」と言つて自分で笑ひ出した。兄もそれにつられて笑つてしまつた。

岡本さんと言ふのはある人の紹介で近頃かよひかけた金持のお隠居のばあさんであつた。中風でよく立たぬ腰をしながら、車夫の肩につかまつてあつちこつち遊びまはるらしかつた。で来るたびに、昨日は帝劇に行つたの、明日は何處に行くのなぞ言ふのであつた。それに一日、十五日の定休日に「今日は大層具合が悪いので」とか言ひながらわざとの様に尋ねて來るので兄も「困つた岡本のばあさん」と言つて笑つてゐた。それで笑つた。私まで其のふとつた、毎日の様に芝居を見に行くこと云ふ中風のおばあさんの姿を思つて噴きだしてしまつた。

「兄さん、行つてらつしやいませんか、今日はいゝ夜ですよ風はないし。余り寒くはなし、「坊や」は定ちやんと二人で大丈夫ですよ。兄さんはちつとも散歩にさへ行かれないんでせう。大晦日に借金を拂ふんですね、散歩の。」

私までかう言つたので兄はたうとう姉と一緒に外出する事になつた。「お出になつても、きつとつま

らなくてよ、でもよかつたわ。」姉はこんな事を言ひながら湯殿の方へ降りていった。

鐵瓶の湯はシャン／＼沸いてゐる、大晦日の夜も山の手にあるこの家までは、あまり騒々しい姿を見せなかつた。下からトン／＼と定子——それは私のすぐの姉であるが上つてきた。そして「今日はお揃ひでお出かけなうせう」と言ひながら兄の着物を出し始めた。兄は「あんまりせびるもんだから」と言つて、

「やつぱり、ありがたいお役目でもないな。之で一緒にお伴して行かないと斜ななめになるんだからね、普通のからだではないもんだから。」と辯解じみた事を言つた。

化粧を終つて姉はあがつてきた。夜の光にすごい程美麗に見えてゐた。かうして二人は大晦日の夜に消えていった。

樂しさうだつた。

二

私は一人ぼつちになつた様な顔をしてゐる。「坊や」を火燧の所へ抱いて來た。さつきまでは手に余る様な自動車の玩具で遊んでゐたが、もうそれには飽いたと見えて手も出さなかつた。で私は太鼓を渡した。「坊やをぢちゃんにたたいて頂戴」と云ふと兩手で所かまはずたたきだした。私がなにか歌でも歌ふと、其の時だけは少し調つた調子になつたけれども、又いつのまにか出鱈目の音に變つてしまふ。それが時々思ひ出した様に強くなつたり弱くなつたりする、淋しい氣持のするものだ。どこから風が入つてくるのか障子の破れ目がはた／＼鳴つた。「坊や」は太鼓をたたいてゐる。するといつか私は近頃の

家の事や父の事を思ひ出してゐた。やがて六十になる父は滿洲の方で働いてゐる。樂にやればやれるのに、強ひて冒險的な事業に手を出しては、危い生活を送つてゐる。姉はいつか「お父さんは全く氣が若いのだから」と言つた事があるが、その姉も今の夫と一緒にゐるために父から勘當の様な有様になつてゐた。小さい方の姉は(定子)は、一番私とは氣が合つてゐた、しかしその姉は未だに小學校の教師をしてゐる。氣の勝つた女だつたので父や兄夫婦とも折合がおもはしくなかつた。兄等が時々「教員様」が今日はおつむが痛いさうで、などと云ふのを聞く度に私はむしづが走る様な思ひがした。皆な思ひ／＼の事をしてゐる。そりや兄なんか上邊だけはうまい、が表面に過ぎないのぢやなからうか、何だか淋しい家庭だな。……とこんな事を思ふともなく思つてゐると、坊やは急に太鼓をうつのをやめて姉の方に行つた、そして蓄音器をしるとやかましくせびりだした。

それは姉が小學校の俸給のあまりで買つてきてゐたのであるが、西洋音楽をやつてゐた姉の買つてくるレコードは兄とは趣味が合はなかつたのであまり兄の居る所ではやらなかつた。「わしは毛唐の金切聲を聞くと頭がいたむのね、」こんなあてつけの様な事を言ふ時もあつた。坊やはそれを知つてゐたで兄の留守にはきつと蓄音器をせがんだ。「あ！今日もさうだな、」かう思ふと私は急に之の子供がいぢらしくなつた、じつと抱きしめてやりたく思はれた。

坊やはレコードをあぶなげに私の所へ持つてきた。火燧にあたつたまゝ私は蓄音器をまはし出した、坊やは姉の脛の上で大人しくきいてゐる。ふと姉は

「今度は東京ね」と言つたが、すぐ「でもこゝにゐちや勉強はとて出来なくてよ、あいちやんが可愛想で見えてゐられないの、姉さんはそれで芳ちゃんの方への義理立になるし、兄さんがあの氣短で下女が

いつかないでせう、でそのおさへのためにもね。」

其の頃は、兄から私の方へ金を送つてゐるのであつた。「宅の様な所には金がたまる氣遣はないから、まあお前の所へ預けておくんだね、」よく兄は私にそんな事を言つてゐた、それに今かうした事を聞くと私の心は妙にいら／＼するのであつた。姉は又次の様な事も言つた。

「雪つて子がゐたでせう、一寸可愛い、顔の子ね。あの子なんか、そりやつまらない事を出されたのよ、ほら芳ちやんがK市から持つて來た九谷焼ね、あれをどうしたのか壊してしまつたの、兄さんが大事にしてゐらつしやつたのだから、怒りになるのも無理もないけど、叱り方があんまりひどくつてね。」それから後は、段々雪は信用が無くなつたらしい、しかし暇を出された決定的の原因はかうであつたらしい。その事があつてから一週間位してからであつた。〇〇さんと言ふ人が新しく來る様になつた、どこかの重役で自動車に乗つてきたりした。午後にはしか暇の時間がないと言つて特に午後の診察を頼んだらしい。しかし其の頃は午後は往診の時間だつたので、一般には辭はつてゐた。で〇〇さんだけは特別にかうする様に雪にいひつけてあつたと見える、姉の話によると、

「なんでも〇〇さんに「え、先生はおいでです」と言つてゐる所に外の人が入つてきたのね、で先生はお留守ですとも言へずに、其の人もあげてやつたんでせう。たつたそれだけなの、それにもうその晩には雪にお暇なんだから雪も可愛想ね、」姉はつけ加へた、「それにその時の兄さんの言葉が面白いのよ、子供のくせに人を馬鹿にしてゐる、人の云ふ事を一寸ともきかない、」て云ふんだから下女もやりきれない譯ね、春もこないだ「先生にしかられても何故しかられるのか解らない時があります。」と言つてゐたけど、本當に思ひがけない事で叱られる事があるのね。近頃はそれがもつとひどいのよ。姉さんが病氣

だし、坊やも悪かつたので、兄様もいらいらするの無理もないけど、こないだなんか、坊やのおつばいが少しぬるいと言つて大變なお叱り。坊やは火の様に泣くし、二階からは「早く持つてこい」て言ふんでせう。愛ちやんはあはて切つて、あんまりあつくならぬうちに持つてきたのね、で一日中御氣嫌が悪いの。」

私は時々蓄音器の針をとりかへてゐた。いつのまにか愛ちやんも來てゐた、で姉は又こんな事も言つた。それはまだ二三日前の事であつた。酒田の商業學校の先生をしてゐる定子の許嫁の男から正月の着物を縫つて呉れる様に頼んできた。それが古い着物の仕立直しなので随分ポロ／＼になりかけてゐたさうである。しかし姉の方でも小學校の俸給ではどうにもならないので、そのまゝ仕立ようとした、すると兄は「許嫁になつてゐる上は夫婦も同様だ、夫の爲には妻は着てゐるものも脱ぐのが當り前だ。お前のコートを買ふのは後にして、着物を一反買つて上げなさい。それから愛ちやんも、私の着物はいゝから——妹は丁度其の時兄の着物を縫つてゐた——姉さんを手傳つて上げなさい。」二人は喜んで夜遅くまで縫つてゐた。そんな日が二日程續いた相である。するとそれがどうも兄の氣に入らなかつたらしい。「自分の事をなんだかおろそかにされる氣がするのね、」と姉が言つたがそれはさうかも知れぬ。「でも自分では言ひにくかつたと見えて大きい姉さんに『そんなに人の事はかりするものではない。愛ちやんも愛ちやんだ、兄さんがやさしくおつしやるのをいゝことにして、兄さんの着物を放たらかしておいて』と言はせたの。途中でふつと氣の變る人なのね。」

其の時の事を思ひだしてか妹はしく／＼泣き出してゐた。もう十八の娘盛りであつたけれど、余り手も入れてないらしい髪の毛は細い／＼のあたりにこまかく揺れてゐた。私は今、彼女に同情の言葉を

かけてやらなくつてはならないと思つた。しかしどうしてか妹と一緒に泣ける様な氣持にはならなかつた。私には彼女が余り早く泣き過ぎたのだ、それには、私と妹とは長く離れてゐたと云ふ理由もあつた自分としても身の振方について相當苦い經驗を味ひつゝあつたからでもあつたらう。私はこんな言を妹に言つてしまつた。

「そりや愛ちゃん、誰でも苦しい事はあるんだからね、それに矢張り人て云ふものは自分の肉身の方余計氣をつけ易いから、よつぽごよく兄さんによくしてあげなくちやいけないよ。」誰でも苦しいことはあるんだからね、」獨り言の様に私は繰り返した。坊やはいつか姉の脛の上ですやくと寝り込んでゐた。

姉は私の言に何となく物足らぬ様な顔をしてゐた。と突然妹はブイと坐をたつて下に降りていつた。私はあつげにとられた。妹は今一番つらい境遇にある、そして今私は一番樂な位地にある、少くとも外見上は樂な地位にある、けごもあてつけの様に下に行かなくつたつていゝわけだ。「あいちやんは昔から一寸あゝした所があつたね、——ひねくれた様な」と私は姉に言つた。姉はだまつてゐた。しばらくして姉は坊やを下におろしてねかせつけ、あしたの仕度をすると言つて臺所に行つてしまつた、……淋しい大晦日だ、義兄夫婦はまだ歸つてこない。

三

晝間は氣持よく照つてゐた陽も夕方近くなるにつれて、黒々した雲の中に閉ぢ込められた、外では七五三繩に風が觸れては寒さうな音がひびいて来る。私達は玄關のオルガンの置いてある室に集つて歌を

うたつたり、オルガンをひいたりした。それは正月の三日の事であつた。親類の小林の叔母と、子供どが遊びにきてゐた、叔母は二階で兄達と話をしてゐた。初め「坊や」のお守りかたがた私達は下で遊んでゐたが、坊やをねかしつけてからは、私達は本當に騒ぎだした。姉(定子)がオルガンを弾いた、私達は始めてお正月がきた、そんな事を言ひあつたりした、そのうちに兄が顔を出して「やあ、大變にぎやかだね、これぢや大變だ、とそれから……愛ちゃん、叔母さんがこゝのお壽司が食べたいと云ふから、さう言ひに行つてあげないか、それに皆なの分も一緒に。」さう言つてから、つけたす様に「どうだいもういゝかげん二階に上つてきたら。」と言つて兄は二階に上つていつた、あとから思ふと、兄はもうその時から幾分いら／＼してゐたらしい。しかし私達はそれには氣がつかかなかつた、妹が頸をすばめて暗黒の中に出ていつてからはまたにぎやかなオルガンと歌の聲との中にしたつて行かすには居られなかつたやがて妹も歸つてきた。さうして三十分もたつたらうか、私は何だか二階で「愛子」「愛子」と呼んでゐる様に思へたので、妹に「愛ちゃん二階でご利用かも知れないよ。行つてごらん」と言つた。すると姉が代りに二階に上つていつた。私達はまたオルガンをブー／＼ならしてゐた。二階では何にか争ふ様な聲がきこえ出した。何となく私達はゾットする様な氣がした、あんまりオルガンを弾くと兄の御氣嫌はいつても悪いのだつた、妹は、兄さん私行つて見ませうかと言つてソット私の顔を見あげた。私達は急に静かになつた、風の音が鋭く耳に襲つてくる。いやに静だ。其の時姉が降りてきた眞青だつた、涙が頬に流れてゐた。「兄さんが御氣嫌が悪いから皆二階に上つていらつしやい。」姉の言葉は妙におだやかであつたがそれが私達にはかへつて恐しい氣持を増させるばかりであつた。

叔母の話によるとなんでも少し前に裏からお壽司を持つてきたらしい、しかし私達は遊びに氣をとら

れて気がつかなかった。それで二階からは大分「愛子」「愛子」と呼んで見たが下からは賑かな笑聲はかきこえてこない、姉さんは頭が痛むと云つてねてゐる。兄はもうさつき下に降りてきた頃から少しいらいらして来た、何度呼んでもお前達は返事をしない、「あんなに騒いでゐては解らない譯さ」叔母はそんな言葉まで使つた。突然、兄は立上つて臺所へ自分でとりに降りていつた、と下の方でドシンと尻もちでもつた様な音がしたと云ふのである。やがて兄は

「お前達にあてつけの様に、わざと大きな足音をさせて上つていらしたのよ、でお前達がくるだらうと思つて少し待つてゐなすつたが誰もこない、『定子も愛子もどうしたんだ、馬鹿にしてゐる、おい皿を出せ。』寝てゐる姉さんにそんな事を言つてブリ／＼してゐなさるからね、私は坊やを抱いたまゝ梯子段の所で「愛子」「愛子」と呼んだのさ。するとやつと定子が上つてくる始末だらう、本當にお前達も気がさかない。」

あとで叔母はそんな事を言つた。なんでも姉が上つてくるなり兄は

「愛子はどうしてゐる」ときいたさうである。

「下で遊んでゐます。」

「なせ遊ばせておく、壽司がきてゐるぢやないか。」

「きこえませんでしたが。どうもすみません。」

「きこえない……愛子は自分で壽司を言ひに行つたんぢやないか。お前も愛子に臺所に行つて氣をつけてゐなさいと言ふのがあたり前だらうが。それに自分からオルガンなんか弾いて。姉さんが今晚は具合が悪くて寝てゐるぢやないか。本當に兄弟がひの無い奴だ。」と云つてから「學校の教員様は皆なそんなものかね。」と口汚く罵つた。

定子も幾分ムツトしたらしい。

「オルガンを弾いたのは悪うございました。愛ちゃんがいともく下女の様に使はれてゐるのが可愛さうですし、お正月位は楽しくさせてやつてもいいだらうと思ひましたから。」

兄はだまつてゐた、口のあたりがいかにムズ／＼してゐた。と突然「げげ下女。私が愛子を下女がはりにしてゐると云ふんですね。もう愛子には何にもしてもらはなくてはなから、おい、お前一寸こつちにいらつしやい。」と寝てゐた姉を隣の部屋に連れていつたさうである。そこで定子は私達を呼びに来たのであつた。登つてゆくと叔母は

「定子が悪いのよ、あんな時に、あんな口答をして、」と云つてゐる、私はだまつてゐた。

「お前達もなせ早く上つてこなかつたのよ、あんなに上から呼んでゐるのに。姉さんは具合が悪くてねてゐらつしやるし、私も何にか手傳つてあげればいゝんだけど、かう坊やを抱いてゐては、やきもきするばかりで、何にも出来ない。大体定子が悪いんだよ。」

何にを言つてやがるんだい、と私は思つた。坊やを兄に渡して膳を出せばいゝぢやないか。いつも來て自分で勝手なものを出して、勝手に食つて行くくせに。

「そりやさうかも知れませんが」私は思はず叫んだ「をばさんなんかには解らない事があるんです。定姉さんだけが悪いんぢやないんです。悪いと言へば皆悪いんです、おばさんだつてよかありません。」

隣の兄と姉の部屋からは何も聞えなかつた。をばの手に抱かれてゐた坊やが急に泣きだした。しばらくは誰も口を開かなかつた。叔母がなにか言ひたげにした時に、姉はおさへつける様に「前から色んな

事があつたんですよ、どうせかうなるのは當り前なだけだ。」と云つた。

叔母は馬鹿にされたと思つたんだらう、「あたり前つて、それだからお前はいけないんだよ、女ぢやないか。それに芳雄だつて愛子だつて、別に大した関係もない私までがいつもきて厄介になつてゐる、並大抵の人に出来る親切ぢやないんだよ。そりや兄さんも悪い所はあるさ、けどお前もあんな事を言ふのはあんまりだつたよ。兄さんだつて、愛ちやんを氣の毒と思はない事はないんだからね。さう思つてゐる矢先、お前があゝ言ふんだから兄さんだつて氣を悪くするさ。」

定子はだまつて口を噛みしめてゐた。私はどこか遠くの方で人の話してもきいてゐる様な氣持に變つてしまつてゐた。理屈はどうでも言へるさ、しかし人間の事件はオヤツと思ふ間に起つてくるのだ、そしてきつと手遅れになる、ふとそんな事を思つた。湯のたぎつてゐる音が強くきこえる。隣の部屋から姉がそつと入つてきた。

「をばさん、飛んでもない所をお目にかけてちやつて……」強ひて笑はうとしたが、悲し相に口を歪めたまゝそこに坐り込んだ。

「をばさん私本當にどうしていいか解らないわ。」

「お前獨りで困るんだからね」と叔母は私達にあてつける様に言つた、「兄さんはいゝ人なんだが時々怒るらしいね。こないだも、之の子に芳雄さんの所へ遊びに行つておいでと言ふと『兄さんがまたプリプリしてゐるといやだなあ』かう云ふんでせう。こゝなんか氣をくばるのが兄さんだけだからまだやりいゝが、私が小林にかたつた當座は、毎日寢床の中で泣いたものさ。苦しむのは嫁だけつてよく言つたもので、お前なんか、好かれて嫁つてゐるんだからまだいゝがね。」

私でも家が近いと、いつでもきて世話してあげたいのだけだれど遠いし、おまけに暇は無しね。」

坊やが一寸目をあけて、ビツクリした様に私達を見た。姉は坊やを軽くゆすりながら、こんな事を言つた。

「兄はいつもあゝなのですよ、下女なんかそりやひどく叱るんですからね、それが心から怒つてゐる様なんでせう。雪ね、あれも家に歸つてから、奥さんはいゝ人だけだ先生がこはいと言つたさうよ。男の人は女と違つて氣がむつかしいらしいのね。私達から見ると氣のよく行きとごく奥様と思へても、あんまり旦那様に好かれない人もあるし、ごこがいゝかと思はれる様な人が大變可愛がられたり。雪なんかもよく働らいたのだけごどうも氣に入らないのね。愛ちやんもどうもあんまり氣が合はないらしいのよ、兄もさう言つてたけど、をばさん、丑の年と子の年とは性が合はないんぢやないのせうか。兄は子の年なのよ。」

あんまりいやだからまだ誰にも話さないけど、元日から「愛子は人を馬鹿にしてゐる、さう言つておきなさい」かう云ふんでせう、私は譯も解らないし、馬鹿らしくもあるので、だまつてゐたけど、

私前からどうかしなくてはいけないと思つてゐただけだ。やつぱり愛子と兄と一緒にゐるのが悪いんでせうね。けど愛ちやんをこつちに呼んだ事情が事情なので大連に歸す譯にも行かず。」

「けどね、姉さん」今までだまつてゐた定子が急に口を入れた。「私かう思ふの、きつと私があるのいけないのよ、いつも私が悪い事をしては愛ちやんが叱られるのでせう。私達は血を引いてゐるので愛ちやんが、やつぱり私の方の事を余計氣にかけるのでせう。で一軒に主人が二人出来る様な具合になるのね。愛ちやんも今日と云つて大連に歸す事は出来ず……私どうかするわ。」

「私どうかするわつてどうするの」と姉がきいたけど、定子は黙つてゐた。何にも知らずに坊やはすやすやとねてゐた。

同じ様な會話が何度か繰り返された。妹がシクシク泣いてゐた。やがて叔母はなぐさめらしい言葉を曰つて歸つて行つた。

其の晩、夜をそくまで定子は日誌に何にか書きつけてゐた。

四

次の日は大變そこ冷のする日であつた。昨日の事があつたので、私は眼はさめたが夜具の中で色々の考へにふけつてゐた。

「妹をいまづ大連の方に歸す」かう考へて見てもそれは兄や姉が許しさうにもなかつた。もとく妹をこつちに呼んだのは縦令それが名義だけであつたとしても、妹を大連の方で、みぢめな生活をしてゐる事から救ひ出すと云ふのであつた。

其の頃父は今迄經營してきた製材會社を共同してゐた材木商に全然とられて——尤も二三千の金は手に入つたと云ふ事であつたが——一文なしになつてゐた。それで會社内の住宅も人手に渡り、一家族そろつてよく海水浴に出かけた老虎灘と云ふ別荘地に引き移つてゐた。父のもくろみでは夏の中に色々のごたくをかたづけて、又大連に出て來ようと言ふのであつた。しかし爲す事がそれからそれと豫定が狂つて、いつか冬が近寄つてきた。妹からの手紙に、

「今日は〇〇さんがいらつして、お父様と二時間近くこそくと話してゐられました。何でも私の事に

關してゐらうございます。どこか奉公にでもやられるのではないでせうか。家に來る度に私の顔を見て行きます。なんだかいやなんです。いつでもニット笑つてゐて……」それから數日たつてから「あの私の奉公の話はだめになつた様です。小間使と云ふ名で〇〇さんの所へ上る事になつてゐた様ですの。お金の抵當の代りだつたのではないでせうか。があの人の來る時は私はいつもそつと逃げてゐました。挨拶さへ余りしない様にさけてゐました。それで私を余りこゝろよく思はないのでせう。それに實はお父様の要求が少し多すぎたらしいの、でなにか具合が悪くなつたのでせう。澤山いろんな人が來てよ。その度にお父様はXはい、人だ、あれが一つうんと言つたらもう確かなものだ。Yは滿鐵の方に傳手があるから、とかおつしやいますがいつも駄目な様です。お父様は段々家にゐて黙つてゐらつしやる日が多くなります……。」

そんな手紙を見て兄などはひどく心配して電報をNと言ふ大連の友人に打つて、そこから内々妹をたてせようとか、いや、矢張りおだやかに父さんの方へかけ合はせようとか、妹が今にでも死にさうな騒！そんな事のあつた後で「立派に育てて御覽に入れます」と言つて東京に呼び寄せたのであつた。それで、今さら都合が悪いと言つて大連に歸す事も出來なかつた。が姉の話によると妹と兄とは生來氣が合はないらしかつた。「丑の歳のものと子の歳のものとは氣が合はないと云ふが、私には愛子のする事は皆氣に入らない」などと兄が言つた事もあるらしい。で一番いゝのは妹を嫁にやる事であつたが之は今日と言つて今日に間に合ふ事ではなし……。」又昨日姉も言つてゐたのだが、家では早くから母をなくした爲に、自然姉妹仲がよかつた。姉は小學校に通つてゐた。おまけに二部教授をやつてゐたために、一寸の暇もなかつた。夜おそくまで作文の点をつけたり、お習字を直したりしてゐた。その側で妹が下の

用事もほつておいて袴を疊んだり、綻びを縫つたりした。で兄が呼んでも返事だけしておいて、すぐには行かぬ事もあつたらしい。兄にはそれが氣に食はなかつた。何と言つても自分はこゝの主人である。主人が呼んだら、すぐ出てくるのが當り前ではないか、誰が主人だか解らない。兄は前にも言つた様に怒りつばい人だつた。で妹もなにかしからはしまいかとびく／＼もので自然逃るやうになつてきたらしい。いつかこんなこともあつた。

妹は台所で朝食の仕度をしてゐた。大人數の所へ下女がゐなかつたので「てんでこまひ」をしてゐた。兄は其の前日に、明日は朝早く外出するから朝食を六時頃にして呉れと言つてをいたさうである。冬の朝の六時はまだ暗い、で五時頃から起きてせつせとやつてゐた。かまごの火を引いて二階に火種を持つてきた、火鉢について、鐵瓶をかけるのまゝ下に降りていつた。それが又具合悪く消えてしまつたと云ふのである、不經濟と云ふのでかた炭ばかり使つてゐたし、まだ味噌汁も出來てゐなかつたので急に火を移したと見える。妹は二階の鐵瓶は熱くなつてゐるとばかり思つて下の湯で仕度をしてゐた。

兄は起きて火鉢の側に行つた。いつもの通り湯を吞まうとしたが火が消えてゐる。少し氣嫌を損じてしまつた。ブツ／＼言ひながら一人で剃刀を探して顔を剃つた。寒いので手はふるふる、鐵瓶のお湯は水も同様であつた。それでもやつと剃り終つて下に降りていつた。あつたお湯で顔を洗はうと思つてゐたのだらう。が台所のお湯は妹が今丁度使つて新しい水をさしたあとであつた。

つづけ様に當が外れたので、兄は堪へ切れなくなつたと見える。「今すぐ沸きますから！」としきりに詫る妹の言葉には物も言はずに、冷水で顔を洗つた。洗ひ了るとそのまゝつと二階に上つてしまつた。そして今起きたばかりの姉を捉へて、「お前もお前だ、いくら普段の身体と異ふと云つても、夫が起きて

から起ると云ふ法はありますか。今日わしが外出すると言ふ事は解つてゐたし、顔を剃る事も解つてゐるぢやないか。それに湯も沸かしてない。一体、主人でこんなものなんですかね、愛子にもよくさう言つて置きなさい。」かう言つたと云ふ事である、そしてまだわざと拭いてない顔と手をブル／＼とさせた。姉は何と言つていゝか解らなかつた。

之に類した事件はちよい／＼あるらしかつた。

私はこゝまで思つてきて、そつと溜息をついた。するとそれが白い霧の様に立つて行く。つめたい冬の朝の日は、兄の方の部屋には指し込んでくるが、この北向の私達の部屋は、凍る様な寒さである。外では小供達がもう朝早くから紙鳶を上げるので大騒ぎでをしてゐる、しかしそれが妙に淋しく家の内に響いてくる。

「もういゝよ……放して……や上つた／＼」さうかと思ふと「駄目だよ、そんな持方をするから。」

私はやがて二度目の眠に落ちてゐつた。朝早くから下らぬ事を考へてゐたので私はねむかつたのである。

妹が起しに一度やつてきたが、頭が痛いと言つたら、それからあとには誰も起しに來なかつた。

ふと眼が醒ると隣りの部屋から兄と姉との話し聲が聞える。なんでも其の日、私のまだ眼を醒まさないうちに、定子は外出したさうである。「わしが『早くから何處へ行くのかへ』と言つたら『私の家を探しに行くのです』だ。かう言はれたら私も二の句が續けなからうぢやないか。よくもまあ、あんな女があつたものだね。」とあとで兄は話してゐた、が今其の姉が歸つてきたのであつた。

「よくまあ考へてごらん、あれが出て行くとか出て行かぬとか、そんな大きな問題ですかね。」兄が何にか言つてるなど私は思つた。

「そりや私も悪かつたさ、がお前もあんまりいゝとは言へまいぢやないか。姉さんは具合が悪くて寝てゐる。二階にゐたのは小林のお叔母さんだけぢやないか。お壽司を注文した。わしは皆など一緒に食べたかつたのだ。いつも小林が来る度に、姉さんは寝てゐるし、わしは下で仕事をしてゐるし——でたまには皆などゆつくり楽しんで食べ様と思つたのさ。きのふ小林も言つてゐた様に、あれの来る度に、いつでも見せるのは喧嘩ばかりなんだからね。壽司が來ても聞えなかつたのか誰も台所に行かうとせぬ、でも今に誰か出てくるだらうと思つたが、誰一人出て行きやしない。叔母の手前もあるさ。妻は寝てたから、大きな聲を出すのも氣の毒に思つたので、私は梯子段の所へ行つて、二三度愛子くと呼んで見た。が下ではキヤツく騒いでゐる聲の外、聞えないぢやないか。梯子段で一人ぼかんと立つてゐるのも馬鹿くしくなつたから、どうでもいゝわい、鼠でも引いて行けばいゝ、俺は火燧にでもあたつてゐよう、さう思つて引き返さうとしたが、やはり二階にとつてきておかうと思つて降りていつた。所が下の段を踏み外していやつと言ふ程、尻もちをついてしまつた。其の時お前達の方で何か面白い事でもあつたのか、どつと笑ふ聲が聞えた。私は急に「俺の事を笑つてゐやがる」と思つたが、お前達の誰かあの音を聞いて飛んで來るだらうと思つて、尻もちをついたまゝ暗い所にちつとしてゐた。どこからも何の聲もしない。誰もやつてこない。私はもうすつかり馬鹿にされきつた様に思つた。お前達をどなりつけてやりたかつたが、黙つて壽司を持つたまゝ二階に登つてしまつた。それから今日の事なのさ、で私の悪かつた事は充分あやまる。がお前も出るの出ないのと云ふ事柄ではないぢやないか、と私は思ふよ。」

定子はうんともすんとも言はなかつた。だまつたまゝ袴の紐でもちつと見てゐたのだらう。何だか噁り泣く様な聲が聞えるだけだつた。私には兄が可愛さうに思へだした。出來るだけ堪へ忍ばうと思ひながら一寸した事からついガミくと言つてしまふ。いざとなると血を引いてゐる私達は自然と一つになりやすかつた。私達にいやな思ひをさせると、結局兄一人がつまらない思ひをしなければならなかつた。その事が又兄の心を苛立たせたらしい。

「俺は一人だ、あいつ等は大勢だ妻だつて俺に身をまかせてはゐるものの、しまひには定子達の仲間になるんだらう。くだらない。」かうした兄の心が私達の心にも痛ましく響いてこすにはゐられなかつた。それで家が何となく面白くないのだ、と思つてゐる時に兄は又次の様な事を言ひ出した。「出るの出ないのつて、そりや他人に言ふ言葉でせう。いやしくも兄弟になつた上は、お互の恥を隠し合ふのが本當ぢやなからうか。今こんな事で別れたら、第一私がお父さんに對して申し譯が無いぢやないか。立派に愛ちやんを育てて見せますと云つて置きながら、こんなにして分れてしまつては私が何と言つてお詫してよいものか。」

私はふと下で、妹が台所の冷い水で茶碗を洗つてゐるはしまいかと思つた。すると急に、女學校に通はせてやると言つておきながら、いつまでも家で下女がはりに使はせておく兄が、またうそつきの様に思はれる——

定子が口を開いた。

「どうせ私が家にゐると面白い事はないんです。私の爲に、愛ちやんが叱られるも同様なのです。私な

んか、どうせ獨身なんですから、やつぱり一人暮らしが丁度なんぞせう。私にはお面はかぶれないのです、不具かたはなのね、人とお上手お上手につき合つて行けない性なんだわ。」

姉はたうとう音をたてて泣き始めた。私の耳は鋭くなつた。夜具から出ようか出まいかと苛立つた氣持で溜息ばかりついてゐた。

「そんな事を思ふからいけないんだよ。誰が悪い、彼が悪いと言ひだしたら限りはないんだ。皆が悪いんだ、俺も悪い、お前も妻あねも、愛子も亦芳雄も。」

私にはしかしさう云ふ兄が信ぜられなかつた。其の言葉があまり有難過ぎてゐた。俺も悪いと云ひながら、お前の方が餘計悪いと言つてゐるのではないかしら。いや心の中では苦しんでゐるんだらう、さう思つてもやつぱり私とは性の合はぬ人らしい。いつか定子あかねが私に話したが、私が文科に改りたいと言ふ様な事を一寸姉に葉書で書いてやつた所が、それが兄の目に入つて大變怒つたさうである。

「お前達は、お前達だけでやつて行けると云ふならやつて見るが、人をだし抜いて勝手な事はかりする。」

私には兄がいゝ人か悪い人か解らなくなつた。

「わしは今用があつて出て行くが、よく考へてごらん。あれが出るの出ないのと云ふ問題かどうか。」兄はかう言つたまゝ外出した。

私はあとからそつと外に出た。あたたかい日が照つてゐた。電車が轟々と走つて行つた、塵が立つた。しかし太陽は照つてゐた。温い風も吹いてゐた。私はどこまでもくゞと歩いて行つた。

それから二三日たつた。定子あかねは思ひ返したのか、黙つたまゝ家に居た。其の頃の彼の女の日記にこん

な事が書いてあつた。

「兄はいゝ人に違ない。芳雄によくすれば芳雄は坊やによくするにきまつてゐる、と私の前で言ふ人だ。人に信賴の置ける人は、私には羨ましい。私は兄さんの様になつて見たい。が私の心には何にもかにもが汚く見える。自分の心までがきたなく見える。昨日今日の事までが、わざと自分で芝居を打つてゐる様な氣がする。私には何にもかも裏から見える。愛ちゃんも可愛想なので私は家を出たいと、本當に思つたのかしら。いゝえ自分が兄さんに馬鹿にされた様な氣がして、家を探しに行つたのではなからうか。私の心は本當に捲ちれてゐる。苦しい、いつになつたら、素直な心を持ち得るのだらうか。」

五

愛子は頭が痛いと言つてあの日から二三日中寝てゐた。兄は別に藥を呑めども言はなかつた。「どうした」と勞る様な言葉一つ言はなかつた。それが私には兄の癩癢かゆみとほか思へなかつた。しかし妹は今日がもうすつかり具合が好いと云つてお風呂の仕度なぞしてゐた。其の日は天氣もよかつたせゐか家中の人が浮々して見えた。物干には珍らしく洗濯物がゆれてゐた、冬と言つても暖い日の影が障子に指して何となく梅でも咲きさうな氣持になつてきた。兄も坊やも本當に楽しさうであつた。二人は今日寫眞をうつしてきた。それで、其の日の夕食は珍しく話がはずんだ。大連の父の事、或は來年學校を卒業してからの私の身の振方、妹の結婚の事と、色々な事がまるで他人の事かになかの様に口から軽く流れでた。

妹の話と言へば、こんな事もあつた。なんでも三菱の人で、もう四十を二つ三つ越した人が、叔母の

手から妹をほしいと言つてきた。それもただ、叔母からたつた一度妹の話しをき、彼の女の十六の時の寫真を見たばかりらしかつた。別に面倒な儀式は不要で、着のみのまゝでいゝ、支那に出張を命ぜられてゐるから、行くまでに結婚したいと云つてきた。

其の話をあつた時、妹が「私に一度も會ひもしないのに、お互の心も解らないのに私を欲しいと云ふ様な人は嫌だ、」と言つたと云ふ事、姉もその縁談には餘り氣のりはしてゐなかつたが、妹からこんな姉の所謂「私なんかより、よっぽどしつかりした答」を得ようとは思はなかつたなぞと言ふ話しも出た。私はいつか妹が「電車に乗る時、若い男の人の前にゐるとすぐ乗せて呉れる、」と言つたのを思ひだして淋しい様な氣持さへした。女の子は無邪氣なのがいゝ、と思つてゐる間に、妹の頭は獨りでドン／＼進んでしまつてゐる。子供は親の云ふ事はきかなくても、大きな自然の言ふ事はきいてゐる。とにかく誰も樂しさうであつた。白木と三越の優劣論が姉と定子との間に起つた「ちや姉さんは結局、三越の建物が白木より大きいからと言ふ事になるのね」なぞと珍らしく定子が洒落なぞを言つた。そこに妹がやつてきて風呂が沸いたと傳へてゐつた。

「大晦日に入つたきりだ。坊やも入れてやらうかな、随分入らなかつたから。でも風邪でも引かす事だし。」

「でも大丈夫でせう。暖くしてすぐ寝かしてしまへば。」

姉は坊やをタヲルにくるんで兄のあとから下に降りていつた。下の方ではがた／＼音がしてゐた。もう湯に入つた頃だらう、坊やが赤くなつて、お湯をバチャ／＼やらしてゐるだらうと私は思つた。

「定ちゃん、今日は兄さんが御氣嫌でいゝね。」

「いつもかうだといゝんだけど、いつ御天氣模様が變るか解らなくつて困つてしまふわ、……私お膳を片付けるから、芳ちゃんすまないけど、あとを掃いて頂戴。」

私は箒をとりに行かうとすると、姉が突然梯子段を上つてきた。「姉さん、どうしたの。」私は驚いて訊ねた。

「お湯が丸で水、よくかきまはして見もしないで、沸いたなんか言ひに来たのよ、きつと。」姉はくやしさを顔をしてゐた。

兄は坊やを抱いたまゝ湯に入つた。一寸の間は、自分の身体が冷えてゐたので、餘り氣もつかかなかつたけれど、下の方はまだ水の様だ、一端水につかつたから出る事も出来ずと云ふのである。

「折角、今日は氣嫌がよかつたのに、またいやな顔をされる。こないだの事もあつたんだから、愛ちゃんも氣をつけてくれればいゝのに。」さう言つて姉はまた下に降りていつた。

「愛ちゃんも愛ちゃんだ、今に兄が何とか大きな聲でゑなるだらう。」さう思ふと私の心は妙にドキドキし始めた。定子も定子でどうしようかと言つた様な顔をしてゐる、そこらにちらばつてゐる坊やの着物の意味もなしに手にとつてみたが、又そつと下に置いた。二人は顔を見合せた、困つた事になつたと云ふ表情がお互の顔に讀まれた。鐵瓶を持つたまゝ、妹がそこに上つてきた。そして私達を見るなり「ちやんと湯加減をはかつてから言ひに来たのよ、そんな水の様な事なんか、ありやしないわ、人の事だと姉さんまでがちきになんとか言つて、」もう妹は泣いてゐた。姉が別にどうもしなかつたのに、てつきり吐られるものと思つて、言譯をしてゐた。

可愛想と言へば可愛想であつた。しかし折角楽しくやつてゐたのに、妹のためにすつかり厭な目を見

せられるかと思ふと私はかへつて妹の泣くのが癢にさはつた。

「でもまるで水の様ぢやないか、又兄さんになんとか言はれたらどうするんだい。」

「ちや芳雄、自分できはつて見て、水の様だなんて。私丁度いゝ加減だと思つたから、沸いたと云つたんだわ。それに芳ちゃんまでがそんな事を言つて。」

「生意氣言ふな」私は思はず大きな聲を出した。「姉さんが水の様だと言つてゐるぢやないか。」私は妹をつきとばした。妹はそこに泣き伏したらしい。私は下に降りて行つた。

湯殿には兄と姉がゐた。兄は坊やを抱いたまゝ湯につかつてゐた。「兄さん、お湯が丸で水の様ですつてね、愛ちゃんも亦どうしたんだらう、搔き廻して見なかつたのかも知れない。しやうがない人だな。もし坊やでも悪くなつたらどうするつもりなのだらう。」と私はつけ加へた。しかし兄は案外怒つた様な顔もしてゐなかつた。

「いや、そんなに冷たくもないよ、わしは之で我慢するがね。しかし坊やがどうかと思つて。なにしろ下が丸で水の様さ。からだ馬鹿になつてゐたものだから、うか／＼と坊やまで入れてしまつた、すると餘り冷めたいので、ドキツとしたよ、坊やに又風邪でも引かすと事だからね。どん／＼あつたかくなつてくるから大丈夫だらうがね。」

そこへ定子も泣いてゐる愛子を置いて降りてきた。

「ごんだ事でしたね、お寒いでせう。愛ちゃんもどうしたんでせうね。」さう言つて定子は下におちてゐた瀬戸物の金魚をとりあげて、色々坊やをあやしだした。私は兄があまり怒りさうにもないのにやつと安心して診察室に入つて行つた。そこは外の部屋よりも暖かかつたので、やがて兄が、その部屋へ風

呂から上つてくるだらうと思つたからであつた。

「兄は今あんなに、大して怒つてゐる様子でもないが、もし坊やが少しでも悪くなつたらそれこそ大變だ。またあのガミ／＼と厭な顔をされる事だらう。あいちゃんも頭が痛いなんて言つてたんだから、風呂を沸すのがいやならいやと俺に言つて呉ればいゝんだ。それになめな顔をしながら、やつてるもんだから、こんな事になつてしまふんだ、しやうがないな。」診察室のガラス戸に、風呂の煙突の火が、バツバツとうつゝてゐた。それが妙に悲壯な感じを起させる。冬の休みに二週間程過した、之の普通の人々の群からの一つ／＼の出来事が矢つぎ早に頭の中に浮んできた。それは皆つまらない出来事であつた、しかし人の心をたたきつけるには充分であつた。人はどこまで自分を捨てる事が出来るのだらう。又捨てなくてはならないのだらう。兄が餘り怒らなかつたので、私は馬鹿におべつかな事をしてしまつた、と云ふ氣がチラツト心に浮んだ、しかしそれは又すぐ消えてしまつた。

こんな事を思つてゐる所へ、眞赤な顔をした坊やを抱いて兄は入つてきた。「すぐ風呂が熱くなつたので、まあよかつた。一寸坊やが青く見えた時には本當に驚いたがね。」姉は兄の言葉をうけついで、

「でも、本當によかつたわ、愛ちゃんも少し早く言ひ過ぎたのね。火がよく燃えてゐたので、今言つておけば、貴方が入る頃には丁度いゝ加減になるだらうと思つたんでせう。で氣をきかすつもりで沸いてゐますと言つたらしいのね、所があなかがすぐ入るし私は水の様だと言つて二階に上つて行くし。愛ちゃんはおつかりあなたに叱られるものと思ひ込んでやつたのね。可愛相にまだ泣いてゐてよ。近頃は少し氣がいら／＼してゐるんだから、芳ちゃん行つて何とか言つておやり。」

兄は「六時間たつて反應が無ければ大丈夫だが」と言つてゐた。

私は妹の所に行つて「愛ちゃん、もう泣くのはおよし、兄さんだつて、怒つてゐやしないんだから。叱られもしないのに、自分で泣く奴があるもんか。」と言つて見た。しかし妹はやはり泣きつづけてゐた。私もさつき、彼女を叱りつけたのを思ふといつともなしにだまつてしまつた。

それから二三日たつた。坊やは別に病氣になりはしなかつた。私はK市に歸つてしまつた。今でも同じ様な事が時々あるのではあるまいかと思ふ。

五、二四、一九二〇

甕

北村喜八

或日、A君が、かなり大きい水甕を、私のところにもちこんできた。青銅製で、ところどころに、青い錆がついて、壺といひたい様な形をした、はなはだ寂びた古めかしいものだつた。

「どうだ、素敵な堀り出しものだらう」

A君は恚う言つて、うれしさうに、今一度、その甕をなでまはして、私の手にわたした。

「寂びてゐるだらう。時代づきだせ。花瓶にはこの上なしといふところだらう。」

A君は、恚う附け加へて、甕をなで廻してゐる私の動作を、微笑し乍らながめた。

その甕はささへてゐるにはかなりの重さがあつたので、私は、すぐとそれを卓の上に乗せ、上から、横から、驚異したかの様に、妙な形や、青い錆の色などをながめざるをえなかつた。實際、日本製のものともみえないこの甕には、何處か異様な、心を牽くところがあつた。併し、骨董品に對して氣狂じみた愛著と一種の幻覺イリュージョンさへ夢みるA君の讚賞するものとして、それ以上の尊敬を拂はせられた。

私が昵とそれを見てゐる内に、甕の下部の方に何か彫刻してあるのを發見した。よくみると、*Ans est celare artem*と讀める。

「何か書いてあるぢやないか」

駭いて、思はず私は叫んだ。

A君は満足さうな微笑を浮べて、言った。

「君がそれをめつけるのをまつてゐたのだ」

「Ars est celare artem」何のことだ」

「拉丁だらう」とA君は答へた。

「拉丁のことは僕だつて、想像つくが……」

「僕も拉丁は知らないのだ。併し、Art consists in hiding art だつたらうだ」

「Art consists in hiding art だつて——」

「藝術は藝術を隠すにありとでも譯するのだらう」

「一寸むづかしいな。一体、どんな意味なのかね」

「さあ——」とA君も首をかたげた。

(藝術は藝術を隠すにあり)——考へ様によつては、いろんな意味にとれる。私には、どうしても、しつかりした意味がつかめなかつた。併し私にとつては、謎語に等しいこの言葉が、妙に、心を牽いた。そして、この死物の様な骨董品を今更の様に、不思議な存在として、みかへさねばならなかつた。

「君、一寸、考へてみ給へ」

とA君は暫時後口を切つた。

「すばらしい詩人的の想像や空想を、この甕に就いて恣に働かしたら、どんなだらうね、この一個の甕

が秘めて語らぬ歴史には、無限の興味と好奇心キユリオシナイとが湧くね。この甕を有情のものとすれば、久しい年月の間、その眼に映じたさまざまの人生の姿や、運命の數奇は、詩人の空想以上だらう」

A君は恁う言つて、私をみた。そして言葉をついだ。

「僕は、これを土耳其のものかと想像してみた。亞刺比亞のものと想像してみた。又、拉丁文明の遺物の断片とも思つてみた、考古學者ならぬ僕には何ともいへないが……。拉丁文字から推して考へると希臘のものだらう。美しい模様のある絨氈の敷かれた廣間の片隅に、匂こぼるる花一ぱい投げ入れて、この甕が置かれてあつたかもしれない、それは月の夜で、青い光が、窓から流れ入り、その光に酔うた様に戀に狂ふ處女が、この花瓶の花に、戀人の事を思ひ乍ら、熱いキスを與へたかもしれない……。或は、屋根裏の哲人が、一生涯、孤獨と寂寥の中に、この甕をみつめて死んだかもしれないよ。併し——甕は永久にとけぬ、秘密を胸に抱いて、冷笑する様に、ここにあるのだ、一寸にくらしいね。——何によらず、或對象に、あんまり熱中したり、愛しすぎたりすると、一種のイリュージョンが起つて、對象をそのものより以上のものとして、胸に住まはせるものだ。そして、そのイリュージョンに酔つて、満足を感じる。僕のこの甕に對する氣持は、丁度、この感情かもしれないのだ。しかし、何故か、不思議に、この甕が、心をひいてたまらないのだ」

A君は夢みる様な眼差をした。そして、不思議なことに、A君のこのイリュージョンが、私の心にも働かかけてきた様だ。言葉をかへていへば、私はこの甕に何かしら深い内面的一致を感じさせられた譯だ。私は、A君に無理に願つて、數日貸してもらふ約束をした。

A君が歸つた後で、私は、かなりの金を拂つて、アネモネや、チュリップを、どつさり買ひこんでこ

の甕になげ入れ、情人か、親しい友人を待つ様な氣持で、それを、書齋に飾つた。丁度女が寶石入りの指輪を身につけて悦ぶ様に、あくことなくこの甕をながめやつた。得意と誇りと混じたとてもいふべき微笑が自づとのぼつてきた。

それから、數日後のことだつた。珍しい友人の訪問をうけた。その友人は、朝鮮や支那の方に出かけてゐて、別れて四年振りで逢つた。

その友人が、例の花瓶を、不思議さうに眺めてゐたが、どうして、こんなものを手に入れたかと訊いた。先方が、珍奇な骨董品に對して敬意を拂つてゐるのだと思つて、いささか誇り氣味で、A君の話をした。

友人は可笑しさを押へたといふ様な顔で

「君、それは、ためですよ、ためですよ」と言つた。

私には、その意が通じなかつた。

「ためて何ですか」

「ためつて、糞ためですよ」

私はすつかり駭いて了つた。

「何、糞溜ですつて、そんなきたないものなんですか」

「え、朝鮮のためは大抵これですよ」

私は深い溪底へ不意打で蹴落された様な氣がした。

しかし、私には *Ars est celare artem* や *らふ* 字が氣になつた。

「*らふ*、*Ars est celare artem* なんて字が刻つてありますよ」

その友人も一寸不思議さうにその甕をみたが、

「何、これは後から彫つたのですよ。よく注意してごらんさい、もし初めから彫つてあるのなら、字のところにも錆がついてゐていゝ譯です。たしか後から苦心して彫つたらしいね」

と軽く否定して了つた。

たしかに、この友人の言葉は、A君や私のこの甕に對する愛執に、痛い打撃を與へる「宣言」であつた。私はまだ咲き誇る花を、惜しい乍らに棄てて、甕を部屋の外に投げ出した。どうすることも出来ぬ様ないまいましたい感じがした。

私は、明らかに、「幻滅の悲哀」を感じた。いや、それ以上の「幻滅の皮肉」を感じた。怒りを通り越した苦笑を禁じえなかつた。

その友人が歸つた後で、私はたまらない寂しさを味つた。それには、自分の愛するものを無慘に破壊された悲しみもあつたに相違ない。又、誇つてゐたものが、誇るに足らぬものであることをみせつけられた忌々しい恥羞の念もあつたに相違ない。又眞價のない、取るにも足らぬものが、一寸したはずみやきつかけで、思ひかけぬ箔がついて、高いレベル迄もちあげられることの多いのを、又、さうした愚さを犯す人間の性情を罵りたいやうな、あはれみたいやうな氣持もあつたに相違ない。しかし、それ以上に、何だか人生の或一面をまざまざとみせつけられた様な皮肉を味つた。若い偶像崇拜者が自らの偶像

を破壊されたより以外の涙であつた。それは、烟の様に、たましひの底にふれた。

その後A君が来た時、黙つて、例の甕を返した。A君は一寸妙な表情をした。恐らく、私から、甘い賞讃の言葉でも期待してゐたのかもしれない。私は、A君のイリュージョンを流石に破壊する氣になれなかつた。で、朝鮮から歸つた友人の話は、一言も口にしなかつた。只、*Yes*云々の字は、どうして彫られたのだらうと訊いてみた。ところが、その答はあまりに意外であつた。

「何に、あれは、僕が彫つてみたのさ」

「へえ——」

僕はしばらく、呆氣にとられて了つた。

「あの甕に時代をつけてやらうと思つたのだよ」

「悪戯でか、それとも本氣なのかい」

「本氣とも」

A君は真面目ななかに、皮肉な微笑を隠した様な顔をした。

「ミゼラブルだね」と私は言つた。

A君はこの意が分つたのか分らないのか、黙つて笑つた。骨董品によりよき箔をつけようとして、あんな字なんか彫りこむアマーチュエアの心を形容しての言葉なのだ。

A君は、その甕をかへて、歸つた。

その後、A君の口から、つひぞ、その甕のことをきかないし、又、A君が何處からあれを求めてきたか、未だに知らない。而し、時々、A君が、私をかついだのでないかと思ふと、ミゼラブルといふ言葉が、反射的に感じられる——私自身に與へられたかの様に。

思ひ返すと、A君の方が、役者が数枚上で、念入りの上の念入りの悪戯をして、皮肉の微笑と快味をひとりの心の中で享樂してゐた様な氣がしてならない。さうだとすれば、A君がにくらしいといふよりは、まんまどかつがれた自分自身が忌々しくしてならない。こんな時、「幻滅の皮肉」以上の「皮肉の悲哀」を感じる。

一九二〇、五、五

この作後、友人から名士の逸話にこれにした話があることを聞いた。平田篤胤もこれに類した話を書いてゐるさうだ。何でもないことだがこぼらないと氣がすまなかつたから、これ丈つけ加へておきます。

無盡講

宇田川貞一郎

令二の友達の間にも、青寫真で繪をうつすことが、はやりだした。最初の一人は、その道具や材料を、町から買つてきて、皆の前で、いろいろな繪をうつしてみせた。子供達は、忽ち、非常な興味を、それに惹かれた。やがて、一應、その寫し方に得心が行くと、各自に、道具を買ひこんで、自分で試みはじめた。

令二も、勿論、その仲間入りがしたかつた。彼は、毎日のやうに、母に強請んだ。しかし、母は、「今にね」と言ふきりで、とりあつて呉れない。と言つて、令二には、父や祖母は、なんとなく恐しくて、物ねだりなどはできなかつた。その眼の前に、でるのさへ、おのづと氣が怖れた。それで、祖母や父に知れないやうに、そつと、母にだけ願ふのであつた。しつこく言ふので、母も同じ様な返事をしてゐられなくなつたと見えて、「一体、その道具と言ふのは幾何位なの？」と訊いた。令二は、棒が幾何、種紙がいくら、原畫の紙がいくらと、明細に説明してきかせた。そして、今度こそ、間違ひなし買つてくれると思つた。が矢張、駄目であつた。「お父さんや、お祖母さんが、そんな玩具なんかいけなないと仰言

るから、おやめ、ね。」母は、いつものやうに、令二の申出をことわる最後の手段として、父と祖母とを引合にだした。令二は、それをきくと、ごんなに勢ひこんで頼むことも、駄目になつたといふ事を、その時分のきまりとして承知してゐた。然し、母としては、自分の願をきく、届けてやりたいのだけれども、祖母や父がいけないと言ふから、それができないのだといふ風に、母の言葉を理解した。そんな時、令二は、俯いた儘で、「前のお父さんの方がいいなあ」と言つた。すると母は、屹となつて彼をたしなめた。そして、その後で、ごこか淋しい顔をした。

令二はお民の連子であつた。先の父が、三年前に死んで後、まもなく、母は彼を連れて、今の佐山の家へ入つた。母と新しい父との間に、男の子が生れた。祖母は、信心深い人で、始終、遠近へ參詣したり、佛壇の前で、勤行したりしてゐた。その閑々には、父の異ふ弟を、抱いたり、負つたりして慈しんだ。けれども、令二には、この祖母の三角の眼が怖かつた。新しい父の矢鱈に、鋭い聲も、無氣味に耳についた。家の事を言ふと、今の家は、前の家よりも、はるかに廣かつた。おまけに、白い壁の倉まで建つてゐた。彼は、子供心にも、今の家は前の家よりも大盡なんだと思つた。けれども、彼の子供らしい慾望を満たしてくれる点から言ふと、決して、大盡でもなんでもなかつた。彼は、前の父の時分には、玩具でも物見でも、子供としての慾望は大抵達せられた。それが今の家へきてからは、殆どすべて、封せられてしまつた。彼は、始め無性に窮屈を感じた。その窮屈を感じなくなつた頃には、祖母は、よく令二や母の前で、「この子は、妙に人の目付きや顔色ばかり伺ふ子だね、もつと、はきくしなにかね、子供の癖に、變にひなつこびて……」と言つた。その度に令二は、祖母をこの上なし憎い者に考へた。青寫真の事も、心の中に募るだけで、どう仕様もなかつた。

春も深いある日の午後であつた。

令二は學校から歸つて來ると、父から、今日無盡講へ行けと命せられた。無盡に行くのは、大抵、祖母の役目だつたが、祖母がお参りにでも出たときは、誰か代つて行つた。令二も、今までに二三度やらされた事がある。無盡講と言ひ條、世話人が行届いた面倒をみてくれるので、子供でも、子守でも、役だけは果されるのであつた。その日、祖母は、お詣りで留守だつたし、父も外出するので、令二が行かされることになつた。

彼は、掛金帳と掛金を包んだ風呂敷をもつて、澁々、暑い程に感じる日盛りの外へでた。

二

無盡が濟むと、令二は人先き、歸りの途に就いた。町を出端れて、八幡の櫻道へ入ると、路の兩側に立ち並んだ櫻の若葉が、纏れ合ふ程に茂つてゐた。その若葉は西へまはつた陽を浴びて、鮮かな緑に透いて見えた。地には、更に明るい緑の影と、葉の隙を洩れる光との、濃いくまが落ちてゐた。そして、微風のわたるたびに、その光と影とは、金と碧との、熱のないほむらのやうに、地の上に揺れた。あたりには、仄かに、新しい樹の香が漂ひ罩めた。令二の草履の踵からは、もう砂ほこりは、あがらなかつた。彼は、歌を唄ひながら、その若葉の墜道をぬけた。

それから、路は、開けた田圃の中や、桑畑や麥畑の間や、雑木林を通つてゐた。やがて、路の中途まで來た時分であつた。路の傍に、榛の樹が五六本立つてゐた。その樹の下に、二人の子供が、青寫眞を

とつてゐた。恰度、二つの枠が、硝子の面を陽に向けて、榛の根方に凭せかけである。令二は、二人の子供に、氣兼ねしながら、そつと覗いてみた。一方の繪は、高い下駄を履いた若者が、橋の欄干の上に飛び上つて、扇子を投げてゐる、その上に、牛若丸とかいてある、も一つの繪は、勇ましい紛装いでたちをした人が、雪の中に立つて陣太鼓を打つてゐる。そして側に、大石良雄とある。令二は、一寸、二人の方をみてから、又、体をのりだして、近くに繪を覗めた。

「蔭になつちやいけないよ」

黒い原書の紙をボール箱に入れてゐた一人が、咎めるやうな口調で言つた。令二は、慌て、首をひいた。それでもまだ自分を睨んでゐるので、厭な氣持になつて、こつちも相手を見据えながら、後退りにその樹の側を離れた。

暫くすると、彼は全く別人になつてゐた。三四時間忘れてゐた日頃の慾念が、今、眼の前に視ただけに、激しく、切に湧き上つてきた。彼は、頭を伏せて考へ、歩いてゐたが、ふと立止つて、先刻、世話人の關口の小父さんの包んでくれた割返しかへしの金包をひらいた。そこには、いろいろの種類の銀貨が光つてゐた。そして一番の小錢は、六枚の白銅であつた。彼は、右の人差指で、ちよつと、それを突つついた。チャリと音がした。彼は、はッとした。それから、彼は、さつさと、金を無雜作むざさくに包んで、活潑に歩きだした。が、ちぎりに歩調は又莫迦に、緩くなつてしまつた。

彼の頭の中には、前の父の生きてゐる頃、白いフランネルの胸懸をして、唐縮緬の帯を締めた自分の事が、想ひだされてゐた。彼の胸懸のポケットには、屹つと、いくつかの銀貨が、チャラ／＼鳴つてゐた。その時分の彼にとつては、銀貨も銅貨も、物品の代償となるよりも、それ自身直ちに、彼の玩具で

あつた。ある時は、彼のポケットの中で、手でかきまはされて鳴つてゐた。ある時は、帛の端切へ、飯粒で貼りつけられて、勳章代りに、彼の胸間を飾つた。又ある時は、赤い絹糸で、連絡されて、椽側の板の接目に沿ふて、汽車の代りに曳かれた。汽車の代りと言へば、その時分、六枚の白銅を持つてゐたことがあつた。その一枚を、板の接目へ、押しこんだところが、どうしてもとれなくなつて、サーベルの切先まで、こち上げやうとしたら、逆に、椽の下へ落ちてしまつたことがあつた。

そんな風にして、彼はよく貨幣を弄んだ。が、それを使ふことは、殆どなかつた。唯、時々、種類の異つたのと、とり換へて貰ふだけであつた。とにかく、以前の父の時代には、そんな自由、我儘が許されてゐた。

彼は、子供心の、断片的に、こんな昔の記憶をよび起したのである。今の彼は、買ふための錢が欲しかつた。賣つてゐる場所も、買ふ品物もよく知つてゐた。

地面を賸めて歩いてゐたが、胸がどきどきしてきて、顔をあげてみると、自分の家の黒い門と、むかふから来る二人連の男とが見えた。彼は、故意と、歩調を緩くして、二人の男をやりすごした、それから、傍らの、玉樟の茂りの中へ入つて行つた。

彼は、往來から姿のみえないところへきて、踞んだ。そして、風呂敷を草の上にひらいた。なにか、かう壞れ物でも扱ふやうに、金包を解いて、銀貨を昵つと賸めた。暫くすると、吻つと、長い吐息がでた。彼は、あたりを、ちよつとみ廻した。それから、六枚の、横に重つてゐる白銅を、水の満ちたコップでもとりあげるやうな手つきで、とりあげて、草の上に別にした。残りの金は、元の紙にくるんで掛金帳と一所に、風呂敷にしまつた。別にした金を握つた彼は、草の葉一つ搖さない程しづかに立ち上

つた。恐る／＼右の掌の六枚の白銅を見据えてゐると、腹の底から、吻つと長い吐息がでてきた。が彼は、掌に痛みを感じる程、強く白銅を握りしめた。次ぎに、彼は、風呂敷を懐中に入れて、手にもつた金の仕末にかつた。始め、あげの中へ白銅を押しこんだが、金は、中で足を動かす度びに、だぶついて音がした。で、又そこから、ひきだして、今度は帯を一重にのばして、それに丹念に捲きこんだ。そして、腹へびつちりと壓しつけた。

暫く、立つた儘、きき耳をたててゐたが、やがて、往來へでた。茶島をぬけて、右へ曲ると門だつた。門の前まできたとき、突然、びたりと彼は立ち停つてしまつた。視線を地の上へ落して、不意に湧いてきたある観念を吟味するもののやうな表情をした。庭を通して、家の方をみたが、誰もゐない。彼は、門の手前を右へ切れて、藪の生垣の下に踞んだ。そして、猫のやうな素速さで、藪の木の根方を掘りはじめた。やがて、茶碗程の大きさになつたとき、その穴へ、六枚の白銅が埋められて、土が被された。土のついた手は露の葉で拭はれた。彼は、首を傾げて、考へこむやうに、眼を二三度瞬いた。

家には、奥の間に、母が針を運んでゐた。彼は、元氣よく入つてきて、風呂敷を母に渡した。母は、その儘、それを小箆筒の上に置いた。

「御苦勞だつたね、どう？本籤も花籤も當らなかつたの？」

「あゝ、なんにも……」

「それはつまらなかつたね」

彼は、其處で、母から菓子を買つた。それを持つて、自分の机のある部屋へ入つた。

其夜、令二は早く床に入つた。けれども、眠れなかつた。彼は、次ぎの間に、未だ起きてゐる父と母との會話に耳を澄ました。父は、毎晩の例で、その日の收支の精算をしてゐた。算盤の玉の音が令二にきこえた。

「今日は、令二は無盡は駄目だったのか？」

父の聲がした。

「え、駄目でしたさうです」

母は、前の父に對して言ふよりも、今の父に對して言ふ方が、ずっと丁寧な言葉だと令二は思つた。

「割返しはこれだけか？」

前よりも強い父の聲がした。令二の眼は、大きく見ひらかれた儘、動かなくなつた。隣室から洩れてくる灯の光の微かな中で、彼の体は硬張つてしまつた。

「なんですか、それだけ包んで持つてきましたか？」

「これは足らんね、どうも足らんやうだ」

それから、算盤の音が、急しくきこえた。

「どんな集り方にしろ、これはちつと可怪しい。令二、どこかへ落しやしないか、それとも、なにか使つたか」

「そんな筈はないでせうが……余程ですか？」

母の氣遣はしさうな聲がした。

「いや、少しだ。大したことぢやないが……」

令二の口の中は、濕り氣を失つて、かさ／＼になつた。胸が、突き破られるやうに激しく波うつた。突然、彼は夜具を頭からひき被つて五体を圓く縮めてしまつた。

が、父は、それ以上、割返しに就いては、口にしなかつた。

やがて、眞夜中であつた。

母は、突然の令二の譫言に眼醒めた。

「あ、お父さん、ごめんなさい……ごめんなさい……え……えもう、きつと……これから」

亢奮した語氣が、自由に動かない舌にもつれて、きれ／＼にでた。母は、と胸を衝かれたやうに、跳ね起きて、令二の口へ掌をあてがつた。そして、誰かが、眼醒めるのを恐れるやうに、あたりをうかがつた。令二の言葉は、ぼけてしまつた。母は、枕元へきて靜かに子の肩を揺つた。

「令二。令二」

抑へつけられながらも、強い聲だつた。令二の眼は、鈍く開いたが、又直ぐ閉ぢてしまつた。はだけた胸のあたりに、汗がにじんでゐる。母は、外づした枕をさせてやつた後も、凝つと、そこに座つて令二の寝顔を見守つてゐた。がつくりと肩を落して、首を伏せた様子は、なにか、深い沈思の底にあるやうに思はれた。

やがて、深い、長い吐息が、令二の上半身を揺つてでた。

明る朝、學校へ行く仕度をした令二は、そつと母によばれた。母は、彼を誰の眼にもつかない箆笥や長持のおいてある部屋へ連れて行つた。膝をついて、令二を前へ抱へるやうな姿勢になつて、母が言つた。

「令ちゃん、きのふのね、割返しはお前、包んで貰つた儘持つてきたんだね」

母が「令ちゃん」と呼ぶ時は、いつも機嫌のいいときであつた。そして、特に今は、やさしくその言葉がでた。それにも拘らず、令二は、つと母の胸を突くやうにして、すこし後へ退つた。そして、心持赤くなりながら、ほつくりを一つした。

「本當だね？」

「あゝ本當だよ」

令二は、顎をひいて、自分の胸を斜にきつた鞆の紐をみながら、幾分、不平らしく言つた。母は、ふと口を咥んだ。それから、突然、飛びかゝるやうにして、双手で令二を抱いた。

「令ちゃん、昨夜ね、お前どんな夢をみたの？え？大變魔れてゐたね」

令二は、ちよつと考へるやうな眼差を、部屋の隅に投げた。

「ね、どんな夢？母さんに話してごらん、怖しかつたの？」

「あ」

「どうして？」

「どうしてつて……お父さんが……」

「お父さんが、どうなすつたの？」

令二に、全く俯いてしまつてゐた。そして兩手の指で、代る／＼鞆の紐についた金具をこすつてゐた。母は火のやうな眼で、令二の顔を見詰めた。それが、ながく續いた。暫く黙つてゐた令二は、悚ぶ／＼眼をあげて、母の顔をみた。すると、堪らなくなつたやうに、嘸上げて、泣きだした。それをみると、母の首は、のめるやうに、令二の右の肩に落ちた。彼は、よろ／＼とした。母は、令二の肩の上で泣いた。しかし、それは、ほんの僅の間であつた。母は、すぐに赤く濡れた眼をあげて、屹つとなつて言つた。

「さ、令二、お言ひ、お金をどこへやつたの？」

「知らない、知らない」眼をおさへた儘で返事した。

「さうぢやないだらう、さ、母さんにだけ話しておくれ、ね」

「知らないつてば……知るもんかい……」

突つ放す様な語調だつた。涙の底で、眼が怪しく震へてゐた。母は手をひいて、考へこんだ。やがて、靜かに、

「さう。本當に知らないんだね。ぢや、それでいいの。——さあ、學校へおいで。おくれるといけないから」

と言つた。令二は、すこ／＼玄關の方へで行つた。母は、元の座で、その後姿を見送つてゐた。

その日、令二は、定刻よりも遅く歸つてきた。家へは、直ぐに入らずに、庭を廻つて井戸端へ行つて埃に塗れた足を洗つた。すべてが、物音を殺すやうに行はれた。薄暗い、がらんとした台所を通る時、彼の足の甲は、猫が脊中を立てたやうに、もち上つてゐた。そのために、彼の草履は、足の底へ、へばり着いて、音をたてなかつた。いつも、母のゐるところを通るのに、その日は、誰の眼にも觸れずに、彼の机のある部屋に入つた。靴を、肩から外して、立つた儘、家中の氣配を伺ふやうに、きき耳をたてた。別になんの音もきこえなかつた。彼は、ほつとしながら、右の筒袖で、小鼻の上の汗を横擦りした。やがて、机の上に本を開いたが、矢張時々、氣配を氣にする如く、頭を擡げた。久らくして、本を片づけた。そして、靜に、障子を細目にあけて、門脇の藪の木の方を見透した。門は、根無草の蔓つた廣庭の斜す左の彼方にみえた。そこに、なんの異常もありやうはなかつた。彼は、そつと、椽側にでて、膝を崩して座つた。

倉と母屋の便所との間に、古い梅の樹があつて、それが酸漿程の大きさの青い實をつけてゐる。日脚は、倉の屋根と梅の頂を滑つて、板椽の半分にまで、及んでゐる。ぼか／＼した暖味が庭中に満ちてゐた。令二は、右の人差指を唾で濡らして、椽の板の上へ「大日本」とかいた。濡れた砂に水が浸みて行くやうに、みる／＼字は、日の熱で消された。彼は、も一度その上をなぞつて「帝」といふ字までかいた。それから、ごろりと横になつて、左腕を枕にした。倉の向側の生垣に、からみついた木槿の花をみてるうちに、つい、うと／＼してきた。

不意に、頭の上で、なにか響いた。は、ツとして、眼をあけると、父が、頭の側に仁王立になつてゐる。彼は、強大な力で、蹴上げられたかのやうに跳ね起きて、夢中で五六間逃げのびた。頭がか、ツとして言

葉もなんにも、でてこない。早驅の選手が、スタートを切る刹那のやうな身構へをしながら、立ちすくんでしまつた。熟睡からまだ醒めきらない眼は、血走つて、無氣味に見張られた。胸の激しい鼓動が、着物の上からみられた。

「どうしたつてんだ？ 一体」

父は、飽氣にとらたやうにかう言つた。しかし、令二の乾ききつた咽喉は、ひつついたきり音を發しなかつた。

「令二、この手紙を投れてきて呉れ」

父は、物靜かに、恚う言つて、右の手の封筒を、令二の方に差しだした。

「厭だ」

嚙んで、たゞきつけるやうに返事をした。なにもかも、一切を否定してしまふとするかのやうに……。両方の耳が、がーツと鳴つた。

「何故いやだつてえ」

父は、近よつてきた。令二はその一步毎に、じり／＼と身を退りながら、首と肩をすくめて、今にも、飛びかゝる格好になつた。眼が焼きつくやうに父の眉間に注がれた。立ち淀んだ父の形相は、みる／＼變つてきた。

「莫迦ッ」

凄じく大きな聲であつた。その轉機に、令二の体は、びく／＼と躍つた。

父は、そのまゝ、ひき返して部屋に入つてしまつた。令二は、あらゆる力を、根こそぎ絞りとられた

もののやうに、板椽へ、へたばりついて、泣いてゐた。

八幡の森に、夕映の茜が褪め果て、野面には、薄紫の夕靄が罩めた。波をなす桑の葉の緑が、一樣に微暗の裡に消えて、そのかすかな、そよぎさへさだかでなくなる。夕靄を通して、淡い星の光が降りそめた。淺草の下に、蟲の音が、そして遠近の田に、蛙の哀音が湧き上つた。

令二は、藕の根元から、泥にまみれた六枚の白銅を掴みだすと、桑畑を駆けぬけて、家の裏の古池の際まで来た。蛙の鳴聲が一時に歇んだ。岸近くに、眞孤の生ひ茂つたその池は、無氣味にも寂しかった。一面に水草の蔓こつた暗い水の面に、ほんのりと白く、ひともと、ふたもと、花が立つてゐた。令二は尻つと呼吸を静めた。それから、右手を大きく、前へ振つた。彼が、逸早くかけたす後に、ポコ、ポコ、ポコ……水の音が、暗の下にした。

五

四五日経つた。

令二は、きはめて無口になつてゐた。家の人達に、顔を合すことさへ、滅多になかつた。學校へは、早くでかけて、晩く歸つてきた。母は、絶えず、彼の身邊を見守つてゐるやうであつた。彼が氣付かない時、母が彼をみる眼差しは、痛々しい程惱しげであつた。時によると、令二の全く知らないとき、いつのまにか近寄つて、彼を抱き上げた。そして、殆ど、狂ふやうに、彼を抱きしめたり、頬すりしたりした。

た。眼には、深い涙が満ちてゐた。母は、黙つて、左様した。彼も黙つて、自由になつた。が、令二自身も、なんとはなし、涙がでてくる事があつた。そして、なにか言はふとすると、それは、盡く言つてはならないことばかりのやうに思はれた。これ等の事は、父も祖母も召使のものも、一切知らない事實であつた。

ある日、宵であつた。

夕食後で、父母と令二は、火鉢のある部屋にゐた。令二は、猫板の上に、繪本をひらいてみてゐた。父は、例の通り、出納帳と算盤を控へてゐた。やがて父は、紙入から、紙幣の束をひきだして、數へはじめた。それを幾度も繰り返した。「……す」突然、齒をすつて、眉をよせて、いぶかしげに、首をかしげた。そして、最一度、數へ直した。「妙だな」と言つた。札をもつた手を、ばたりと胡座の上へ落して、考へこむ表情をした。

「五圓札が一枚ない」

獨言のやうだつた。が、母は駭いて、針をとめた。

「なんですつて?」

「五圓札が一枚ないんだ」

「五圓札が?」

猶高い聲で、恚う言つて、ちらと令二を横にみたが、

「何時でせう?」とつけ加へた。

「さつき、紙入を佛壇へ置いたんだがな、その前には、別段の事もなかつたと思つてゐるが……」

どうもあそこへ置いてあつた間に、なくなつたんだ」

この事は、すぐ家中にひろがつた。奥に臥つてゐた祖母もできてきた。下男も下女も呼ばれた。誰も彼も飛んでもないと言ふ顔付をした。

「これはなんでも、盗つた奴は、家の内に居るに違いない」

祖母が、恚う断定を下した。祖母は、事件の發生をきくと同時に、ムキになつて憤りだした。法返しをつかない不祥な災でも起つたかのやうに、獨りで喚きだした。呆然と、立ち盡した人々の後に、母の顔は、白紙のやうに蒼ざめてゐた。そして、惑亂した眸視が、いくたびも、令二の上に流れた。

令二は先刻から、全く氣のぬけたものの様に、火鉢の傍に居すくんでゐた。顔は、異常の蒼味をおびて、眼は虚明に等しかつた。唯、無差別に、うろ／＼と、あたり立ちさわぐ人々の上に働いてゐた。兩手は、しつかりと火鉢の際を握つてゐた。口を幾分あけた儘で……。人々が、佛壇の前へ行つて、父が紙入を置いてあつたところへ、わざ／＼紙入をおいてみせて、説明する時でも、一人令二だけは、其處に、その格好で、凝つとしてゐた。すべての人の眼は、一樣に令二の上に落ちた。皆の視線を浴びて令二は、身が一時に凝縮するやうに覺えた。なにか言つてやりたいと思つた。口をきかうと焦つた。しかし、息が苦しくなつて、言葉といふものは、浮んで來ない。彼は、無暗にムカ／＼してきた。頭の中が、ふぬけになつた。

「令二、お前は知らないか？」

父の聲が、遠くに雷をきく思ひがした。

「わたしは……知ら……知ら……」急に、聲帯が、縫れたやうになつて、吃つた。「知らないよ」と、

やつと言つたが、心以外のなものか言つたやうな氣がした。なんだか、自分が盗つたことが、たしかな事實に思はれた。彼は、へどもとして譯が分らなくなつた。唯、矢鱈に、腹が立つてきた。

「佐山の家に、盗人があるとは駭いた。さあ、どこに、こまでも詮議せにやならない」

祖母は、身を震せて叫びだ。

「お、さうだ、恚ういふ時には、神佛のお力によつて、明して戴くのがなによりだ。さあ、私がお伺ひをたててみる、さあお民、大きなごんぶり鉢へ、水を八分目程入れて持つておいで」

母は、譯もわからず立ち上つた。祖母の言付けの正しいか、不當かを考へる余裕もなく、台所へ走つた。直ぐに、大きな鉢に、水を満たしてもつてきた。

「水天宮様はな、水天宮様はな、實にあらたかな神様ぢや、水天宮様にお伺ひをたててみる」

祖母は、あたりの人を睨めまはしながら、喚くやうに言つた。それから水天宮の護符を、自分の守袋から、とりだした。人は皆おのづと、鉢のまはりに集つた。父までが、苦笑を漂はしたやうな顔をして、其處に座つた。祖母は、白紙を細かく切つた。その一枚一枚に家族中の名をかいた。その名札を鉢の水の周圍に、ある隔てをおいて浮べた。それから、護符の一字を切りとつて、なにか口の中に、祈詞を唱へながら、それを水を中心に浮べた。次ぎに、新しい杉箸をとりよせて、さて、皆に向つて言つた。

「この水を動すと、それにつれて、この護符が動く、動いた護符は、誰かの名札にくつつく。その名札の人が、盗人だよ、いいか、水天宮様はあらたかだ」

祖母は、護符のまはりの水を靜かに、ぐる／＼と廻しはじめた。口には、常になにか唱へつづけた。鉢の周圍の人々の注意は、今、全く、その護符の運動に集中された。令二は、母の片方の袂を、きつちり

と握りしめながら、一心に水の中を覗めた。心の中では、祖母が、憎くてくんならなかつた。

やがて、護符は、静かに動きだした。水の旋回につれて、唯一字を現した紙片にすぎない護符は、ぐる／＼とめぐり始めた。勢づいてきたとき、祖母は、おもむろに、箸をひいた。動く水の表面には、数枚の名札と護符とが、寄つたり、離れたりしながら動いてゐる。やがて、水は、底の方から、次第に運動を緩やかにしてきた。それとともに、紙片の旋回は穏やかになつて、一まはり繞るのに、余程長く時がかかるとなつた。果ては、鉢の際に障へて動かなくなつたのもできた。水の隋性につれて、辛くも流れてゐるものは、二枚の名札と護符だけになつた。一枚の名札は、他の一枚を追ひ越して先きになつた。そして、更に、右へ、内側へと曲らうとした時、後から斜はすに追つた護符と、音もなく觸れた。そして、つながつて、かすかに流れた。

「う……」

歴しつぶしたやうな、呻きが一樣に皆の口から洩れた。護符と觸れた名札には、紛れもなく「令二」の二字が讀まれた。お互が、お互の顔を讀ふと、首を上げかけた刹那、令二が、母の肩に縋つて立ち上つたと見えたが、

「何だい!!こんなもの!!」

殆ど、絶叫に近い聲と共に、どんぶり鉢は、水を吐いて、六尺ばかり、ごろ／＼と轉げた。水は一氣に、あたり一面に、押しながれた。は、つと人々が膝を浮かした轉機はすみに、令二は狂人のやうに、水の中に、びしや、びしや、びしや……と足踏を始めた。

「何だい、何だい、何だい。こんなもの、こんなもの。水天宮様なんか、嘘だい!」

彼の形相は凄味を帯びて、火を脊負つた獣のやうに、水のあるところを跳ね廻つた。自分の名札と護符との連らなつたのを、偶然、足元に發見するや否や、彼は、一人聲を張りあげて、

「こんなもの、こんなもの、嘘だ」

と矢鱈に踏みにじつた。

「うのれッ、うのれッ」

祖母が、水を澆つて、息巻きはじめたとき、母の双手は、早くも、令二をねち伏せてゐた。痛ましい制裁が、そこに行はれ様とした。その瞬間であつた。今迄全く黙つてゐた父は、矢庭に母の手を抑へた。

「待て。俺が悪かつた。今、思ひだした。ほんとに今、思ひだした。五圓は寄附したんだ、消防組へ今朝、寄附したんだ。それをすっかり忘れてゐたんだ。俺が悪かつた」

あたりが、淵のやうに静まり返つた。各自が、ごや／＼つられた後のやうに、惘然ほんやりと、眼を見張つた。無意識の状態が其處にあつた。が、それは、ほんの一瞬であつた。うつけになつた令二に、と、無量の悲しみが一時に押し寄せた。無制抑な大きな聲が、不意に、彼の聲帯を衝いて迸つた。それは、憑かれたやうな泣聲であつた。打ち据えやうと用意された母の腕は、急に、令二の体を、深々と抱へた。抱へられた令二は、縋りついたところが母の首だと意識すると、はつきりした語調で、突然、言ひはじめた。

「母さん、五圓なんか、とりやしないんだ。嘘だ!!嘘だ!!けれど……けれど……この間の參拾錢は、わたしが、とつた……わたしが、とつたんだ。ごめんよう、ごめんよう……」。

怠惰經

三島寛

へてきつるをこたりのひはこころよきねむりのこころし
うちにわれいこひわれとすきゆくゆめをしまもる

(ロバート・ブリザエス)

一、蝙蝠

だんだん夏も近づいてきた。

夢のやうな黄昏の夕闇のなかを蝙蝠が飛びしきる。

己はあの蝙蝠がたまらなく好きだ。そしてこの金澤には、莫迦にその蝙蝠が多いのだ。

己は眞晝が怖い。それは人にまじまじと顔を見られるからだ。

己は屹度蝙蝠の血と、魂とを享けてゐるに相違ない。

黄昏の幔帷とまりが音もなく、しめやかに垂れはじめると、もうそこにはあの怪談めいた、おぼろおぼろし

た、生温なまぬるい逢魔の情調が、あまつたるく、粘稠ねりに滲たつてくるのだ。古い軒端や、暗い天井裏からは蝙蝠が飛び出た。

さういふ時になると、己はゐても立つてもゐられないある喜びを深く感ずるのだ。

ふわふわと引き出されるやうに、己はその夕闇のなかへ吸ひ込まれてゆくのだ。

はたはたと蝙蝠がとぶ。

ほんたうに己は蝙蝠が好きだ。

それはかりではない。Golden Batといふあの安煙草の名前をへ己は好むのだ。Golden Bat——何なにも
いふ rhythmic な、そして面妖おもてな名前たらう。

緑の地へ、金で染め出したあの蝙蝠の肖像ポトレイト。己はたまらなく好きだ。

嘘うそせかへるやうに強烈なその煙に、浸り乍ら幾度いくたび己はあの表装をあかすがめたことだらう。

金蝙蝠ギルバット——Vampire——鬼神のお松——テダ・バラ——聯想はそれからそれへと循環する。

己はポオを思ふ。ポオドレエルを思ふ。潤一郎を思ふ。さうして己自身に皈る。

蝙蝠のやうに、夢遊病者のやうに、己はたゞふらふらと黄昏の街を踏みゆく。

眞晝には小さくいぢけてゐた心が、もくもくと膨れてくる。喜びにわななく胸と、耀かしい眼とをもつて己は路次から街路へ、街路から横町へと彷徨する。

牛乳の湯婆のやうな、なめらかな靄がうつすりど地を匍つてゐる。陰影のやうな群集の像が、みな物の怪に憑かれたかのやうに、生氣なく、ぼんやりその靄のなかに蠢めいてゐるのだ。

そのうちに夜がくる。夜も良い。

打水清いお妾横町。櫺子窓から灯が洩れる。しつとり濡れた前裁の青葉に露が結ぶ。新鮮な緑の香がすがすがそのわたりに瀾る。

……ばつたり會つたのが鏡花の女なんで、とでもゆきさうな意氣な情景が、よくこの夜の幔帷のかけからあらはれてくるのであつた。

襟屋井筒屋の店頭に町娘がたかる。

菊五郎格子、麻の葉染、鹿子手柄が美しい。

呉服店の店飾には、名もしらぬきらびやかな織物が手際よく列べられてゐた。

ときをり埃及模様やブリズム模様で染め出した帯地がだらりと垂れてゐることもあつた。

眩めくやうな瓦斯燈や電氣燈の光線が、狂ほしい奔轉を續け乍らチカチカと夜の紫紺色の闇のなかへ飛んで行つた。

香林坊から片町かけての夜の街路には、さゝやか乍らも、一種の都會情調が流れてゐるのであつた。

これで香林坊の廣場から廣坂の坂口のあたりまで、夜店が張られたら……と、上野、銀座の夜店讚美

者は云ふだらう。本統にそれは望ましいことだ。

二、奇 癖

己には奇妙な殆ど病的とも云ふべき癖があつた。

それは何かしらある *exaltisch* な情緒をしきりに求めてそれに浸らうといふ發作なのであつた。

そしてその發作は必ず *periodisch* に、すさまじい昂奮と、狂奔をもつて己を襲ふのであつた。

Opiumeater を襲ふ阿片中毒の發作、莫爾比涅狂をときおり虐むあの醜い顔面筋の痙攣……實際己はさうした激しい、制御することも出来ぬ一種のひきつりにいちめつけられるのであつた。

その *exotisch* な情緒といふ事は全く荒唐なもので、自分乍ら呆れ返るやうなものばかりであつた。

例へば、揚州の江湖に輕舟を浮べて杜牧の薄倖を大いにあざ笑つてみたかつたり、或は瓜哇のライスカレーを鱈腹くつてみたかつたり、或はリオデジャネロの荒誕きわまる *Petain* の城廓を覗いてみたかつたり……といふ途方もないことばかりなのであつた。

アラビアンナイト物語やデカメロンの奇怪な繪巻物語が、己の頭の中でぐるぐる圓舞を踏るのであつた。

うろおぼえに知つてゐる世界のありとあらゆる古蹟や名所のうちで、ことさら己の趣味に適つたところの繪画が線香花火のやうに五色に耀いては消えて行つた。

己はかうした妄想を凝乎と落ちついて楽しんでゐられる性の人間ではなかつた。

ゐても立つてもゐられない play-impulse でわなわなと顛へてくるのであつた。

ふしぎに己はかうした發作に對するある鎮痛劑をちやんと所持してゐた。それは movie-house へのこの出かけてゆくことであつた。

むかしは己もこれで一廉の *sum fun* であつた。今でこそさうしたあそびは、己の奇怪な發作を鎮める一つの coup d'etat にすぎなくなつたけれど、何をおいても所謂映画趣味に沈溺してゆくだけの情熱時代もあつたのであつた。

けれどももう己にはたゞへ Cafe Brazil の定連にはなれても、××俱樂部の最負にはなれる情熱はなかつた。

ときおりあの眩惑的な、ケバケバしい淺草の活動寫眞街をうづめてゐる群集や、poster や、旗やが、極めてあざやかな輪廓でもつて腦裏を掠め去つてゆく位なことがあるのみであつた。

追にそれはなつかしい思出であつた。

鳥打帽に、小倉袴といふ手輕な恰好で、華かな明るい夜の街から街へと彷徨し歩いた Nachtschwärmer の受験生時代が、涙ぐましいほどの愛着をもつて回想せられるのであつた。

己の焦げつくやうな異國趣味をいかほど活動寫眞が充してくれたことであらう。

××俱樂部のうす汚い、貧しい長椅子に腰をすゑてゐると、ふしぎにある喜悅がじわじわと心の奥から滲み出てきて、豫期しない満足を興へられることが、しばしばあるのであつた。

嗚咽泣くやうな小夜樂の曲につれて、おぼろげな闇の中へ己のすきなヴァイオレット・マーセロが無邪

氣に笑ひ乍ら、丸絞りであらはれてくるとき己はたゞ何となく故舊の感に打たれるのであつた。

アランドワンやセシル・ド・ミーユの演出法を頻りに褒めちぎつたり、Hindemith も一つの文壇としなければならぬなどと、いきまいたその昔がなつかしかつた。

想像力の逞しい近代人には、なるほど喜ばれさうな傀儡であつた。己は Hindemith の realistic な印象を愛しましたが、芝居の phantastic な印象も亦すてがたかつた。

あの芝居のさこちない書割や大道具なんぞに讓歩して見てゐるのは、己にはかなりな苦痛ではあつたが、時を経て追憶する舞台の場面は、たまたま美しくものであつた。己はそれを愛した。

三、あそび

凝乎と机に頬杖ついてそこはかどなく物を思ふなんぞといふことは、己には逆も出来ないことであつた。

机に向ふといふことは己には必ず勉強をするか、もしくは物を書くことを意味するのであつた。

小説をよんだり、新聞を見たりするときは己はいつも寢をべつた。

一日の課業をすませて、下宿へ飯つてくると、頭は少しも疲れてはゐないのであつたが、たゞぼんやりしてゐるのがたまらなく苦痛で、火を點けた煙草のみつくさぬうちに、もうふらふらと近所の友達のところへ押かけてゆくのであつた。

Fは古寺町に、Sは河原町にゐた。

Sのどこでは、よく怠け者同志が寄つてたかつて、ノートラや花あそびで夢中になつた。

あそびがときをり怪談會や、「食べる會」に落ちて行つたりした。

花時の頃なんぞは、よく生暖い春風が櫻の花弁をひらひらと座敷の中へ吹き込んだりした。

紅殻塗りの欄干越しに、ぼつてりした妖艶な桃の花が朧月夜の宵闇のうちに見え透いたりした。

これで雪洞でも夢のやうにとぼつてゐたら、本統に春の粹は蒐めてこゝにあるのであつた。

芝居好きのFはほくほくしながら、

「芝居が、りだなあ——」などと喜ぶのであつた。

三十二燭の電燈が、新しい畳の上に queen や jack の顔をくつきりと浮き出させてゐた。

「春宵一刻値千金——」などと、己は思ひ出したやうに口ずさんだ。

一座の顔はみな愉快と無邪氣とで耀いてゐた。

火鉢にかけた土瓶の湯がくたくたと煮え返つて、番茶の香氣がくくん鼻を衝いた。

みせつけてやりたい位な驕喜と哄笑とがこの室の隅々にまで漾つてゐた。

思はず時を過してあわたしく己は下宿へ戻つて、豫習にとりかゝるのであつたが、あそびでさんざんに疲れ抜いた頭はふしぎに、かうした切迫つまつた勉強には怖ろしいまでに慧敏であつた。

克明に羅列してゐる文字の奥底へ込み透つてゆく鋭い頭腦の力がびしびしと齒ざれよくこたへるやうに感せられた。ペラペラ繰る辭書の響が氣持ちよいほどに己の勉強を促進するのであつた。

滑稽にも己はあそびを本統に値ぶみすることが出来たかのやうに思つたりした。

あそびに惚れて、やがてそれから引離れる時己はよくある幸福を泌々と感じた。

己は己自身の若さと、まだ生々と燃えてゐる情熱とをはずきり自覺する時、同時にまた己はそれらの消滅をまざまざと見た。どう考へてみてもそれからの消滅は必ず淋しい冷たいことであるに相違ないやうに思はれた。

人間の生きるといふことは怖ろしい事實だと思つた。

物理学や化学上の定律や方則の沿革と證明とを聞く毎に己はさうしたものを知ることには何の異論もなかつたが、さうしたものの産み出でたことにはある驚異を感せずにはゐられなかつた。

ニウトンの偉大を知れば知るほど、己はたゞこの地上に vegetation するために生れて來た人間であるやうに考へられた。己の智慧はあまりに見え透いてゐるのであつた。

「爾自身を知れ——」本統にさうであつた。

己は眞剣に己の environment に觀察の眼を睜つてある發見の端緒をみつけようと努力した事があつた。けれどもすべての物には、何等疑問とするに足るほどの餘地がなかつた。萬事はあまりに合理的に起りつゝあるのであつた。己は滑稽だと思つた。

己は己自身の莫迦が情なくてならなかつた。

下天の一切合切はあるが故にあるのであつた。あるが故にある理法を闡明するのは云はゞ人間の淺はかな道樂氣であらう。科學よりも、もつともつと優越を具有する學問は目に見えて存在するのであつた。

四、人面瘡

人面瘡にんめんそうといふ怖ろしい病氣があるさうである。

何でも皮膚の上に盛り上つた悪癩あくらいが、うぢようぢよに頽たうれて目鼻めびしを象造かたどつてり、人面の行相ぎやうさうとなつてにたにたど無氣味むきみに笑ふといふのである。

佛典は疾病はすべて業因ごういんから生ずと教へた。

人面瘡は一体いかなる因縁いんえんから生ずるのであらう。

己はそのうちに「悪の華」があくどく匂つてゐるのを見る。天保の頃に梅野下風はその人面瘡のことを脚本「彦三権現誓助剣」のなかに書いた。

「毛谷村」で見ることが出来るのであるが、普通には「六助宅の場」一幕しか見せないから、この人面瘡の出でくる前の幕は一寸知られてゐないのだ。

あの松尾弾正が、みるかげもなく零落したなれの果がこの悪癩にとりつかれて、襤褸らんじにくるまつて蒲鉾小屋に呻吟してゐるのだつたが、ふと彌三郎夫婦に邂逅して當然打たる、身をこの悪癩ゆゑに宥されて、有難涙に咽びながら打震ふ手で膝小僧のほろ手拭をとつて見せるのだ。するとこの見るも怖ろしい悪癩が、蚯蚓色に爛れてまさしく人面の行相を呈して、醜い笑をもらしてゐるのであつた。

はげしい疼痛に五躰を顫はし乍ら、

「世にも稀なる人面瘡——」と述懐する、弾正の慘憺たる表情はいたいたしくも観客の胸に喰ひ入るのであつた。

芝居には随分つつこんだ人間の病的心理や精神病が、深刻にとり入れられてゐるのであつたが、かうした人面瘡なぞといふ奇怪極まる病氣を取扱つた芝居は先づ稀であらう。

たとへ實在しない病氣であるにもせよ、己は面白いと思つた。天保時代の人間には、すでにかうした荒誕を喜ぶに足る想像力の放態があつたものと見える。

脚本の歴史をしらべてみても、天保の作にはそれぞれ人間の廢頽や、悪の讚美や、醜の美化がなまなましく描かれてゐた。

己は默阿彌物もくあみぶつ、殊に菊五郎きくごろうに書卸したものが好きであつた。己は田舎者ではあつたが江戸趣味が最も己の肌合つてゐるやうに思つた。

金澤に引込んでゐると、江戸の名所が夢のやうな美しさをもつて、走馬燈のやうにぐるぐる頭の中をかけめぐるのであつた。「江戸名所圖會」や、荷風の「日和下駄」などをばんやり讀み耽つてゐるのがたまらなくおぞましかつた。

おりおり一九にかゝる小さんや金馬が待ち遠しかつた。街頭に貼りつけられるビラ辰のびらがなつかしかつた。金車の伯山のあののがみ走つた長い顔、白梅の高座で啖呵たんかをきるあの左樂の巻舌と、團栗眼。すべてがなつかしい。ごりや北齋の浮世繪でもながめてこの Sehnsuchtセムスツヒをぢぢぢぢぢぢぢぢ……。

こんなものを書かせて貰へるうちは、私も無事だしい氣なもんだ。面白いと思つて讀んでくれる人があれば幸甚だ。冒頭の譯詩は小林愛雄氏の譯したものを引用したのである。外國語を矢鱈に列べたのは強ち私の道樂氣ばかりではない。次には創作を出して貰ふことにして、こんなものを捏つちあげたのだ。

憂鬱症

短篇二題

各務虎雄

鬚

金鏘色に重たく烟つた古沼と言へば、或は一番よくその氣分をあらはし得るかも知れない慶さんは、白楊同人のうちでも、特に、才藝が複雑多彩だといふ點で群をぬいてゐる。

では、その多面な才藝が、怎ういふ種類のものかといへば、詩も書く、歌も詠む、漢詩もできると言ふやうな、謂はゆる文學的のことばかりではなく、骨董品も弄れば、掛字も書く、群青や白緑などいふ繪の具を、絹本に塗たぐりつけることもする、と言つた具合に、その燦びやかな才氣は、到るところに閃めく。——といへば、どんな素質の男だか、大抵は見當がつくと思ふ。

しかし、その慶さんの自然のまゝの相、從つて慶さんの純真無垢な、爽やかな素質が、最も潑瀾として描き出されるのは、慶さんが、すべての野望妄想と縁をきつて、二日でも三日でも、小娘のやうに暢氣に浮かれ歩くときであらう。何故なら、詩を思ひ、書に専念すれば、たとひ駄洒落をいひ、浮氣をするにしても、それは、たゞ、その場凌ぎの虚妄であつて、慶さんの素直な天心の流露ではないから。

後天的に得た慶さんの魂の相は、短簡にいへば、暗くて頼りないものである。試みに、最近の歌稿をあつめた「道」といふ一集を繙いてみれば、そこには、さうした慶さんの魂の俤を髣髴せしめるに足る、絶望的な、頽廢的な、深い憂鬱が、相踵いで見出される筈だ。しかも、この心持は、詩にも、書にも、創作にも、苟くも慶さんが生み出したものである限り、萬遍なく泌みわたつてゐる。のみならず、詩人らしく搔きあげた長い髪の毛の先から、青白く瘦せた、蹠の裏にいたるまで、絶望的頽廢的——言ひかへれば、落人か、又は、世に拗ねた隠士たちにもみ潜むであらうやうな、癒しがたい痛ましい影が、些の間隙もないほど蔓延つてゐる。殊に、その瞳の奥底には、雪の荒野に行きなやむ旅人のそれに似た、暗い物凄光が仄めく。その光を、漠然と遠くから望む人は、しかし、さうした陰慘な灰色の雲には氣がつかないで、たゞ、若さの齎す性の惱みとのみ見てすごすかも知れない。が、慶さんの鬚影は、いはゆる若さの醸す世間並の暗さとはちがふ。

では、その鬚影は、一体、何處からきたのだらうか。——作者のあやふい論理を辿つていへば、幻滅の悲哀である。満たされざる我のなやみである。詳しく書けば、多面的な才能が貢いだ、未來の運命に對する、疑惑のかけである。

實際、慶さんの力に巢ふ多くの才能は、互ひに噬食し抵觸しあつて、何一つとして、人に矜るに足るだけの天分を發揮せしめなかつた。書は詩を、詩は歌を剋して、たゞ一つの業に全力を傾注しようとする羨むべき熱情を遮つた。そこに氣づいたとき、少年時代の花やかだつた慄れは消えて、聽て激しい理智と感情の争闘が、伸びよう伸びようとする慶さんの才能の、先天的な欲求を蝕みはじめた。その争闘は、二十歳を超えた今日にいたるまで、しばらくも歇まうとしない。さうして、その争闘がつけばつ

づくだけ、慶さんは、いよいよ、絶望的廢癩的な憂悶を高めてゆくのである。

憂鬱を高める、も一つの要因は、退屈さであらう。

それは、慶さんの勉強嫌ひが、姿をかへて現はれた退屈さである。といふのは、辛つと、一途に創作家にもならうかな、と思ひはじめてゐる近頃ですら、いまだに、詩や歌や書などに執着がのこつてゐて、ともすれば、創作らしい爲事に没頭する事を妨げる。従つて慶さんの目あてとしてゐる、Baudelaire や Poe や Verlaine などの述作に耽溺したり、潤一郎、龍之介、淳、生馬、寛、正雄、興志雄、讓、正一、春夫、渙、長江といったやうな、或る人々によつて、藝術派と名づけられてゐる人々の足跡を、丹念に辿らうとする熱心さが無い。だから、その人たちの、怎ういふ處が、いゝのかといふと、慶さん、一寸、首をかたむけざるを得ない。

怎うして、慶さんは、いつの間にか、他動的に懶惰にされてしまつた。だから、その生活には、ひとりで空虚ができ、その空虚は、倦怠となり、疲勞となつて、果然、慶さんを不平家に導いた。不平のある眼をもつて、自然を視、おのれの貧しい相をみる時、慶さんの心は、憂鬱にならざるを得ない。さうして、サンテイマンタリズムも、時には出てくる。

退屈しのぎとして、はあつたが、それが、何時しか、慶さんを本氣に深入りさせてしまつたものは、老人などによく見る、ある迷信である。その迷信家としての慶さんを、作者は、こゝで、暫く紹介しようと思ふ。

といふのは、他でもない。慶さんは、近頃、讀賣新聞をとつてゐる。午後になれば大抵はくるのであるが、その新聞で、第一に眼をとほす處は、一面や二面ではない。三面記事でもなければ、文藝欄でもない。それなら何處かといへば欄外である。欄外でも「九星」である。九星のところで、自分の星——自分の星といつても、正月の始めに生れた慶さんは、一白でみるべきか、二黒でみるべきか、はつきり知らない。が、新曆で數へれば一白、舊曆ではかれは二黒。だから、見やうによつては、何れへでも解釋がつく。と、斯う慶さんは考へてゐる——が、一白か二黒か、どちらかに、「悦びごある日」とでも出てゐると、何かしら心の浮き立つのを覚える。骨牌の占ひにしても、それと同じことで、何時だつたかも、たつた外出しようかすまいかを占ふためだけに、一時間も費したほどだつた。と思ふと、むつくら起きから一日の日和を占ふために、たうとう、半日、床の中で過したことすらあつた。しかし、慶さんの退屈は、こんなことで癒されるほど根淺いものではない。

——こゝまで書いてくると、作者は、自分ながら、筆致があまり冗漫になつたり、沈鬱になつたり、堅苦しくなり過ぎたので、遂に、退屈してしまつた。退屈が進んで偏屈になり、偏屈が高じて佻倨傲岸になつては困る。作者は、氣分轉化のために、一寸、散歩にでも出なければならぬ。

作者が、カフェーブラジルで莓をくつて歸つたとき、慶さんは、骨牌の占ひをつげてゐた。その間、慶さんの頭のなかを、縦横に往來した問題は、今年の秋頃——と言つても懶惰な慶さんのことだから、當にはならぬが——歌集を自費で出版しようかすまいかといふ、頗る藝術的色彩に富んだ欲望だつた。その占ひには成功した。が、装禎の方では、全然、失敗した。では、慶さんの企畫した装禎は怎ういふのかと言へば、菊判截で佛蘭西とちにする、表紙は純白で、その上に、あつさり、金で体裁を作

ること、紙は木目の極上を使つて、一頁一首の割合で、八ポイント半の活字を植ゑること、さうすれば、四百頁位の厚さにはならう、といふのである。だが、その占ひには、前に言つたどほり、見事に失敗してしまつた。暗鬱な迷信家になつてゐる慶さんの落膽は、今、こゝで作者が、わざわざ書き立てないでも解らうと思ふ。

装禎の占ひで失敗した慶さんが、改めて頽勢の挽回にかゝつたころ、これも油繪の具を弄ぶことの好きな源さんがやつてきた。「奴さん、また始めたな」と思つて、源さんは、そつとうしろから、

「おい」

と言つて、軽く肩をたゞいた。それでも慶さんは平氣なもので、

「うん」

と、生温い返事をしたきり、骨牌から眼をはなさうとしない。

「でさるか」

となく、

「駄目らしい」

とだけ答へる。さうして、ダイアの九を右の指先でつまんで、凝乎と思案に暮れてゐる。これでは逆も相手にはなれぬ。仕方がないから、源さんは黙つた。

黙つた源さんが、茶筆笥の上の壁をみると、そこには、John Laveryの「月夜の海濱」の複寫がピンでとめてある。遙かの沖に、たつた一つ浮き出された漁火が、その書の眼であるかの如く、激しく額をつく。源さんは、思はず、奇聲を發した。

「素的だね」

慶さんは、またまた失敗にをはつた骨牌を、机の上に、亂暴にたゞきつけて、

「うん」

と言つた。が、未だに此方へは、むかうとさへしない。源さんは、暫く呆氣にとられてゐたが、改めて Lavery に眸を据ゑた。さうして、も一度、慶さんの氣をひいてみた。

「素的だね」

慶さんは、やうやく首をめぐらせた。

「そんなにいいか」

「いゝよ、素的だよ。全く、惚れ惚れしてしまふぢやないか」

すると、慶さんは、その言葉を聞きも終らず、狡さうに微笑しながら、

「Crains, dans le mur aveugle, un regard qui t'epie!……佛蘭西語だぜ、わかるかい」

と曇みかけてきた。勿論、それが、その畫に對する慶さんの感想にちがひなからうが、源さんには、遺憾ながら、その佛蘭西語の意味が、よく呑み込めなかつた。源さんは、間わるく黙つてしまつた。そして、窓際に腰をおろして、貪るやうに、新聞に眼をとほしはじめた。

慶さんが、そのとき、怎んな氣もちになつたか、作者以外の人は恐らく、誰も知るまい。といつて、作者が、この場を誤間化さうなごといふ惡意は、毛頭ない。——正直に白狀してしまふが、慶さんは、人間は、も少しお互に情義をつくしあつて、相手の無理も、できるだけ通させなければいけない、と思つてゐる。同じ論法で、この場合にも、多分、源さんは、出鱈目でも何でも、兎に角、撥だけは合せて

くれるだらう、と考へてゐた。が、源さんは、意外にも、暗く黙つた。だから、慶さんは、可なり不愉快になつた。

源さんの方では、しかし、そんな不愉快な、慶さんの心持は知らない。のみならず、却つて、「あれは、慶さんが無理だ」と思つて、これも、少々、不愉快であつた。ので、てれかくしに、新聞に眼をどほし始めたのである。が、源さんの不愉快は、代議士の總選舉の結果をよみ耽つてゐるうちに、次第に淡くなり、たうとう、消えてしまつた。

源さんが、大人しく新聞と睨めつこをしてゐる間に、慶さんは、處在なさに、うす黒くのびた鬚を剃りにかゝつた。詰襟の上衣をぬいで、胡床をかいで、西洋剃刀を斜めにもつて、小さな置鏡にうつる自分の姿の輪廓に眸を凝らしながら、ゴリゴリ剃つてゆく容子は、一寸、繪になる。といふので、先刻から新聞をすてて、その慶さんの恰好を、つくづく視守つてゐた源さんは、早速、スケッチにかゝつた。

「おい、も一度、剃刀を、かう當て、みないかい」

「此處かい」

「いや、此方。……左の頬つべた」

「恚うかい」

「うん」

なごご、面倒な註文をしながら、源さんは、ごしごし、スケッチを進めて行つた。一方、慶さんの方でも、案外心やすく、源さんの要求ごほりに、いつまでも、片方の頬に、剃刀の手を働かせて、いたづら書きのモデルになることを承諾した。

「おい君、すんだよ」

スケッチが、殆んど完成したとき、源さんは、くすぐりたい様な聲を出して、かう慶さんに呼びかけた。慶さんは、鼻の下だけ剃りのこしたまゝ、一寸、そのスケッチをふりむいて見た。——と、その畫は、さながらに、慶さんの頽廢的な相をうつし出してゐた。頭髮が、四五寸にのびて、それが、一本々々、我をほりきつて、思ひ思ひの方向へ匍ひ出したり、蟬谷のあたりで奇しく蟻局を巻いたりしてゐる様子は、風來坊の頭をみるやうな氣がする。胡床をかけた洋袴の下から、はつかに顔を出した反對の側の足の指も、本物とそっくりで、至極、滑稽じみた感じをあたへる。

慶さんは、ニヤリとして、

「やつたね」

と言つた。

「氣分だけは出てるだらう」

源さんは、さう言ひながら、をかしさを耐へて、慶さんの顔を見はつた。——剃りのこした鬚が、鼻の下にいちぢけてゐる。しかも、それが、故意とくつ附けたやうで、何となく、そぐはない。源さんは、噴笑してしまつた。が、慶さんは、意外にも落ちつきはらつて、

「莫迦だね、俺も」

と言つた。源さんは笑ひやめた。そして、急に思ひついたやうに、

「やつぱり、君らしいやり方だね」

と聲を落した。慶さんは、

「なあに、これも所詮、退屈なためさ」

と言つて苦笑した。

莫迦げたおのれの一面を、人に曝け出して省みの慶さんは、たとへ、さうした思ひつきが、退屈の氣まぐれからなされることであるにしろ、自分が、かうして、いつまでも、外面的には、兎に角諧謔らしく振るまひうるのを、幾分、光榮だと思つてゐる。かうした場合、恐らく慶さん以外のいかなる人でも、かゝる子供々々したいたづらを、眞面目くさつてつゞけることの愚かしさに、愛憎をつかしてしまふであらう。ところが、そこが慶さんだ。

慶さんは、苦笑しながら、木炭をとり出して、恐る恐る、それで、その鬚を染めつけた。それから、鬚からはみ出した木炭の粉末を、器用に剃りとつた。益、そぐはない色合である。最初から微笑しながら、その様子を睜つてゐた源さんも、當の本人である慶さんも、そつと顔を見合せると、一度に甲高く笑ひくづれた。

しかし、慶さんは、何かしら、妙に、笑つてはならない様な、不思議な氣持に襲はれた。それは、そのとき、慶さんの笑ひのなかを、あの複雑多彩な才能の満たされざる自我のなやみの影が、稻妻のごとく、颯と閃き去つたからである。が、一体に、若い諸君は、若い慶さんが、かうした浮き浮きしたやうな笑ひの最中に、こんな老人じみた悲愴な感覺に觸れたといふことを、或ひは荒唐無稽な話だと思ふかも知れない。のみならず、過激にも、作者の藝術的能力や藝術的醗酵を疑ふであらう。だから作者はいふが、慶さんは、尠くも一個の藝術家タイプの男である。已に藝術家タイプの男である以上、その神経の末梢は、一般の陣笠連や労働者などより、餘程、機微であり錯雜してゐるものと知らなければならぬ。

い。——と、かう言つてもなほ不安に思ふなら、残念ながら、諸君は、首を縊つて不名譽の犬死をした方が、寧ろ、慶さんの功德になると愚考する。

串談はさて置き、兎に角、そのとき、慶さんの頭のなかを、あの複雑多彩な才能の、伸びようとして十分伸び得ざる我的惱みの影が、稻妻のごとく、颯と鋭く閃き掠めた。慶さんの甲高い笑聲は、堰き止められたごとく、急に、無様に止つた。さうして、慶さんは、臆て、淋しく暗くおし黙つた。競走の相手をうしなつた源さんの笑ひ聲は、しかし、暫く、空に空しく咆え立てたが、これも、忽ち腰を折られてしまつた。

とは言へ、源さんは、まだまだ、慶さんの心持には氣がつかない。だから、

「暗いかほをするね」

と言つて、慶さんを覗きこみはしたが、またしても、にやにやと、意味ありげに笑つた。が、ふと思ひ出したやうに、

「かうしたんだい」

と附け加へた。慶さんは、

「どうもしないよ」

と、いかに、奈うもしないやうな顔付をしてみせた。が、何かしら、そぐはないやうな感じが、二人の間を流れてゐる。慶さんは、それをよく知つてゐる。源さんもまたそれに氣づいた。そして、

「變な男だな」

といつた。しかし、いまだに、慶さんの憂鬱の原因には氣づいてゐない。だから、

「どうしたんだい」

と、愁はしげに、も一度訊ねた。慶さんも、

「どうもしないよ」

と、いかにも奈うもしないやうな顔付を繰りかへした。源さんは、じれつたくなつた。そこで、何か言はうとしてゐると、慶さんは、ふと、小さく身顫ひをした。そして、

「頼廢しきつた俺だね」

と、暗示的な言葉で、そつと呟いた。源さんは、何もかも、一切が明瞭になつたらしく、或ひはまた慶さんの心を、ふたゝび明るさに持ち來たらさうとする如く、

「淋しいのかい」

と言つた。源さんが、氣づかはしげに、恚う問ひかへしたところを見ると、慶さんのサンテイマンタリズムに憐れを催したのは、ひとり作者ばかりでないのは勿論である。慶さんは、ひと時、眼をどちると、やがて、徐ろに、涙のにじみ出さうな瞳をあげて、窓の外の夕暮の小雨を、ぼんやりと眺めはじめた。そして、

「淋しい雨だね」

誰にともなくかう囁くと、そのまゝ、ふたゝび眼を閉ぢてしまつた。

小雨に濕つた五月の夕風に、慶さんの古びた緑の羅紗の机かけが、さながら、慶さんの心とかよふ如く、微かに淋しく靡いてゐた。

九・五・一六稿了。

五月

監獄の赤い煉瓦塀に、まつ黒な蝶が、一つ二つ飛ぶやうになつた。樟の芽の幸卵色が、次第に明るく赤みがかつてきた。一日、透きとほるやうな、淡い楓の緑を潜つたとき、あゝもう五月だなと、つくづく、わたしは感じた。

その日の午後のことである。驛で偶然にも一緒になつた久子とわたしとは、電車にも乗らずに、それからの道を、ゆつくり並んで歩いた。

午さがりとは言ひながら、有係さすが、五月の光が熾烈に燃えた。薨が黒水晶のやうに輝いて、濃い影を、路の片側におとしてゐた。快く光る電線に、雀が二三羽とまつて、樂しさうに囀つてゐた。

「い、お天氣」

氣の字に軽い力を入れて、驛前の廣場をあるくとき、久子がかすかな溜息をついた。淡い昂奮にとらへられて、久子とは異つた考へに耽つてゐたわたしは、淋しさうなその聲に觸れて、ふと、久子の陽に火照つて鶺鴒ささぎ色になつた右頬を見た。それから久子の視線に沿うて、青い穹窿おぼろを仰いだ。全くいゝ天氣だつた。そこには、一つの翳影かげすらなかつた。

空から眼をそらすと、久子は、心もち伏目になつてゐた。長い睫毛の下が、ぼんやりと紫色に變つてみえた。わたしの眸は、知らず識らず、その睫毛に引きつけられて行つた。けれども何も言はなかつた。久子も何も言はなかつた。さうして、時々土埃のおこりさうな廣い白い路を、久子と二人きりで、二三町のあひだ、お互に無口のまゝ、歩きつづけた。夏帽をつけたわたしの影と、縁に刺繡をした、地のうす

い黒の華奢なバラソルをさした久子の影どが、妙な具合に摺れあつた。

強い光に照らされてゐるわたしは、いつもの癖で、そのうち、息詰るやうな壓迫が、幾重にも絡みあつて、何處まででも何處まででも、追つかけてきた。わたしは、微かな眩暈を感じた。そのとき、長い沈黙を破つて、久子は改めて口を切つた。

「どうかなすつて?」

澄みどほつた涼しい聲である。はつとして我にかへると、久子は、詰らなさうな面持をしてゐた。わたしは何か言はなければならぬと思つた。だが、不思議な力が、ひとりでに、わたしの口を噤ますやうに思はれた。わたしは、鳥渡ふりむいたきり、廳てまた押し黙つてしまつた。

「どうかなすつて?」

暫くして、久子は同じ調子で繰り返かへした。そのこゑに更めて觸れると、瞬間、何となく心が時めいて、久子から何か話の糸口を興へられるのが、嬉しいことのやうにさへ思はれてきた。

「いゝえ」

「でも變ですわ」

久子は、さう言つて、わたしの顔を、チラと見た。わたしは、左の頬に、何だか強い痒いやうな刺戟を覺えた。

「そんな筈はないんだが。でも、何處かをかしいんですか?」

「えゝ、お顔」

「顔?」

「えゝ、お顔の色がお悪いぢやありませんか」

久子は心配さうな顔付をした。辛つと明るい心になり始めたわたしは、一寸、擽^{ぢつか}擽つてみたくなつた。

「一寸、からだを痛めたんです、此處を」

さう言つて、右の胸を押へた。久子は、案の定驚いた。

「ほんたう?」

「ほんとですとも。二三日前に病院へゆきました」

「それから」

「それから歸りました」

「御串談言つちやいやよ」

くだらない會話である。と思ふと、わたしの心は、ひととき暗く沈んだ。わたしは、この場面を、怎うにかしてうまく切り上げなければならなくなつた。久子の方では、何と思つたのか、暗く押し黙つてしまつた。そして、故意^{わざ}とらしく二三歩おくれた。が、わたしには、不思議にも、久子に濟まないといふ氣は起らなかつた。預らぬことを言つたといふ自嘲の聲しか、腹のなかでは響かなかつた。けれど、何となく淋しくなつて、久子を待つた。久子は一寸微笑してみせた。

「串談なんか言ふものですか。肋膜ぢやないかと吃驚したほどでした」

わたしは、苦しまぎれに、恚^{いら}う撥を合せにかゝつた。と、久子は案外、素直にむかつてきた。

「さうぢやなかつたの?」

「えい」

「さう、まあよかつた」

久子は、わたしの顔を見上げながら、体を心もち前へかかめて恚う呟いた。わたしは、思はずほつとした。が、口数の少い二人に、會話はまたしても無様に切れてしまった。——道傍の葉櫻が、急に眼醒めたかの如く、勢よく、爽々しい風を送つてきた。二人は、可なり長いこと歩いてきてゐた。

暫くして、道はN——町の電車の分岐点へきた。S町からきた貨物の電車が、いやな軋聲を出して、二人の方へ曲つてきた。今まで、通りすぎる電車の乗客に眼を注いでゐた久子は、その時、頭に喰ひ入るやうに鋭く應へるその軋聲に涵りながら、軽い挨拶をして、K町の友達を訪ねるために別れた。薄お納戸の繪の入つた白縮緬の風呂敷包を持ちかへて、ゆつくり歩いて行つた。後れ毛が纏れて、バラッルを傾けたとき、鬢のあたりで快く靡いた。襟首が、くつきりと白く目立つて見えた。

家へかへつてみると、秋の最中かとも思はれるやうな、静かな澄んだ空から、やゝ西に移らうた日脚は、滑らかな影を、緑のカーテンを透して、ヴェランダへ投げてゐた。大理石の床は、スリッパを越えて微かな熱さな感するほど、温まつてゐた。わたしは、その籐椅子に腰をおろして、淡い疲れを休めた。初めのうち、わたしの頭を、二三日前に書きはじめた或る短篇のそれからの構想が、潑瀾として脅かした。それから、何時か動物園で、みたことのある、獅子が、仰向に寐そべつて、幻のなかで、わたしに烟草を強請しはじめた。……いつしから、わたしは、ぐつすり睡り込んでしまつた。

ふと眼を醒してみると、甘い微妙な香が、何處からともなく、強く、わたしの鼻を刺戟した。わたしは、やをら立ち上つて、人知れず屋外へ出た。しかし、そこは、池の上に葡萄棚をのぞかせたわたしの家園ではなくて、何處か、山上の別荘のかまへである。わたしは、鳥渡、奇妙に感じた。が、その感じは、ほんのその當座きりで、聽て、夢のやうに薄く消えてしまつた。わたしは、その庭を、止めどなく歩いてみた。

青白い月の夜である。糊を捌いたやうな、仄白い雲が頭の上に、かすかに漂うてゐた。白い薔薇や鶉色の薔薇やらが、綺麗に植ゑこまれた垣のうちに、一様に、漠然と浮上つて見えた。わたしは、あの微妙な香が、紛ふ方なくこの花から起つたのだと、一目見ただけで、すぐさう知つた。

垣のそこは、其處には、涯しなく廣い薔薇の園が、うちついでゐる。さうして、そこにも、赤や白や黄色や鶉色やの薔薇が、あちらこちらから、繊細な小枝をさしのばして、自ら、怪奇な門や、いたはしい塔やを築いてゐた。酔ひ痴れたい様な芳香が、噎せるほど激しく迫つてくる。微かな風に、薔薇は、その花の上に危く興へた透きとほる雫を、惜しげもなく、はらりと落す。月は、その落ちてゆく雫に乗つて、銀色に軽く煌きながら、幾たびも音なく躍つた。

その涼るな氣色に、魂までも涵しながら、薔薇のうたふ優しい小唄が、しつきりなしに空を滑る。——
若い女を戀してみれば

うす紫に暮れてゆく

夕べの春の小川にも

心あやしく躍るもの

若いお方は淋しかる

若いお方は淋しかる

何といふリズムの整つた聲であらう。何といふ蠱惑的な唄の響であらう。立ちつくしてゐてはならぬいやうな、強大な力が、わたしの心を、わたしの足を、しきりに爽やかに浮き立たせた。わたしは、恍惚としながら、薔薇の門を潜り、雫をからだに浴びて、心の動くかぎり、足の進むかぎり、その庭を彷徨した。

歩き疲れて足が硬直してしまひさうになつた頃、わたしは、とある沼のほとりに出た。

静かな沼である。水は、葦の芽を洗つて、溢れるばかり湛へられてゐた。僅かしかないが、その蘆は水から寸ばかり頭を擡げてゐる芽を顛はせて、そよ風がわたると、何か小ぶるで肯きあつた。

沼の向うには、高々と伸び上つた栴檀や菩提樹の林が、一面に黒く、深く、物凄く擴つてゐる。林の香と薔薇の香とが、お互に入り雜つて、譬へやうのない強い刺戟が、わたしの官能を、次第々に唾らせてしまつた。わたしは、夢の匂ひを嗅いでゐるやうな氣になつた。

と、遙か右の向う岸に、白い姿が仄のりと浮く。浮いた姿は、岸づたひに、しなやかに動いてくる。女である。しかも、處女らしい。純白の下袴が、女が歩をうつすたびに、月の光を藤紫に織りこみながら、沼に奇しく影を落して、静かに靡いてくる。その女は、紫水晶に似た光を放つ頸飾が、わたしの眼に明るく見えるやうになつたとき、はたと止つた。さうして、金髪を大きく波うたせて、一寸うしろをふり向くと、聽てまた、ひらりと向きなほつて、再、こちらへ歩みつけかけてくる。深刻な、物凄く光る眼の女である。下袴に深く鏤められたダイヤ型の玉が、清らかに月に煌めいた。月は、ま白な百合をいたぐ素肌の女の腕に、柔かく慎ましく接吻した。わたしには、一体、その女が誰であるのか、何であるのか、はつきり見分がつかなかつた。そこで、結局、わたしは、若しかすると、その女は魔女か、

さもなければ、何かの精であるにちがひないと決めてしまつた。それと同時に、果してこれが現であるのか、幻であるのか、全く見さかひがつかなかつた。

やつと我にかへつたときには、不思議にも、女は、何處を怎う通つて行つたのか、わたしの四五間うしろのところ立つてゐる。おやと思つて、わたしは渺からずたじろいだ。が、その女は、わたしの立像には、少しも氣がついてゐないらしい。さうして、純白の薔薇を腕に折り添へながら、月の光と戯れながら、豊醇な醴に似て美しく陶醉させられるやうな微笑を、その眼から、時々閃かせた。しなやかな曲線美に逸早く心を捕へられてしまつたわたしは、異常な懐しさを、その女に覺えた。

瀟洒な氣分が、活々として、わたしに明るく迫つた。

やがて、女は、澄みきつた朗らかな聲で、細く長く唄ひはじめた。

薔薇の花が咲いたとて

仇ななさけの女王らが

たい淋しさと哀しさを

涵すうれひのくろ髪

謎の花とぞ知りたまへ

何度もく、繰りかへしてうたふ。わたしは、わたしの魂に徹し、わたしの髓に沁み入る強い壓迫を感じないではゐられなかつた。わたしは、何氣なく、ふと空を仰いでみた。——と、相變らず、月は青白く照つてゐる。だが、その光は、前ほど艶めかしいものではなくて、何かしら秋の夜更を思はせられるやうな物凄さをもつてゐる。のみならず、氣の所爲でもあらうか、わたしの身のまはりには、面妖に

も、蟋蟀か馬追か、兎に角、何か小さい蟲が、亂次もなく滅入つて淋しく哀しく歎歎すつりないてゐるらしい。わたしの心は落ちつかなくなつた。が、女は、わたしには眼もくれないで、何處で手に入れたのか、鋭利な白鞘の短刀をふり翳して、金髪を奇しく波うたせながら、酔ひ唄ひ酔ひ舞つてゐた。

ひねもすあはき紅くれなゐの

光に涵る百合ひとつ

百合は優しき花なれば

滴る水のいろうけて

うす紫の香にほふ

百合は淋しき花なれば

素肌つめたく色なくて

愛となさけの心をば

嘆きうれひの心をば

永へにしももつ運命まゐめ

さつき、女が手にかゝへてゐた百合が、勢よく、大空に散亂する。散亂した百合は、或ひは薔薇に狂ひ、或は金髪に頰れかゝつて、初夏の自然の心に、無限の媚を賣つてゐる。純白の長い裳裾が、程よく鏤められたダイヤの玉を、物寂びた月光に煌かせながら、軽く大きく、花やかな圓を描く。拔身の短刀に溶け込む銀色の夜の精は、及に宿つたと思ふ間もなく、一齊に矛先から迸り出でて、聽て大氣に包まれてしまふ。それを幾たびもく繰りかへしてゐる。——惑溺させられるやうな美の調和のうちに包ま

れたわたしには、何時まででも何時まででも、その氣色に見入つてゐなければならぬやうな氣が、旺んに漲り溢れた。

が、唄が、尾に尾を曳いたまゝ、青白い月影に溶け込まうとしたころ、奇蹟とでも言はうか、その女は、烟のやうに、急に奇しく消えてしまつた。

わたしは、ふたゝび、その薔薇の庭を彷徨した。さうして、あの純白の女の行方を、丹念に搜索しはじめた。が、女が撒いた白い百合の花片すら、何處にも見つからなかつた。

赤や白や黄色や鶉色うさぎやの薔薇は、相變らず、にははしい月の雫を、音もなくかすかに零してゐた。甘い微妙な香が、後から後からと、絶え間なく激しく襲つてきて、遂には、わたしの嗅神經を、重たく眠らせて行つた。たゞ、薔薇の唄うたが多だけが、何處までも、わたしの耳につき纏うてゐた。

若い女を戀してみれば

うす紫に暮れてゆく

夕べの春の小川にも

心あやしく躍るもの

若いお方は淋しかる

若いお方は淋しかる………

と、あたりが急に明るくなつてきて、俄然、わたしはほんたうに現の世界へ甦つてきた。「では、今のは夢だつたかしら」

さう思ひながら、ふと顔をあげると、そこには、何時の間に来たのか、久子が、瀟洒な姿になりすまして立つてゐる。

「もうお眼醒め?」

久子は、わたしの眸に射られるや否や、夢のやうな聲で、かう浴せた。さうして、晴れやかに微笑した。

初夏の陽は、遙かに西へ傾いて、ヴェランダの床は、やうやく温もりを失つてゐた。緑のカーテンの向うの葡萄棚が、小さい葉を美しく揃へて、風に奇しく揺れてゐた。その窓ぎはに靠れかゝりながら、

「清々した日でしたね」

久子は、さう言つて、も一度明るく微笑した。

九、五、二四。

雑報

—春季水上運動會—
—終日行軍記事—

春季水上運動會

五月二日。於大野川下流。

今年から對部レースがなくなつて、その代りとして、一年の文科對理科の競漕、二年對三年の競漕があつた。一年では文科が勝ち、二年と三年とでは三年が勝つた。その他は、殆、例年のとほりで、別に、是は、さういふほど眼新しい事はなかつた。(各務)

野外演習記事

於専光寺濱

五月十八日、第三學期の野外演習があつた。午前八時出發、折悪しく霧の様な雨が降り出してきた。むしむしするいやな天気だ。これでは今日の演習も一苦勞だ。五月の草木は雨に濡れていい色だ。さうした爽かな郊外の景

色にみされて歩いてゐる間に、いつか、雨ははれあがつた。砂山を越える時、海がみえる。廣い砂原だ。ここでボンボンうつかと思つて一寸愉快な氣がする。高橋統監の馬が勇ましく嘶く。愈戦闘開始だ。(K)

北軍(黒帽軍)想定

一、福井方面ヨリ北陸道ヲ北進スル敵ヲ迎撃スルノ目的ヲ有スル北軍師團ノ主力ハ同街道ヲ南進中五月十九日午前十時頃其前衛歩兵ノ先頭ヲ以テ金澤南端附近ニ到着シ得ルノ豫定ナリ、

二、北軍右縱隊(歩兵一聯隊、騎兵一小隊、工兵一小隊)ハ大野—金石—松任道ヲ南進シ午前十時其歩兵ノ先頭ヲ以テ金石町南端ニ達ス此ノ時迄ニ得タル情報左ノ如シ

一、敵ノ主力ハ金澤方向ニ北進シ午前九時頃ニハ其前衛既ニ松任町ヲ通過シタル者ノ如シ

二、又諸兵連合ノ敵ノ一兵隊ハ松任—金石

道ヲ北進シ午前十時半頃ニハ其歩兵ノ先

頭下安原附近ニ到着シ得ルノ距離ニアリ

三、北軍右縱隊ハ下安原方面ノ敵ヲ擊攘スル

ノ目的ヲ以テ左ノ如ク展開スルニ決ス

一、主力 濱田—鷲森—神合ノ線

二、學生大隊(機關銃一小隊附屬)

濱田西側高地脚ヨリ番屋ニ互ル線

四、金石南端岸川ニハ諸兵ノ通過ニ適スル軍橋架設シアリ

私達は松林を通つて行つた、所々に馬鈴薯が植ゑてあつたりした。砂地だったので銃をもつた人達は歩きにくさうにしてゐたが、それでもまだ串談なんか言つてゐた。松林が盡きると突然海が眼の前に浮きたすそして私達は停止した。十時十二三分頃だ。雲雀が景氣よく鳴いてゐた、その下で大隊長の命令があつたが、大隊長の馬まで、戦に勇んでアツチコツチを振りむいてゐた、まして一般の兵卒はただもう敵は前面にありと云ふ事だけを知つて、早く敵を攻撃して、金澤に凱歌を奏したかつたらしい。いはんや「戦はずし勝つは戦の上なるもの」なる故に、既に敵を呑んだものに於いておやである。

愈々敵に對する攻撃動作(味方に對するそれは、金澤出發時からホツ／＼あつた)に移つたのは十時半である。總豫備隊は海岸に沿つて進んでいつた。私は攻撃部隊と豫備隊との中間を歩いていつた。敵は約一千二三百の

所に陣をかまへてゐる。その赤旗や赤白旗のうしろには遠く大乗寺山が見えてゐた。朝から降りさうだった雨は思ひがけずも。カラリと晴れて、戦に大に便ならしめた、外套なんかを身につけては、元來戦は不可能である。それを天道様は司令官よりヨリ善く知つてゐられる。まして外套着用の不愉快な命令が兵卒に及ぼす戦慄おや。散兵線と敵との距離は千になつた。発砲の音がきこえる、敵の斥候らしいものが、前面の森林に逃げこんだ。

敵からの防禦射撃が始まりだした頃には海岸の方へ進んだ豫備隊も戦列に加はつて、発砲は一しきり盛になる。勇敢な小隊長や分隊長が「前へ」と飛び出して、既に負傷したのか仲々前進しない勇者もある。砂地で戦をするのは愚の極みだと一人で憤慨してゐるものもある。がとにかく八百位が最も射撃が活潑であつた、それからあそこには手をうたれたのか銃を壊したのが、だん／＼銃を構へる人が少くなつて、いくら中隊長が「もつと早く」と言つてもそれは不可能の様に見えた。三百になつた、銃剣がキラ／＼する、しかし銃の音はもう殆どきこえない、このまゝはつて置けば我軍は全滅である。我軍司令官は慧眼にあ

らせられる。いくら銃をうち得ない人でも、前進は出来るのを知つてゐられるで「つこめ」の喚聲が起る、するど死んだ筈の人が精神的に動きだす。休戦ラツパがなる。戦はずんだ。そして食事なしに五六町の間砂地をぼぼ／＼歩いていつた。かくて之の日の演習は終つた。

(高坂)

- 演習統監兼大隊長 高橋溪次郎先生
- 第一中隊長 山崎増太郎先生
- 第二中隊長 小谷仁十郎先生
- 第三中隊長 松本慶昭先生
- 第四中隊長 旗ヲ以テ假設ス
- 假設敵司令官 大野平作先生

北辰會各部々報

一 弓術—柔道—庭球—陸上競技練習會—旅行—四高短歌會—劍道—

弓術部

寒稽古納會。

今年の寒稽古に出て呉れた人は少なかつた。然し皆本氣に弓を引かうとする人達ばかりで嬉しかった。

二月八日。納會を開いた。雪がち／＼降りる納會には相應しい日だつた。楠師範の次第巻藁、選手の禮射があつて、競射に移る。

- 十中、北條。七中、藤井。山根。塩田。
- 野平。六中、上野。五中、吉田。恒田。
- 四中、長坂。

南下報告。

熱い涙と共に誓つた四月五日の晩から一年は経つた。その一年の間。涙で固めた決心を以て努力した。然し如何に努力しても努力がしたりなかつた。吾等は月日のあまりに早く

過ぎ行くを嘆いた。

然し遂に南下の時は来た。

試験の済んだ其の日の午前十一時。停車場では校友幾人が渦巻いて送つて下さつた。

「畜に血を盛る……」壯麗な歌は吾等の胸を貫いた。涙を頬に傳へながら「かてー」と叫んで呉れる校友の顔。萬歳の聲を残して汽車は動いた。吾等の頬には知らず知らず熱い感激の涙が流れてゐた。

「勝たうー」と低い力が籠つた聲で吾等は手を握り合つた。

懐かしい先輩に迎へられて京都に着いた。洛陽の空は暗く曇つてゐた。

一日夜在京先輩の歓迎會があり、先輩より熱烈なる奮勵の辭があつた。

二日夜集會場で京大の歓迎會があつた。優勝弓の返還式がある。集つた學校は、二高。三高。四高。六高。七高。八高。大阪高商。神戸高商。愛知醫專の九校だ。

去年の優勝校の大阪高商がしつ／＼と優勝弓を持って入つて来た時。「何糞！」と心の中心で叫んだ。

抽籤の結果、四高の相手は第一日は八高。第二日は三高。第三日は神戸高商と定まつた。

三日は明日と言ふ夜が来た。明日の戦を胸に描き乍ら、安らかにして安かならざる夢を結んだ。

夜は明けた。空は曇つてゐた。よく眠れたと選士は起きて戦に臨むべく弓を張り、矢を調べた。戦の前の沈黙。選士は互に顔を見合はせて悲壯な笑をかけた。

闘の幕は切つて落された。

武備はささのつた。先鋒塩田。阪本。山根。北條。藤井の順で立つた。八高は勿論吾々の眼中になかつた。

意外。不思議に矢は外れた。最初の十本の禮射に二本しかあたらぬ。上氣つたのか。否。

選士は平然としてゐた。互に信頼しながら。結局其の日の收穫は二十五本。

無念。吾々の努力は水泡に歸したのか。かかるレコードは今迄の練習中にも一度もないものだつた。本舞臺にこの成績。あまりに醜態である。先輩は慰めて下さつた。明日があるぞ。

本日の戦の跡は。最高は七高。三十中、神戸高商。愛知醫專。二十八中。三高二十六中、次が四高。二十五中である。

午後武徳殿に練習に行く。雨は烈しく降つ

て来た。六高。八高等も大勢来たから歸る。

夜が来た。明日の仕合は朝だ。寢なげりやならぬ。然し兩肩には四高の名譽がある。泣いて送つて呉れた校友の顔が眼底に浮ぶ。

「で落ちついてやれ」と云ふ校長先生の言葉が耳の底でなる。

「何糞!! 十本迄なら平氣だい」と元氣な聲で誰かが叫んだ。

「明日だ。明日だ。」と誰かがそれに答へた。奮闘すべき第二日が明けた。元氣な義太夫の聲が床の中から響いて来た。心配してゐた先輩の顔にも微笑が浮ぶ。

相手は強敵三高だ。選士同志は非常に親しい者もあつたから話をしながら時を待つ。三高には一本の差がある。敵の御大多田と、塩田は立つた。塩田の悠々たる態度は敵を壓倒して見えた。然るに一立目、二立目で、四高は三高に五本の差が出来た。此處で敗れたら、勝利は永遠に去つてしまふだらう。吾々は決死の色は浮べて立つた。「よしよし」と言ふ應援の聲を後に力強く感じながら。

見よ。三立目には四本を肉薄した。四立目二本を抜き、反つて一本の勝ちとなり、最後に遂に又一本を勝つて差二本となる。時に四

高は三十一中、三高は二十八中である。第二日の結算に於て、四高は合計五十六中、七高と共に第一位に上つた。次は三高、五十四中、神商五十中、六高四十八中の順となつた。

「よくやつた。明日こそ頼むぞ。」と言ふ先輩の言葉や、「でしつかりやれ」と言ふ懐かしい言葉に浴しながら熟睡した。

審判の最後の日が来た。總ては今日の午後四時迄に定まるのだ。吾々は最後の番だ。敵の情勢を見て、悠々闘ふのだ。勢の衰へ行く敵は怒るゝに足らず。矢張り敵は三高だ。今日は三高は窮鼠の勢で来るだらう。特に單獨と言ふコンヂションの下にある。

果然。三高は最高レコードの三十五本を得た。マネーシュー上野顔色は蒼かつた。それは無理ではなかつた。

團將塩田は稍熟ありて床に臥してゐる。「何大丈夫」と思ひながら其處に不安はあつた。「何。平氣さ」と言葉では言へど、選士の顔は悲愴の色が漲つた。

勝敗の如何は、最後の瞬間にある。四高魂の力は最後の瞬間に現はるべきものだ。時は来た。塩田は立つた。病を押して立つた。

た。悲壯な感が胸を襲つた。

六日 八日 七日 八日 二十九本は計上された。もう五本だ。矢は十本残されてゐる。塩田は皆中の猛威を以て既に八本を食てゐる。

「あれがまた二本あつて、次が二本また中ればそれでおしまひや」と後で大阪高商の選手が囁いた。

三高の團將小畑は、居た、まれずして立つた。

果然塩田の矢は外れた。早矢抜き皆中の阪本の最後の矢が落ちた。三高稍生色あり。然しそれも最後の息だ。悠々山根は立つた。

采配は二度ひらめいた。其の日の最も不成功の北條は立つた。彼その矢を失せば、慚死すべしだ。弓が飛んだ。砂が飛んだ。的がなつた。再び立つた。弓が飛んだ。砂が飛んだ。再び的がなつた。藤井の最後の止めの矢は弦音高く鳴つて最後の幕を閉ぢた。

勝つた。勝つた。危く勝つた。三高に勝る畜二本。何故か知らないが涙は流れた。戦の跡を擧げれば

第一日 第二日 第三日 計
四高 二五 三一 三五 九一

三高 二六 二八 三五 八九

七高 三〇 二六 二三 七九
六高 二三 二六 二六 七五
愛知 二八 一九 二七 七四
神戸 二八 二二 二三 七三
大阪 二二 二二 二四 六八
八高 二〇 一九 二四 六三
二高 一六 一六 一九 五一

第一日に優勝してから三年目。先輩諸兄が流した涙と血で赤く彩られた優勝弓を握つた。

懐かしい様な。憎らしい様な赤い弓を握つて、「畜に血を盛る」をなげやり歸つた。

かくて私等は勝ちました。然し私等が勝つたのではありませんでした。それは力強い先輩及び校友諸兄の御後援によつて辛くも獲ち得たものなのでした。

吾々の努力はまだ足りませんでした。今後益々努力する決心です。

終に在京諸先輩の熱い御厚意。態々松本から出て来て下さつた根本先輩の御厚意や、同じ宿に宿つて應援して下さいました校友諸兄に厚く感謝致します。(K生)

大 會

五月十六日校内競射、

出席して下さつた人が餘りに少なかつたのは残念だつた。

- 九中、楠師範。北條
 - 八中、中谷。
 - 七中、湯本。藤井。塩田。山崎。
 - 六中、三好。
 - 五中、阪本。水谷。恒田。仲谷。
- 五月十六日午前。十數對外競射をする。一中中師範やウオルフアト先生や來賓なども来て盛會だつた。

- 八中、楠師範。
- 七中、塩田。藤井。
- 六中、山根。北條。恒田。
- 五中、中田(一中)。

旭(二中)。中谷。長屋。山崎。金的に水谷の功名となつた。

午後一中對二中の試合をした。

- 一 中 二 中
- 3 岡内山 14 深山
- 3 河内山 1 村田
- 7 中田 3 旭

右の様で、一中の勝ちに歸した。

遠くは逆風がふいてか非常に成績がよかつた。

- 八中、楠師範。藤井。塩田。恒田。
- 七中、鴻葉部長。

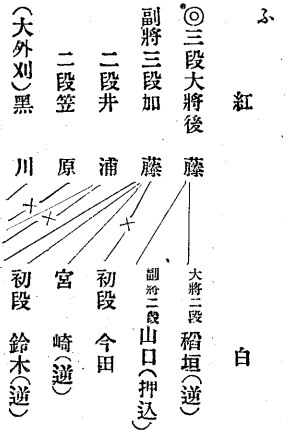
五中、湯本。北條。深山(二中)。

扇の的は高橋の先づ功名となり。續いて塩田、藤井が射落した。

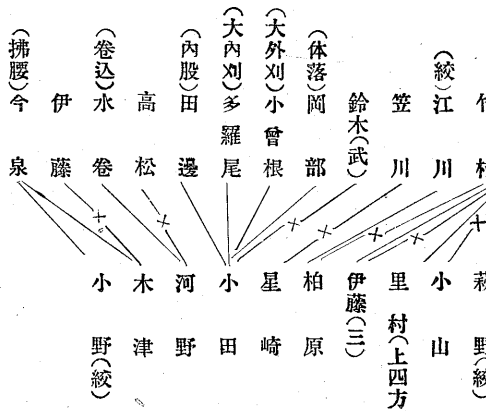
終に常に思ふことであるが。あまりに出席して下さる方が少ない。これはまだ弓に興味に乗らないからだと思ふ。副科丈で止められるのはあまりに残念だ。あれ丈では興味なんか勿論ではない。もつとどんどん道場に出てこられて選手などと一緒に練習して頂きたい。きつと止めるに止められない興味と實益と修養を得られると信ずる。(K生)

柔 道 部

五月十五日午後三時より送別柔道試合を行



竹 村 萩 野(絞)



かくて卒業生側の勝利に歸した。卒業生諸兄は勝て悲しまれた。我等の技術未熟其實力に於て遠く卒業生諸兄に及ばざる事を痛切に感じさせられた。

今日の大阪朝日は京都の試合は期日變更八月二十三日より行はれると報じてゐる。さうなれば最早武徳殿々上敵と相見える日まで幾許も余さぬ。敵は積年の怨をこの一戦に報すべく擧つて爪牙を磨いてゐる。勝者た

る吾等が勝て兜の緒を締めるのこは其意氣に於て大いに違ふのである、加之我等は今年後藤加藤以下の一騎當千の勇將七人までも失はればならぬ、いつまでも勝利の酒に酔うてゐたならそれこそ噬臍の悔がある。

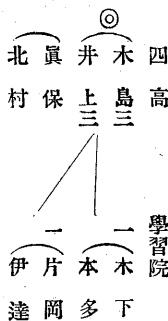
選手諸君よ、靜かに思へ、先人の血と肉とで築き下された我が四高柔道部の光榮ある歴史を、戦の日は迫れり、正に是れ今年は我四高柔道部危急の秋である、七度洛陽の地に覇者となり華の高塔に更に寸尺の高きを臻すか將又一朝にして先輩諸氏の肉血の塊で出来上つた聖城を敵の脚下に蹂躪させるか一に懸つて諸君の双肩にあるのだ、近時動もすれば選手の氣風緊張を缺くの嫌がある延いてその影響練習の上にも及ぶは必然である願はくば各自の責任の重且つ大なるを自覺して決然立て一意練習を勵まれんことを、南下の期日變更の報を手にして致へて諸君の覺悟を聞ふ。

(五、二三兵)

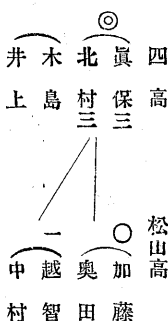
庭 球 部

南下記録

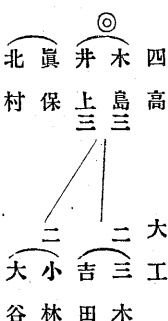
對學習院(四月六日午前九時半より)



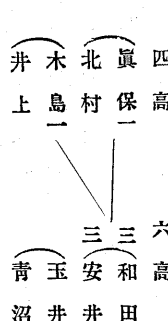
對松山高(四月六日午前十一時より)



對大阪高工(四月六日午後一時五十分より)



優勝戦(四月六日午後三時半より)



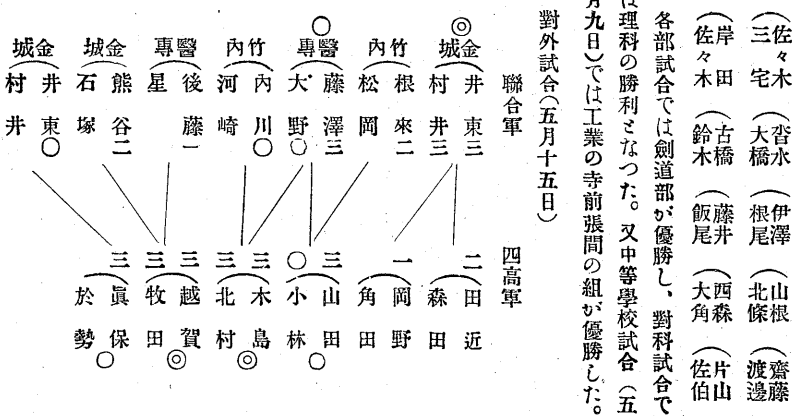
京都では毎日雨であつた。選手に取つて雨が降ると言ふこと程憤慨せしめるものはない。實に我々をして脾肉の嘆に堪へざらしめた。四日には雨が降らないで、庭球日和であつたのに、我々の命掛の試合を止めて、どちらが勝つてもどちらが負けてもいゝやうな東西兩大學の庭球試合を行ふなどは京都大學の庭球部も不親切なものであると専ら参加した高等學校や専門學校やの間の評判であつた。

六日には漸く空が晴れ上つた。そして五組宛の試合が二組宛の試合となつたのだ。コートを使つて今日一日の中に全部を終了させて仕舞ふと云ふのだ。
恚う云ふ具合になつて本校では上記の二組を出して戦つたが優勝戦にまで入りながら奮戦時に利あらず遂に敗れた。かくて我々は諸兄の期待にも背き我々の意氣込にも背いて敗者となり無念の涙に咽んだのである。

かくの如くして遂に我々は敗れて仕舞つた上は、只來るべき南下に於いて校友八百諸兄の期待に副はんがためにあらゆる努力をなす事——その一事のみである。

春季庭球大會

校内試合(五月三日)優勝組



對外試合(五月十五日)

聯合軍

四高軍

大會が終つた翌十六日午後三時から送別試合が行はれた。五組宛であつたが一二年生側の勝となり卒業せらるゝ三年生側の負となつた。どちらが勝つてもどちらが負けても結局は四高の勝であるが故に、試合が済むと笑ひながら意氣揚々と歸途についた。(盛田記)

陸上競技練習會

追々と内容が充實してきた各競技選手は日毎に老練になつて來た我々は未だ此圓熟した競技を紹介するの機會を持たなかつた。心ばかりはあせつても其機會を促進せしむる唯一の原動力となる費用なきを如何せん、只躍る腕を撫して脾肉の嘆に暮れて居た、然れども東都に行はれた萬國オリンピック大會豫選競技會に於て頻々破る記録の報知は微弱な我を動かさずに置かなかつた、こゝに我々は多大の犠牲を拂つても心ばかりの陸上競技會を開いて我々の技を紹介して奮勃たる意氣を發揚して見ようとして五月九日の日曜を利用して決行することにした。

一般出場者を募集したが我々の希望通り自信のある選手諸君が主として應募せられたとは競技會同人の誇る處である、當日は曇り空で時々小雨がやつてきて我々の氣を揉ませたが斷行を決した。其爲に見物人はあまりなかつた。一本會の目的は見物の爲ではなくレコードの爲の會なのだから寧ろ見物人の少ない方を望んだ。一の規定の出場者も出たものは三分の一位しかなかつた、恐らく險悪な空模様で遠慮したのであらう。我々は八日から入夫にかはつて運動場の手入れをした。そして會のある九日の正午まで働いて漸く不完全な設備が出来上つた、選手一同はかくて競技が初まらざるに疲れて身体は綿の様になつた、然し我々の意氣は益々昂然たるものがあった、我々は近き將來には北辰會の一部として競技部を創設して四高からも世界的大手を出さればならぬ、こゝに我等の血は沸騰した。即ち次の次ぎプログラムに従つて行つた。

- 第一回 百米豫選。
- 第二回 二百米(五種の中)。
- 第三回 八〇〇米。
- 第四回 砲丸(五種を含む)。
- 第五回 棒飛。

- 第六回 二〇〇米豫選。
- 第七回 走巾飛(五種を含む)。
- 第八回 一哩(五種の中)。
- 第九回 槍投。
- 第十回 圓板(五種を含む)。
- 第十一回 十哩(短縮マラソン)。
- 第十二回 四百米。
- 第十三回 走高飛。
- 第十四回 百米決勝。
- 第十五回 ポップスタップエンドツヤ

ンブ

第十六回 千五百米。

第十七回 二百米決勝。

第十八回 リレー(八百米)

疲勞して居た割合に案外に早く進んで午後五時無事此會を終つた。其結果レコード次の如し。

- 二百米 林 賢材 レコード二十七秒
- 百米 林 賢材 同 十二秒五分ノ三
- 八百米 佐次孝徳 同二分二十秒五分ノ二
- 砲丸 牛谷富美夫 同 二十四尺
- 走巾飛 木村太郎 同 十八尺一寸
- 槍投 中村重次 同 百二十尺
- 四百米 齋崎 轍 同 六十秒

圓板 古橋勝治 レコード七十尺
走高飛 木村太郎 同 五尺
ポップ 古橋勝治 同 三十五尺二寸
見る處相當の成績を擧げて居る。此等の人は皆二日間は大夫となつて働いたのであると云ふことを頭に置いて此レコードを見たらずして辱しくないと思ふ。マラソンは天候の都合により五月二十二日に決行することにした。

我々は思つて居た通りにオリンピック競技の紹介が出来た。今後益々努力して四高陸上競技をして世界のオリンピック競技たらしめん事を期す。校友諸兄よ幸に御後援あれ。

尙當日は校長先生には終始熱心に御覽になつて居られた。此會を開催するについて上原先生及び遠足部の御後援に預つた事は我々は永久に記憶せねばならぬ。(武藏坊)

マラソン記事

徑路は本校正門を出発点として野町に入り野々市、額谷、窪等を経て六斗林より本校々庭に至る十哩短縮マラソンである。

時は佳し新緑の五月も末の二十二日陸上競技の本春の最後を飾る行事として勇士の意氣天をも焦さんぞす。五月晴の空は濃い紺碧の

深淵のやう。風がないので蒸し暑い、皆暑い暑いと云つてゐたが葡萄酒を飲ませてやるから走れと云つたら喜んで居た。校長先生も今日晴の出発を見送つて下さる爲に悠々待つて居て下さつた。午後二時正五十五分、校長先生の出發の合圖に正門前にスタートを切つた。八人の駿足は我こそ創業のレコードを作らんものさ矢の様に犀川大橋のかなたへ消え去つた。木村君と石塚君とが自轉車で後を追ふ。牛谷君と僕はタイムウオッチを見つめて待つて居た。

やがて待つ間もなく車のやうに驅けて來るユニホームが現れた。此の自信のあつた齋藤君である。運動場を一週して決勝線へ入つた時にタイムは一時間六分十九秒を示して居る。見事なレコードである。あの一高、三高の陸上競技に於ける十哩のレコードは一時間八分である。それを齋藤君が破つたのだ。

決勝点に居た數名は思はず「快絶々川」と叫んだ。一分遅れて佐治君が來る。ついで寺垣君が入つた。かくて四時半までに全部終了した。木村君が一同の勇姿をカメラに納めた頃は春の太陽は大分低かつた。石川屋でシトロとチョコレートに數時間の疲れを癒して來

らん學期の大活躍を期して目出度今春の競技の大尾を究うした。

今日は大成功であつた、先日の競技會も我が勞働して疲勞して居なかつたなら儘かにより優秀なレコードが出来たのである。此等のレコードから見れば決して捨てたものではない。大いに發展の見込がある。只それはいかに發展させて呉れるかと云ふのは校友八百名諸君の後援の如何に關する處である。翼くば諸兄よ、御後援あれ。

因みに本日の主なるレコードは次の如し。

- 一着 一時間六分十九秒 理一、乙齋藤
- 二着 一時間七分十五秒 一、三、甲佐治
- 三着 一時間十分 一、二、乙寺垣

五月二十三日(武藏坊)

旅行部

◎大正九年春季旅行班

今春の旅行班各班を通じて参加人員六十八名。

第一班 飛騨經斷(第五回)二十二名

班長 二ノ二丙(委員) 山口 學
記錄 同

- 二二丙 海野武雄 二二丙 仲谷 一二
- 三三 田島外雄 三三 齋藤 隆
- 二二乙 中村武雄 二二甲 千葉 元章
- 二二丙 古谷健太郎 二二乙 綿谷啓太郎
- 二二丙 久米猪之助 二二丙 鈴木 武夫
- 二二丙 近藤 千樹 二二丙 政岡 庄平
- 二二丙 原田 準平 二二丙 種本 正實
- 二二丙 田中 恂治 文一乙 清水 準一
- 理一甲 山崎喜雄 理一乙 三宅徳三郎
- 理一丁 水野 孝 理一丁 永井 正
- 理一丁 木下 和雄

第二班 能登一周(第四回)十八名

班長 一二甲 北村 得三
記錄 同

- 一三乙 相田 二郎 二二乙 新井蓮太郎
- 一二乙 吉田 眞三 一二丙 神山 秀雄
- 二二甲 廣川誠三郎 二二乙 高原 美文
- 二二乙 高島 正一 文一乙 山内 武夫
- 文一乙 石川 義一 文一丙 長山 修一郎
- 文一丙 關 弘 文一丙 岡野國三郎
- 理一丙 吉田 秀雄 理一甲 深井 基邦
- 理一丁 園田 太郎 理一丁 設樂 三郎

理一丁 山崎 雄造

第三班 五箇、白川郷(第五回)八名
班長 一三甲 秋山 鐵雄

- 記錄 三二 増田 知真
- 三三 堀 庫一 二二乙 田邊 彌平
- 二二丙 野平 忠 文一甲 荒井 虎雄
- 理一甲 稻原 悌六 理一乙 松井 丙吉
- 第四班 越前旅行 四名
- 教授 高島喜市先生 理一乙 飯村 三六
- 理一乙 河端 梁雄

第五班 佐渡旅行 十二名

班長 一三乙(委員) 福富 六郎
記錄 同

- 一三乙 川田 榮三 一三乙 齋藤 眞造
- 二三甲 五置 豊次郎 二二乙 筒井 正壽
- 二二乙 古丸 辰治 二二丙 關本 勘也
- 一二丙 種子島源三 文一甲 板垣市太郎
- 文一乙 宇山 美行 文一乙 佐々木直次郎
- 文一丙 望月 莊郎

第六班 雪のアルプス越え 四名

班長 一三甲(委員) 廣瀬 壽雄
記錄 同

- 記錄 一二丙(委員) 澤田 武太郎
- 三ノ二 石川 元雄

理一乙 若林唯四郎

△各班の記録は左の通り

△第二班 能登一周(第四回)

三月卅一日、金澤―高濱(徒歩四里)

春雨はしとしとと降つてゐた。第一、三、六の各班がもう出発してしまつた後なので、停車場も案内淋しい。高島先生と福富君とに送られたみんなが希望と驕喜とに輝いていそいそとしてゐる内に汽車は動き出した。

海岸に沿つた砂丘と、蜿蜒と走る國道との間を、絶えず進んで行く汽車の窓からは、砂地に植ゑられた、青い麥や桑が目に入つて来る。一行の誰やらが「よくまあ、出来たものだ、砂丘」と口吟した者があつた。此の邊一帯は、松林が並んでゐて、風趣頗る、佳なるものがあつた。

午後三時十分、汽車は豫定の羽咋に着いた。もう時間は遅くなつて居る。下車して、直ぐ發程の途に着いた。羽咋町は、郡役所のある相當な町だ。余等一行が町中を行く時、黒山のやうな人が、軒下、小路を埋めて、珍らしげに見る。何だ、と訊くと、寺に何かあるのだと答へた。この町に有名な社として、羽咋神社がある。毎日の雨で、泥濘道を没すると

いふ有様、これには一行は、非常な迷惑を感じた。田舎道へ出ると、遂が右手に當つた、白く光るものが見えた。邑知瀉だと解かつた。雨のため、霞んで見えないのは、残念だつた。

一里ばかり行くと、一ノ宮の氣多神社に着いた。時計は、四時二十分を示して居る。案内記を見ると、「國幣神社にして大己貴命を祀り崇神天皇の創建にかかる」とある。これだな、と思つた。歴史に明るいA君は「流れ造りだよ」といふ。歴史に暗い余は、「さうか」といつた。境内は古木で鬱蒼として居た。社殿の蒼古と景趣の幽邃とは、自然と有難く、感じさせられた。寶物觀覽を請うたが、只模寫と寫眞だけしか、見られなかつた。長手島に於いて、初めて海が見えた。春雨に霞んだ海は、活字に倦んだ余等の眼に、感興と、雄麗の念を惹き起すやうに、映じた。更に進んで瀧谷の妙成寺に着いたのが、五時三十分。妙成寺は、日蓮宗妙成寺派の本山で、昔は榮えたさうだが、今は余り汚えぬらしい。伽藍は、がらん、として誰も居なかつたやうだつた。併し寺の背景は、氣に入つた。それから高濱に至る二里余りば、單調乍ら兩側の松林

で厭きなかつた。一行の中四名ばかりが、空腹の結果、足の運轉が續かなくなつて、百姓屋に入ったのも、坐輿だつた。高濱へ着いたのが、七時三十七分だつたので、既に夜の幕は降ろされて居た。

四月一日高濱―釧地 (八里)

圓らかな旅の夢路も、平和な鶏の鳴く音に破られる。昨日の疲労も、一夜の熟睡に、全く恢復された。空は曇つてはゐるが、雨は上つてゐる。一行の元氣は更に振つた。八時半出發する。右に林を控へ、左に静謐な春の海に沿ふ平坦な道路は、雨に落ちつき、冷たい朝風が吹き、心神頗る爽快を覚え、心ゆくばかり歩いた。能登縮で名のある、安部屋では、白い布が干されてゐるのが、特に眼を奪いた。行くこと約三里、外浦の良港、福浦に着いたのが午前十時半位だつた。港口の磯巖と碧水は割合に注意を惹くに足るものがあつた。福浦を過ぎると、道路は急に細くなつて、高い絶壁の上に通するやうになる。歩々、海面を見眺るすき、そこには、大小幾多の岩礁が散在され、波の光、水の色が映え合つてゐる。晝食を喫した、機具岩のある邊は、儼に北海に誇るに足る、勝景であつて、此處な所

で、一生を暮したら、いゝだらうなどと空想をたくまじうして見た。途中、三菱とかで經營して居る富來嶺山を參觀した。幸に、此の金山の事務取締長に、六高を出た人で、山谷先生と同期生だといふ人が居て、説明されたり、案内したり試験をしたり、繪葉書を贈られたりして、非常に歓迎して呉れた。一行は得る所多きに、感謝して山を出たのが午後二時だつた。文明のシンボルさといふべき、偉大な器械力を見て、再び原始の自然に歸つた時、一種のアイロニーを感じた。赤い増穂の海岸を臨む富來の海を捨てて、山路に這入り、再び海を見出した、そこに釧地の漁村が横はつてゐた。釧地に着いた時、時計は五時十五分を、指して居た。海岸の絶勝に我を忘れた一行は、未だ日も落ちぬ前に着いたので、元氣旺盛、昨夜の比でなかつた。此處にある饒石文庫と、釧地名の起りを語る、面白い傳説の井戸や、七ツ岩を見て居る中に、ランブの光が、此處彼處に輝き出した。

四月二日釧地―輪島 (八里)

朝霧のやうな雨が、降つて居るので、一行は一寸悲觀の体であつたが、間もなくやんで、曇り勝ちな空から、時より日さへ差した。そ

れに勇氣づいて、八時半出發する。それから黒島に至る約二里の道は、磯傳ひの砂道と來て居るので、ザク／＼足が滅入り込む爲め、歩行は甚だ困難だつた。黒島まで、かうして海岸に沿つて來た道も、急に此處から右折して、段々海から遠ざかつて行つた。海から一里も隔たつた門前の總持寺に、來たのが正に十時四十分である。總持寺は、曹洞宗總持寺派本山の別院で、全國にも有名な寺である。門前の町を一名寺町とも、謂ふと聞いて、成程と感心した。案内を請ふと、一人の若僧が、説明をして巡つて呉れた。休憩すること三十分。

道は、門前から次第に、上り坂になつて行く。途中には浦上位の外、人家が余り見當らなかつた。峠の絶頂に近い處は、道路の粗悪で有名な處であるが、此の時も御多分に濡れず泥濘を没するの觀があつた。併し一度峠を越えて、下り坂になると、團子を轉がすやうに、輪島へ容易く到着することが出来た。四時二十分。宿に入るに間もなく、雨が降り出した。それでも輪島の町は魚の市で、賑やかだつた。夕方獨り、輪島崎の絶頂に立つて、輪島の町や、春雨に烟る岬々の出鼻が遠く、

畫のやうに見えた時は、悦しかつた。夜はコンバを開いて、宜しく睡んだ。

四月三日 輪島―大谷 (八里)

目を醒ますと、雨は依然として降つて居る。午前八時半、一同は紀念撮影をしようといふので、重藏神社の境内に集つた。重藏神社は、崇神天皇の御宇の創建にかかり、夫冬衣命と大國主命とを合祀したものだといふ。その中に幸、雨は止んだ。撮影が済むと、直ちに旅程を進める。町の端れには、漆器工場が處々にあつた。海岸を出ると、間もなく、霧に等しい時雨が海の方から長汀曲浦に打ち沿つた街道を横に、襲つて來た。併し一時間半ばかりで、これも止んだ。外浦に見える海は、富來海岸と比べて、一層形大な野性的のものやうに思はれた。此の日、何處の賤々苦屋にも、國旗が翻つて居た。祭日を祝す美しい心根が、こんな北海の寒村にも、あるのを見て、思はず、涙ぐんだ。

十一時半南志見村へ來た。それから一里ばかり續いた、海岸の磯邊と、巻坂を越えて、一時半時國村へ這入つた。時國村は、その昔、大納言平時忠の子、時國が住んだ爲に、この村名が起つたので、今でも時國氏と稱して、

その子孫が、住んで居る。余等一行は、かうした北海の絶域に、住むを余儀なくされた、平家の奇縁の運命を思ひ乍ら、その家を訪れた。主人は一行の来たのを見て、大いに馳走して款待に務められ、種々珍らしい話をして呉れた。

こゝから約一里は、岩石の多い嶮岨な場所であるが逢坂を越えんと、再び壮大な海岸に沿ふ、平坦な道となった。大谷へ着いたのが六時二十分であつた。夜半黒雲散して月白く凄惨な夜の海を遍れく照らしたが、又隠れた。

四月四日大谷―飯田 (八里)

歴史の語る所によると、昔、平家滅亡の際大納言平時忠が、大谷村に配流されて、薨じたといふ。今でもその子孫が分れて、住んで居るさうである。併し時の悪戯は、かうした子孫縁家にさへ零落滅滅の悲を、與へて今は駄目だ、と宿の主人が云つたので、行くのを中止した。八時半出發。磯傳ひに馬線を過ぎ折戸を経て川浦へ出た。川浦から狼煙までの砂濱に、鐵砲石と海綿がある。一行の中には、可成の石や海綿を、獲た人もあつた。狼煙へ来て、祿剛岬の出鼻にある、燈臺を觀た。燈臺に上ると、プリズムの層から成る、反射

レンズや、點火装置の器械などがあつた。案内をして呉れた人は、二等燈臺であること、一日に石油を三合消費すること、千八百燭光の光源が、反射鏡で一萬五千燭光に擴大されること、それが十八哩半の遠きに及ぶこと、冬の寒いこと、つぐみの獲れること等を説明して呉れた。餘り遅くなるので、二時發足。此處から道は急に南へ折れ出す。多くの傳説を持つ山伏山は右手に見えた。珠洲岬、三崎の海岸は、岬と島で好かつた。三時半頃須々神社を參詣する。矢張、崇神天皇の御宇の創建にかり、彦穗々瓊々杵命を祀つたものである。しつとりと、落ちついた森に包まれて居るので神々しかった。粟津から道は漸く磯を離れて、森林美に勞を忘れ、再び嶋島海へ出た。正院を通つて飯田町に着いたのが、五時四十分だつた。雨は、この時から一しきり、やつて来た。

飯田で、一行中海路直ちに、七尾へ行きたい人と、猶一日延ばして能登の勝を探りたい人との、二派に分れ、たうとう、此處で解散をすることになった。一行はこの解散によつて、最後のコンパを開いた。雨は依然止みさうもない。

四月五日飯田―和倉 (八里)

午前四時起床。五時の七尾行の汽船に便乗して、直ちに七尾へ行くこととする十六名は、四時四十分宿を出て、波止場に行つた。外は未だ眞暗である。船は遙か沖に、黒い怪物のやうに横はつて、一二の燈火が洩れてゐた。

五時、十六名の一隊を載せた船は、漢々たる黒煙を吐いて、靜々港口を出て行つた。九時、急に淋しくなつた余等二人は、亦發足した。内灣の海は鏡のやうに靜かだ。女性的だ。一面技巧に富んでゐる。殊に見附島や松波の景は堪へ難く、好かつた。正午に九曲灣に來る。能州に遊んで九十九曲の勝を探らない者は共に談するに足らずと、叫ばしめたこの九十九曲灣頭に立つて眺めた時、秀麗な風光に思はず我を忘れたのであつた。次いで小木へ着いた。小木は割合好い港であつた。此處からは毎日七時と三時に七尾行の汽船が發つので、三時の船に乗つて七尾へ行き一隊を追ふことにした。船は小木を離れて宇出津に入港し宇出津から、七尾に直航した。

を行くその新しい變化は、充分の慰安と、興味と、元氣とを與へたのであつた。船がかうして、淡い能登島を横にして七尾へ入つたのが六時半だつた。空には、眞紅の夕陽が輝き、地には淡い燈火が點いて居た。

和倉へ着いたのが八時頃であつた。一隊は既に到着して居た。

四月六日和倉―金澤

朝の溫泉程、優艶にして平和なものはない。溫泉の宿程、自由にして平和なものはない。世界三等の溫泉の湯槽に身を浸す時、凡百の苦惱も消え疲勞も去つて、只喜悅と。安心が残る。和倉の朝は正にこれだ、海濱を散歩する、七尾西灣の波は穩やかに動いて居た。能登島は前面に、横つて居た。石崎、屏風崎は、兩方から突き出て、屏風瀬戸を扼し、九十九曲にも劣らぬ、風光を呈して居た。余等は感興の餘り一隻の和船を借り、これを操つて、景を擅にした。午後四時、漸く日脚の西に傾むく時、汽船によつて、七尾に歸つた。和倉を離れて、屏風瀬戸に來た時、全面の光景は、えも云はれぬものがあつた。七尾の背に、不識庵の古跡、城山が見えて居た。七尾を發して、金澤に着いたのが午後八時頃であ

つた。(北村)

△第三班 五箇莊、飛驒横斷(第五回)

雑音と紅塵とを遠ざけ自然の育に最も呑氣な生活をして居る武陵桃源と云ふ所も、町を溢るゝ人の爲段々減つて一つ取残されたのが五箇莊である。人は純朴で、親切で、麗しくつて珍らしい古風な習俗が残つて居る。あたりは庄川の奇景で未だ俗人の窺ふを許さぬ仙境であると云ふ事で急に見なくなつて第三班に加はつた。最初に發表せられた豫定は其後變更せられて、我等は桂へは廻らずに直に分水嶺を越えて高山へ出る事になった。豫定は四月の六日には歸つて來る筈であつたが、雪の爲迂路を取る必要上七日に迄延長せられた。夢中で歩いたので、嘘もあるかも知れぬが、出来るだけ本當の事を書いて見ようと思ふ。

×× ××

三月三十一日小雨(第一日)金澤―城端

試験が終るや否や、家に駆け戻つて視衣と地圖の入つた雑囊を取つて停車場に集つた。城端迄は汽車である。窓の外では雨は霽れて綠草が一面に萌えて出で田と、青黒い森が陰

慘な空と共によりふれた郊外の景を形成して、パノラマの如く廻轉して居る。一れむりする閑もなく高岡へ着いたので、汽車を下りた。こゝで同車して來た第六班アルプス行の連中を見に行つた。皆命がけの旅行だからとて煤煙で黒くなつた顔を謹厳らしく車窓に並べて居た。どの顔を見ても、十日や二十日雪の中に入れて置いても死にさうもないのを見て安心して城端行の汽車に乗移つた。此處で一行は八名である事がわかつた。平凡な景色の中を走る箱汽車は、稍々あつて城端に着いたので五時頃には宿に着いた。八人が火燧の一邊を半分宛占領して休んだ時は試験のラストヘビーの爲聊疲勞の体に見え、あちらでもこちらでもアウンアウンと云ふ欠伸が聞える。夕飯が七時頃だつたので察の連中は空腹がつて弱つて居た。夜は第一回コマバを舉行し、勢揃して町をアラ附いた。宿に歸つて驛ようと思つたら、朝からの雲が散つて月光が靜かに照つて居た。一行は歡喜した。

四月一日晴(第二日)城端―小白川

今日からが、本當の旅行だ。八時頃宿を出て一行は元氣旺盛に飛驒の山に向つて南下した。昨日の降雨の爲先路の泥ンコには閉口し

た。帽子迄泥にまみれて漸く山道に入つた。上田迄行くに今度は道には一尺程雪がある。此雪は高山の手前迄消えずに一行を苦しめた事を附記して置く。此處から標高七三七米の細尾峠である。随分苦しい峠で雲の奴が足もとに立迷つて仙人に成つた様な気がした。眼鏡の曇つたには閉口した。やつとの事で雪の峠を越し上梨に着いて晝飯を食べた。こゝから風俗は段々變つて来る。子供も大人も「たつつけ」と云ふ袴をはいて居るからまるで平安の御所のお庭番と云ふ様な感じを興へた。これから庄川の流れを溯るのである。此川の兩岸は總て切立つた峰で樹木が麗しく茂つて居る。山の麓には農家の藁屋根が稀に散在し川の岸は數十丈切立つて灰色の岩石露はに、其下をあらゆる叫喚と怒號とを以て庄川は猛り狂つて流れて行く。美觀と云ふよりも凄壯の氣が漲つて居る。所々橋もあるが釣橋で粗製品だから歩くに上つたり下つたりして恐い。道はと云ふに切立つた峰と切立つた崖との間に附いて居り、半分は雪が占領して居るから歩く所はせいふで三尺位の細道だ。此道を進んで行くに歩危と云ふ場所がある。最も注意して渡らねばならない所だ。三時頃

西赤尾に着いた。時間が早いのも一つ先迄フン張る事にし、小白川と云ふ村落迄来た。戸数が八軒程の村である。我等は此處で農家に泊る事にした。本日の行程九里。

一寸農家と云ふもの、状態を述べよう。農家は藁屋根で大きく、家の中は晝尚暗く小生等家に入つても皆目眞暗だから蠟燭をつけて居た。家の中央には大きな爐が切つてあり、爐の上には大きな板の釣棚があつて物を乾すに用ひる。この板は煙で黒光りだ。家族の数は十七八人位だつたが、桂の方へ行くに大勢居ると云ふ事だ。その家族が爐邊に行儀よく竝ぶのだ。大將方の常食は稗ださうだが我々には優待して米の飯をたいて呉れた。併し半煮だつた。副食物等頗まつく以て如何に彼等の生活が質朴なものであるかが解つた。

四月二日小雨(第三日)小白川―福島

今日の道は昨日に比して更に危険なものであつた。

案内者を頼んで出かけた。今の日歩危は大仕掛で、此地方では「ノマ」と云ふ崩雪の跡が至る所にある。左は足下千尋の谷底に、庄川は白い波頭を立て、我等を威嚇し右の方には切立つた山から時々石や雪塊がゴロゴロと落ちて

魂ツ玉を寒からしめた。併し乍ら、それは何さい雄大な景色であつた事だらう。千米級の高峰の頂から下幾尋とも知れぬ谷底迄一直線に、崩雪の跡は眞白な山肌を赤土色に染めて居る。山氣人に迫るとは此間の消息を云つたものであらう。些々たる人間の事業なんでものは此景色に比し何と小さいものではあるまいか。

鳩谷と云ふ村の宿屋で晝食をし、それから餘り危険で無い道をとどつて進んだ。一行は今夜は御母衣と云ふ所で泊る心算だつた。此處の遠山と云ふ家は所謂大家族の一で、一軒に四十人程も集つて一家族を成して居るさうである。朝から曇つて居た空からはホッリホッリ降つて来た。我等は一生懸命道を急いで薄暮御母衣に着いた。

併し此處に泊る筈の我等は失望した。御氣

の毒ヂヤカ泊められん」と云つて拒られたからである。雨はザア／＼降る。仕方なしに一里餘先の福島迄最高のヒツチでふん張つた。御母衣で一行中の野平君は一行に別れて引返した。皆は福島で泊つた。此の宿は山奥にしては思つたよりも開けて居た。もうそろ／＼地金を發揮とはじめて火爐の中で大氣焔を上

げた。本日の行程八里。

四月三日雨(第四日)福島―六蔵

六時に出發するに宣言して置いて、いよいよ出發したのが八時頃だつた。ドシャ降りである。マントをかぶつて行進した。道は昨日程危険性は帯びて居ないが、景色は同じ様だ。二里も来た所に中野と云ふ村があつて照蓮寺と云ふお寺がある。此村で休んだら、附近にかん屋があるに云ふ事で、評議一決して此のうど、ん屋を襲撃した。開店第四日目ださうで、床屋の副業ださ来て居るから振つて居る。此處で腹一杯つめこみ、此店をトコどんと命名して引上げた。此邊から山には白樺が生えて居る。あまり美しい木なので杖にした。牛丸で晝食を食べ吞氣にかまへて出發したのは二時。まだあと五里程もあるのに。

雨ははれたので元氣を出して行くと、白樺が澤山生えて居る。此邊は標高は八百米級であつて庄川は餘程細くなつて居る。三時過魚歸瀧と云ふ瀧に到着した。美しい瀧だつた。ここで一休して後醍醐峠の險を越えるべく、庄川と分れた。峠は霧雨と積雪とで頗る苦しい道である。フーフー云ひ乍らやつと上つた。此峠の標高は一四九米で頂はトンネルによ

つて山の他側に出るのである。此處から六蔵までは雪が深く一步毎にもぐつて倒ぶ。殆ど四ツんばひの体で九死一生と云ふ思をして六蔵についたのは六時であつた。標高が高いせいか(二〇一五米)雪が非常に多くスキーをするにはよい所だと思つた。

本日の行程 九里半

四月四日晴(第五日)六蔵―高山

今日も宣言だけは早かつたが出發したのは何れ八時頃だつたらう。相變らずの雪路をたどつて牛歩遅々として進んだ。地圖で見ても配した松木峠もさ程苦しからず、但雪の爲顛倒及匍匐は昨日に倍して、十一時に着く筈の夏

厩には正午過ぎいた。此處で晝飯を終り小鳥峠を越す。此峠は地勢上又植物分布上の庄川及神通川を分つ峠であつて、此峠を向うへ下るさう白樺等ない。雪も無い代り道も急峻なので、さなきだに先日来機關に故障を生じた秋山君と田邊君、雪の降つた時の北陸線みたいに一時間餘りも本隊と離れて延着するに云ふ始末。三日町の近くよりは雨君は白樺の杖物々しき豪の者に圍繞せられてヒョコ／＼びつこを引いて行かれたのは、御氣の毒乍ら可笑かつた。しかし「それぢや貴様はどうだ

つた」と云ふ質問が出るに一寸返答がしかねますので、此話はいれり。兎に角夕映の空を眺め、緑の田を久しぶりで見、蛙の聲をばじめて聞いて高山に着いたのは七時半。久し振で人間界に出て来た感じがした。夜は高山の町をアラ附いた。本日の行程七里半。

四月五日小雨、曇(第六日)高山―船津

夜の四時頃だつたと記憶する。枕元に機關銃の様な音がするので驚いたら、それは土地のすゝ掃ださうな。

御蔭で大に睡眠を妨害せられ、澁々起きて出たのが七時。外ではザアザア云つて雨が降つてゐる。宿に交渉すると、古川迄は馬車が通ると云ふので、一行中の金満家秋山君及田邊君は此の囚人馬車の様な奴に乗り一足御先に出て行つた。一寸云ふ、兎角金持なんでものは足が弱いものだ。と云つて、強健な雲助組も先日來の強行軍で、すつかり足がはれ、ヨチ／＼として歩くので路上の人民怪み見る事限り無し。古川迄行つたらもう先發の馬車組は先に出發した後だつたので、ゆつくり御飯を食へて船津指して出發する。杉崎より越中東街道を取りて神原峠を越す。一寸苦しい峠だつた。雨ははれて氣持よく、全力を上げ

てピツチを出したが先鋒が見えない。道の兩岸は積々ならかな山で庄川流域より餘程角の取れた地方色だ。此の道を進み乍ら出會ふ人毎に、先發隊の様子を聞いた先發隊は餘程人をして印象を深からしむる歩き方をしたせいか、或は人通りが稀なせいか、大抵の奴は出會つたと云ふ。そしてホンの二三丁先に居るさ云ふので、一生懸命に追附かうとあせつたが中々追つげなかつた。たうとう山のU字形になつた所でチラと其影を認めた時は蓋し父子再會の思がした。一行揃つて堂々——外觀はともあれ、氣持だけ——として船津の町へ乗こんだのが六時。第一班及第六班の泊つた同じ宿屋に泊り、少々地金を發揮した所宿のマクドさんの氣嫌をすつかり損つて了つた。奴さん曰く「此前の方々は、それはおこなしかつた」と以て如何に第一班諸君が靜肅に旅行せられたかを推知された。夜は早速ユムバをやつた。町は丁度お祭だつた。本日の行程九里

四月六日晴(第七日)船津一舟掛

八時頃宿を出て先三井鑛山を見學せんものと鹿間に行つた。船津から約半道はなれて居る。九時から參觀が許されたので小使に案内

せられて入つた。此鑛山は飛驒第一で最完全な設備が施され銀、銅、鉛、亜鉛を産するさうである。各々掛りの人が来て精鑛と冶金とを見せて貰つた。大きな機械がゴトゴト動き調子がガタンベシシと行つたり來たりして居る光景は我々の目から見ては壯觀だつたと云ふだけだ。係の人はライムストーンだとか何々ライトだとか云つて頗丁寧に説明して呉れた事を感謝する。十一時迄見學しそれから神通川に沿つて下つた。途中で我々は二ツに分れた。堀君と自分とは一行より早く笹津迄強行し本隊は悠々雲を賞し川を見、充分に景色をゲニイセンして片掛迄來て泊つたさうである。(増田)

△第五班 佐渡旅行

佐渡へ佐渡へと草木も靡くの謠に誘はれ、あの未だ何處もなく原始的な匂のする様な北部海岸一帯の自然美に憧れ、國中平原の遺跡に承久の昔を偲びんご、今年始めて作られた佐渡旅行班の一行十二名が金澤驛を出發したのは今にも雨の降りさうな夜の十一時五十分であつた。

四月一日、直江津に着いたのが朝の五時五

十四分、雨はいつの間にか降り始めてゐた。眠むさうな目つきをして海岸行き、回漕店で本日より定期航海開始の筈の汽船が出ないと聞いた時には一同がっかりした。仕方なく八時五十分發の汽車で新潟に向つた。午後一時廿五分新潟に着いた頃は雨は殆んど止んでゐた。三時出帆の汽船に乗る積りで癪に障る程長い四百三十間の萬代橋を渡つて、汽船場に急いだ。併し此處でも亦失望させられた。即ち數日來の雨の爲め信濃川が増水して佐渡より來る汽船が川を溯れないさかで又佐渡行の汽船がなかつた。従つて明日の出帆時間も不定だつた。金澤を出る時には、こんな不便だとは思はなかつた。汽船場の直ぐ近くの大谷旅館に泊ることに決めて市街をぶらついた。夜は一同各々名乗りをあげて後豫定を相談して初の豫定を遂に行ふことに決定はしたものの明日の出船があるかないかさ確でなかつたので稍心細かつた。

四月二日、朝になつて始めて午後四時に船が出るゝになつた。いくら不平でも仕方がない出ないよりはよほど。幾分やけくそになつて察歌を怒鳴り乍ら白山公園、日和山、及寄居濱等に出かけた。直ぐ近くの棧橋から乗る

こゝだと思つてゆつくり構へてゐた所が船が川を溯れないから濱から乗船さとのどだつた。此の船に遅れては萬事お終ひだと思つたかゝその濱迄一里足らずを喘ぎ乍ら急ぎ駈けつた。濱迄行つて見た所がなが／＼船が出さうでもなかつた。一の解で二三町沖の本船迄數回往復するのだ。實に呑氣だ、この爲め一時間半程も待つて漸く乗船した。併し汽笛が鳴つて黒煙を吐いて愈目的の佐渡へ向つた時には言ふに言はれぬ愉快を感じた。見渡せば佐渡は未だ雪に被られた金北山を中央にして呼ば答へる程の近さに見えてゐる。併しそれでも三十海里程もある。海上餘程波が荒く、加ふるに船が百噸餘だから非常に動揺する。ふりかへつて見ると出帆した濱邊に動いてゐる人々はおもひの様に小さくなつてゐる。遙か東には鳥海山の眞白な雄姿が空に聳え、機關の音と波の音とに合せて盛に察歌は怒鳴られ、そして船は白波を後に曳きつゝ、水津の崎の燈臺の火が近くなつた時には小雨が降り始めてゐた。船は相變らず揺れた。船に酔つてゐる人も多かつた。十一時前漸く佐渡の夷港に着く、解では又盛に揺られ、振られた。豫定の

野村館に落付たのはもう十二時に近かつた。併し昨晩の今頃の船の心配にひきかへ、今日はゆつくり炬燵の周圍に圓くなつて菓子を食べひ乍ら笑ひ興じた。船中の醜體談も出た。夕飯もすみ語も盡きて床に入つた時に、下の時計が三時を打つてゐた。

四月三日。九時過ぎに目が醒めた。霧の様

な雨が相變らず降つてゐて出發するにも餘り氣乗りのしない朝であつた。一行中二名は相川で本隊に合するとにして國中に向ひ、我々十名は鷺崎に向つた。四里許り來た浦川村の宮ヶ崎で辨當を喰ふ。鷺崎は未だ遙か彼方に雨に霞んでゐた。此處からは路らしい路はなくなつて、砂原の足跡を辿つたり、岩の上を飛んで歩いたりした。或は線濃き松の木の間から遙か下に岩にぶつかつて白い泡を立て、をる海を望む時三つばかり越えた。要するに今日の海岸は唯困難なばかりで悪くはないが賞る程の所もなかつた。併し我々の憧れた佐渡の自然美は明日の海岸であつた。八里半程歩いて六時半すぎ鷺崎に着た。宿屋なんかな

いと思つて來た此村で貧窮ではあるが汚い漁村には少し贅澤過る位の大丸屋と云ふ宿を見出した。菓子屋も一軒あつたので湯に入つて

後炬燵を圍んで語り乍ら駄菓子コンパも出來た。始め他の事は云はずに一夜の宿を乞ふた時に、長い胡麻搥毘のある主人らしい人が爐の側から「あなたがあたは加賀の金澤から参つたのですか」と聞かれて驚いたが又得意であつた。後で聞いた所によるさ彼等にとつては現社會を覗く唯一の窓とも云ふべき佐渡新聞で我が旅行班の豫定を見て、來いと云うたさて行かれぬ此の孤島の北の端迄遙々物好きにもやつて來る我々の一行を大なる期待を以て待つてゐたらしかつた。而して今我々を迎へた彼は喜色滿面に溢れて爐の側に机を前にして髭を擦り乍ら久し振りに話相手を得たかの如き態度で先づ此の附近に直接關係があると思つてか盛に道路法案を論じ、通信機關の不公平を攻撃し、はては原内閣に及び、近村の生活状態を語り、談容易に盡きさうにも見えなかつたが時計が十二時を報したので明日の豫定になつてゐた相川迄の模様を詳しく聞いて後暖かい炬燵に潜り込んだ。外ではやはり雨の音がしてゐた。

四月四日。四時に起きたが餘り眠かつたので五時に起きた。空は全く晴れてゐた。日の出を拜み乍ら食事をすまし、そして宿の息

に村端れ迄見送られ乍ら、六里の難険を含んだ十四里を突破すべく十人の健脚連は思ひ出多き此村を辭した。太陽は未だ地平線を離れて間がない、金波銀波は漂ひ、潮風は冷かに吹いて、脚も軽い朝であつた。すぐ海軍望樓のある彈崎に出た。此處には今度新に燈臺も出来た。茂浦の濱に出る。二萬圓を投じて此の燈臺を作るに至らしめた暗礁即ち海唇島は遙か沖に白く波を打つて見えつ隠れつしてゐた。左手には稍沖に兜形をなしたミクリ岩があり、それに隣つて二つ龜島が青々した芝生を纏ひ、字義通の大きな姿を横へてゐる。砂嘴つたいに渡ることが出来る。ゆつくり時間があつて六十七米の此の島の頂に立つて眺望を縦にすればどんなに愉快なことであらう。

眞白な砂濱から緩傾斜をなして背面の山に連る所は又一面の柔い芝生である。實に大きな眺めである。我々の大きな期待は裏切られなかつた。此處に來て始めて、眞に大自然の壯麗さに接する所は日本アルプスのみでないことを知つた。暖かい春の日光を全身に浴びて、芝生の上に大の字になつて寝ころび、少らくは茫然として誰も行かうと云ふ者はなかつた。之にひきかへ一角を廻れば白砂は一變して大き

な石ころとなり十數町も續いてゐる。賽積とはよく名づけたと思ふ。大きな岩の洞穴があつて地蔵尊を安置してある。附近には、あちらこちら一面に小石が堆く積んである。幼児が父戀し母戀しと積む石を邪惡な鬼目が現れて積んだ石を踏み潰す光景が想像されて恰も地獄を旅する思ひがした。扇岩を見て願の村を過ぎるとき時になる。時の右が突出して大野龜島となり、一方は海岸より直立して一六六米の岩山をなし、一方は芝生の緩傾斜をなしてゐる。此附近迄ゆつくり來たか先きが案じられてか誰か始むることもなく次第に速力が増した。海岸から稍離れた北鶴嶋、眞更川の二部落を通る。此附近には牛が放し飼ひされてゐるので、慣れる迄始めは恐しい。海岸から岩ばかりで突立つた笠取峠の頂で松の木蔭に憩ふた。ゾツとする様な脚下には大ザレ川の水音が微かに聞えてゐる。ふり返つて見渡した景色は云ふ迄もなく我々の要求通の眺めだつた。又砂原道に出た。岩谷口で辨當を食ふ。かなり急いだ路が悪かつたため、朝から未だ四里半位しか歩いてゐなかつた。關の村でも少し休んだ。禪棚岩あり。次の矢柄村の掛橋は時間

がなかつたので見なかつた。矢柄川を渡ると

大倉の走である幾つものトンネル等があつて、親不知なんか到底及ばない。随分時間がかつたが、どうかこうか六里の難険も恙なく小田に着た。小田からはもう郡道で、道はかなりよかつたが併し我々の前途には未だ八里の道が横つてゐて、而かも時間は一時も、とくに過ぎてゐた。切りに菓子か食ひたくなくなつたがなかつた。道がよくなつたかと思ふと雨

が盛に降り始めた。もう景色も何もそつちのけで話もせず夢中に歩いた。そして高下村に來て始めて駄菓子にありつき腹一杯喰つた。餘り休み過ぎて四時になつた。併し片邊から戸中迄の一里半の山道だけは、未だ明るい中に越えなければ、小便三町の速力で雨の中を急だ甲斐あつて全く日が暮れた時には我々は戸中に着してゐた。又少らく同速力で進み北沢に來た時はもう、かなり疲れてゐた。相川迄二里と聞て菓子屋で又少らく動けなかつた。愈餘す二里といふ所迄漕ぎつけたが併し未だ之れからが又一仕事だつた。三つ村を越えるに相川だつた、非常に長かつた、一つも二つ目の村も過ぎ三つ目の村に來て始めて相川の電燈を遙に望んだ時は思はず心の中で萬歳を叫んだ。もう疲れも何も忘れて敵の城で

も占領した勢で、寮歌の聲も高らかに相川に入り、意氣揚々として高田屋に投じた。かくて此の旅行第一の難關も無事突破することが出来た。疲れではゐたが誰の顔にも得意さが溢れてゐた。忽ち町中の評判となつて町の湯屋に行く町の人はいを奇怪な眼を以て眺め且つ話しかけ、そして呆れてゐた。湯から歸ると今日一日の疲が一度に出た。食膳の並んでゐる部屋迄四つ匍ひになつて進む様は滑稽でもあり又悲慘だつた。久し振の御馳走だつたので大いに食つた、身体は綿の如く疲れてゐたが併し歩く時の様な勢で盛に食つた。稍落ちついてから今日の成功を祝してコンパをやつたが我々の欲するものは、もう食ふことではなくて寝ることであつた。そして床に

四月五日。第一の難關を突破した後はもう旅行らしく思はれなかつた。昨日の疲れで少し寝過ぎて九時過ぎに起き、雨が少し降つてゐたが綺麗な白い小石が澤山あつて、パチパチや連を打つてゐる濱邊を背景にして記念の寫眞をさつて。遙か彼方の千疊敷や横島も背景の中にあつた。それから佐渡嶺山を參觀す。

門外漢の我々には青化場、溶鑛爐等は唯だ見たさ云ふに過ぎなかつた。それよりも寧ろ二千尺の大立坑を下つて見たかつた。分析場には二人の先輩がゐる特別に鑛石標本、坑内模型等を見せてくれた。昔榮えた金山も今は其産額も餘程衰へて年産額僅かに百貫とは心細い次第だ。觀覽を終へた頃には雨は全く止んで日が照り出した。二隊に分れて一隊は中山峠を経て直ぐ河原田へ、我々は少し里程が長くなるか海岸を廻るとにした。相川の町端れの濱で辨當を食ひ餘り遊び過ぎて四時になつた。併し昨日急いだ代りに今日は出来るだけ香氣にやつてみたかつたのだ。従つて野次をやり、子供にからかひ色々の惡戯が演ぜられた。あの二ツ龜、願附近の大自然に接した我々の目には此附近の海岸は餘りに小刀細工的で餘りに俗化してゐる様に見えた。併し相川から二里許り來て、稻倉村附近で見た日没には思はず喝采した。二見で全く日が暮れた、菓子屋で少らく休んだ。二見から道は少らく油を流した様な眞野灣に沿ふて進む。實に靜かな夜で唯五人の規則正しき足音のみが聞かれた。水に映つた遙か彼方の火は確に新町の火であつたから。澤根町から河原田町迄は一里

餘で家續きの道である。我々が八時半頃河原田の江戸屋に着た時には他の隊は二時間半程も前に到着してゐた。今日の里程は中山峠越は二里半、海岸廻りは約四里半。

四月六日。八時頃宿を出た。兩津街道を二十町許り進み左に折れて數町行く右手に小さな森があつて玉垣を環してその中に小さな石標が立つてゐる。之が泉村の黒木御所の跡である。世阿彌元清の金鳥集に「西の山もこ

を見れば人家、いらかならべ、みやこ見えたり、いづみと申す所なり、之は古へ順徳の御配所なり。しかれば御製にも、かぎりあればかやが軒はの月もみつ知らぬは人の行くすゑのそら」さある如き泉は今は見ることが出来ない。其處から市澤に至り砂照寺を訪ふ。日蓮上人が塚原根本寺から移されて文永十一年赦されて鎌倉に歸る迄三年間住居の寺であつて今も多くの寶物を藏してゐるが寺主が居なかつたので見る事が出来なかつた。再び河原田に引き返し眞野の入江に沿ふた松並木を新町に行く。戀ヶ浦あり。碁盤波の所であるが今日は不幸にして波荒くて見られなかつた。又承久の普順徳院の御着船地である。今は此處には「いざさらば磯打つ波に」との間は入沖

の方に何事がある」この院の御製を刻した大きな石標が立つてゐる。之は院が御着船後御父君御鳥羽院の隠岐に御遷幸の報に接し御嘆きの餘り詠じ給うたもの。此の御製と今一つの「思ひきや雲の果て迄流れ来て眞野の入江に朽ち果てんとは」と歌はせ給うた御製を思ひ浮べるとき誰か涙を濡さぬものがある。此處から東數町に眞野宮があり目下新築中である。又少し行くとき眞野の御陵がある。城内老松枝を交へ、さすがに幽寂森嚴人をして自ら襟を正さしめる。承久三年義時の爲めに此の島に流謫され、二十二年の憂き年月を此絶海の孤島に經させ給ひ、仁治二年聖壽僅かに四十有六にして崩御あらせられ聖體を茶毘に附し當時の供御臣池清範が御遺骸を此地に納め給ひし昔を偲ばば唯涙にくる、のみである。辨當を食つて後近道をして國分寺に行つた。天平九年の創建にかゝり本島最古の寺院である。次に妙宣寺に行く。境内に日野中納言實朝卿の墓がある。又附近に阿新丸が父の仇を報せんとて身を潜めたさいふ阿新丸松があるけれども疑しい。本街道に出で順徳院第一皇女の墓に參詣し、又約一里餘にして根本寺があり、日蓮七人佐渡に流され妙照寺

に移さるゝ前一年間假居した三昧堂を見た。新穂村から分れて河原田街道に出た頃は日は全く暮れてゐた。又一里半の夜道を重い足を曳きつり乍ら夷町の野村宿に着たのは八時前だつた。食後炬燵を圍んで名残のコンパをやつた。今日の里程約八里餘。

四月七日。愈佐渡に別れる日となつたが午前の汽船がなかつた。午後の出帆時間も定らなかつた。皆稍やけ氣味になつた。夕方今一度と夷の町をぶらつき兩津橋に立つた。丁度漁船の出入時で賑かだつた。此處は加茂湖と日本海の通ずる所である。一方に加茂湖の静波を、一方に日本海の怒濤を見渡し、仰で遠に金北山の暮雲を望み見た。晩にやつと汽船が出ることに決つた。十時頃船に乗り込み出帆したのは午前一時だつた。其香氣さに呆れた。

四月八日。ペンキと油と石炭の臭で眠れない一夜を明かして、東天紅をそへた頃には、佐渡はもう遙か遠くなつて新潟の港が明瞭に眺められた。河口を少し入つたが増水の爲め汽船は潮れず静を待つ事になつたが、船が来たのは二時間程も後たつたのは呆れた。辛じて九時四十分の汽車に間に合つて、午后八

時四十分金澤着解散。(福富)

第六班 日本アルプス横斷

第一日(四月二日)

雨は朝から降つてゐる。一班の連中が盛に成功を祝してくれる。柿下屋を出たのは、八時頃だつた。町はづれから高原川の北岸に移つた。蠟燭で廢煩して行く此所あたりの自然と神岡嶺山のお影で榮えて行く船津の町に、最後のアザチを食つてからは自然を征服して行く人類の勞力や、又そのためにこんな神通川の奥までもある人の聚落やの記憶を唯の一同もたどりさへもしなかつた。もう川に臨んでゐる家も、河近く開墾されてゐる田畑も、皆自然の抱擁の中にある。有ゆる容觀物は自然そのものさして見える。

時節は春かへつてゐるのに、こゝらは秋である。落葉の赤黄が、枯草の間に濕つた空氣にぼんやりと映えてゐる。秋そのままに雪に蔽はれた景色が又そのままに現はれてゐるんだ。The Pasturesの妙諦を奉じてゆつくりと湖を。神通川の深い谷を通して今まで來てゐる吾々には此處等が、あまりに開析されてゐるので、想像がすっかり裏切られてしま

ふ。私は陸中の大迫から岳川を溯つて早池峰の南麓岳へ行つたことがある。あたりがあまりにその時に似てゐるので岳に行くんではないか、さへ思はれた。雙六川の落合には、午頃にやつと着けた。中山の村で中食をした。碧い碧い雙六の水は昔から今まで、今から未來までも、奇怪な、神秘的な傳説を生んで流れてゐる。此方彼方の山々には、白樺が見え出した。そして高山に行くといふ氣分にしみじみと襲はれる。霧は一寸も霽さうにもない。唯重るのみであつた。蒲田川の落合にたどりついたのは、三時頃である。右へ蒲田川を渡つて相變ず高原川を溯つて行く。一重々根附近からは、雪路になつてしまつた。眞白い白樺の幹が薄白く夕暗の霧の中に浮出てゐる。スキーに好しいスロープがやたらにある。杉の殖林地を通つたり落葉松の人造林をぬけたりして行く。餌掛谷あたりからは、どこを見ても雪だ。そして、さびしい唐檜の樹が一本立つてゐたり、又同じ樹が冬の戒律の様に叢つてゐる。硫黄嶽の(の)山脚の山の端には白樺の薄赤い楢の列が谷風に、微妙な音律を送らせてゐる。夕暗は舞ひ下つてくる。耳底に鼓動を打つ遠く近く喚音を起す自然の

うなり以外には何も感しない。今更ながら私等は、四人きりの孤獨を感じたのである。そして、糖分の攝取やらアルコール劑の飲用やらで少しは元氣を付けたものの、道は前に通つたんであらう標の跡を、かすかに認めて行く。膝まで没して又膝までも没してしまふ。そして疲勞が結構加はつてくる。雪の山路の夜の恐喝は遠慮なしにおよせてくる。人間を知らせる一つとしてない。全く荒涼の世界である。呼子を一響に鳴した。四人でどつと満身の力をこめて叫んだ。併し音響は木々を通して谷から谷へと木魂となつて消へて行くだけであ

る。人間の生命の極大な跳躍を見せてゐる都市生活にあきたらずして、自然中に開展された生命を享樂しやうとして荒涼な自然の中にはいり行く吾々の様なものが、なんぞ云つてもやはり、人間に執着したがるのは、確に一つの矛盾である筈だ。この矛盾にもたえながら、吾々は、びつしり濡れてしまつた五臓を、村山旅館にほうり込んだ。

晩に、食後から鶴吉がくる。(乗鞍の案内人)去年の登山隊の話や、乗鞍の話で大いに持てた。雷鳥は決して下界に下らない鳥である。冬は雪の中に穴をあけて、時々堀から出

る。併し保護色した鳥は甚みつけにくい。おんじよを見たこともある。えちごうさきは平湯邊處々澤山居る。郷土博物學者は色んなことを物語る。知らず知らずの内に寢込んでしまつた。

第二日(四月三日)

翌日は雨に明けた。雨だれの音も谷間の流で消されて分らない。朝日のさした様もないのに、十時頃になつてゐる。温泉につかつたり、手紙を書いたりして、この一日も絶望と疑惑の中に暮れてしまつた。そして乗鞍登山に定めたのは、この晩十時半頃だつた。

第三日(四月四日)

朝には薄日がさしきさへもした。併し重い霧雲は少し高引き上げられたばかりである。なんぞなく威壓する雲行きた。鶴吉につれだつて四人が標をぶら下げて續く。大瀧の岩壁には青緑色の氷が凝りついてゐる。礦物質でも含んだ様な色だ。かなり急なまを斜面雪の上にしりけむしが囂ふてゐた。急な斜面やならかなたるみを、雪に標の跡を印刻して行く、猿跳の前で晝を食つてしまつた。後をつけてきた犬は盛にエチゴサギを追ひ出す。銃を狙つてゐる間に兎は何處かにもぐつ

てしまふ。ダケカハヤ、トウロヤシラビソの幹の周りは深く融け込んでゐる。猿跳つた時分は、やつと陰鬱に暗れて笠や焼が時々雲間から見へる。高原川を見越して紫に、よんですんでは、白山山系の語出である。そしてその中に醫王山を見出したりしてゐる中に又霧に包まれて終ふ。白銀の視界から大丹生の突出した澤山のモナドノツクが筒の様に生えてゐる。ここらには最早タケカバもシラビも見當らない。平凡な雪の面を、これも亦平凡な霧の徘徊する群のみが視界を、さへざる無二のものである。さざれさざれの霧の間からは青い線が、何物かがさがされる。大丹生の肩まで踏みのはつた吾々の眼界は突然開いた。眞下には梓川の流が眞白な雪の間を縫ふて、霞澤から六百山の連山、さては穂高岳の岳澤の大雪溪。皆な雪といふ冬の粧飾に満身飾されて、威喝する沈黙の中に立つてゐる。足本には、雪の衣粧を脱ぎ棄て、ヘマツの純叢が、底びえる雪を吹き越した風に揺れてゐる。小高に峰すじには、亦雪は融けて、黒い漿果をつけたガンコウラン、赤に漿果をつけたコケモモ、芽の堅いキウヤクリントウガ、早春の激烈な高山氣候にさらされてゐる。

る。こうした高山禾木群落やハロマツの叢林は呼吸熱の高いのであらうが。それにしても熟しきつたコケモモやガンコウランの味は、春山に登らない人には譯らない感覚である。どうす黒い雲が霞澤の肩に起つたと思ふと大丹生の頭から吹き下しに強い風が起つた。吾は四つ這になつて地べたにかぢりつく。こんな四這の人間が、コケモモの實を喰つて匂ひまはるのだから、雷鳥をつくりになつてしまふ。風は益々吹きさすさぶ。やがて、何處かはなしに笛の音が響く。天界の音響かと思はれた。愈々不思議である。薄暮れた山の頂上に人を誘ふ山つみの音楽であるかも知れない。畏れ始めた一行は下り出した。峯からたふみに降る。皆んなが皆な足を雪にとられてしまふ。あざればあせる程標は深く深く雪の中に喰ひ込んでゆく。

に平湯に下りた。山頂で冬羽の雷鳥が犬におひ出された。下りは愉快に早い最後に急なコシバを坂落しに下つて宿にかへつた。

第四日(五日)

今日も雨に明けた。徒然の終日。絶望と疑惑に又今日も暮れる。明日は何うにかしなればならない。天氣といふ自然現象にさいなまれてゐる吾々は、自然からさましくもなる。

第五日(六日)

あまぎつてゐる空からは未だ朝の光は輝かない。村山、岡田の二人の案内人ももう、支度をしてしまつてゐる。成功といふ豫感がむやみと迫つてくる。二週間も降り続いた。此の山郷はやつと晴天といふ天氣を享樂するこゝが出来たのであつた。道は阿房峠までは夏の道と同じである。濃い霧の中を文字通りに夢中で登つて行く。阿房平といふ平かな一寸した平原を通つても、何十度あると云ふ傾斜を攀つても皆な同じな感じだ。知らない間二阿房池を渡つてしまつてゐた。阿房の舞込といふ渦を巻いてゐる處がある。何處へとも知らぬ山の心深く吸ひ込かれて行く水は、何處へ又ふき出してゐるか譯らない。こんな渦のある池は魔の池とされてしまふ。漏斗状坑 Ento-

池の雪の上においてゐる、足本の大正池まで一つさびに滑り下る。浅み行く堰込湖には小さな沖積が岸から出てゐる。足音に驚いたスズガモ(俗稱)が五六羽三四羽と群がつかつて飛び立つ。そして侵入軍の様に清水屋に陣どつてしまつた。

速度の速い風は銃口に當つて、妙音を發する。峯の雪とたるみの雪との間には深く口をあいてゐる。裂罅がある。これがベルグシユレントを想像させるんだ。そして雪中雪の流れを思ひ出せば、先輩加藤理學士が惜まれてならない。阿房山に回つて其の山脚の峯頂ひ

アースを足下に確と喰込ませる快感と満足を得られやしまひかとも思はれた。徳本が今日の難關なので明神に見合にした。徳本も案外樂で頂上で中食にした。明神岳と穂高とは、夏のさば確に異つた装をして紺青の空にどつしりとまかつてゐる。徳本の下りは、處々にのまがつてかなりの困難はしたが鳥々南澤の最後の人家である。イワナ止からは標は役を引いてしまつた。この南澤の途中から水は導管に引かれて鳥々で白炭となつてあたりには凱旋將軍の様に自動車を飛ばして再びシリセイシヨンに復歸してしまつた。浅田の出温に二日の雪路の旅を思ひ反して喜悅と満足の間になんとか向上して行く生命を込めた様に感ぜられた。(澤田)

思は、純朴な山郷の人々には不思議に思はれるのは當然だ。陽炎のかすかにさし込む、グロードに着いたのは午前であつた。ここが細池平である。森閑とした、森林の中には、枯木を折る音が梢から梢に消えて行き、反響して又永遠に消えて去る。雪の中にたちまちたかれる。食はずむ。

第六日(七日)

阿房峠の頂上から紺碧の空に白い霞澤の鋭峯を歡喜の中に眺めた。阿房の下りに熊の極く新しい足跡を見た。吾々は畏れを抱いたが案内は喜を感じた。細池平の一寸手前で、ヤマドリ羽根がいたましくも散らばつてテンの足跡が茂から茂へみつと雪の上に刻された。人間の醜惡さに、いやみを感じて清浄な大自然に逃れ出る者が、そこにもより惨酷な生存競争が行はれてゐるを見たときに、若し其がないならどんなに自然は平穩な樂園であるかと思ふ美事に異ひない。併し赤裸裸の自然の質跡實相を洞察するものには、こんな大自然に這込つて原始生活をするのが唯一の若返りであると思つたとき、このあたりを匍匐した氷河舌の想像をもして見た。そして雪装の日本アルプスに登ればヨーロッパアルプスの氷河アルペンストックを打込んでネーロード

アールベントグリューンに暮れた高地はモルゲンロートに明けはなれる。ベルヒロイヒテンは穂高の鋭峯にはストロンチウム(炎の様に赤い)、焼岳の直立的な噴煙には凄く映えてゐる。六百山には紫にかすんでゐる。未だ若い白樺や白檜の間を通じてクラリヨンを響かせる牧牛の群も思ひ出し、原頭稀に花さく、初夏の濕原植物群落も寫し浮べて見た。梓川は沈黙な自然と流れる唯一の生命であつた。岸の柳には花がさき、澄みきつた水はイワナの紡錘が縫ふてゐる。清水屋を出發して河童橋の上に立つて前穂高の岳澤の大雪溪を眺め見て、イワナが内地水期動物の残者であると思つたとき、このあたりを匍匐した氷河舌の想像をもして見た。そして雪装の日本アルプスに登ればヨーロッパアルプスの氷河アルペンストックを打込んでネーロード

二月十五日(日)兎狩。雨
四月廿五日(日)安宅より片山津。曇
五月三日(月)寶達山登り。曇
五月廿三日(日)石動山登山。晴

◎第二回山岳展覽會
五月九日(日)午前十時―午後四時。

亡した森林の卒塔婆は濃い直線形の陰影を白

者であると思つたとき、このあたりを匍匐した氷河舌の想像をもして見た。そして雪装の日本アルプスに登ればヨーロッパアルプスの氷河アルペンストックを打込んでネーロード

動植物實驗室で 第二回の 山岳展覽會を開

出品

- 一、標本類。
 - 四高植物教室生品。田中高山園の生品。
 - 四高地嶺教室標本。市村教授標本。
- 一、寫真類。
 - 信濃山岳會。百瀬慎太郎氏。四高地嶺教室。四高山岳會。
- 一、用具用品類
 - 時習寮天幕。四高山岳會携帶天幕。春季旅行班第六班の用具。宮市、石川商店登山用食料品。英藥局登山藥品。
 - 會衆凡そ百五十名。生徒二三百名。

◎第二回山岳講演會

- 五月十日(日曜)午後二時から至誠堂で
- 一、雪のアルプスこえ 生徒 廣瀬壽雄
- (春季旅行班第六班の報告一時間)
- 一、金澤ミスキー
- 第二高女、女師教諭 村井又三郎氏
- (スキーの宣傳、醫王山スキー登山の經驗、金澤のスキー的價值。一時間)
- 一、世界戦争に於ける山岳作戦の價值
- 金澤第七聯隊歩兵大尉 新語五郎氏

(伊太利國境の山岳作戦の經過、戰略上から見た山岳の價值。一時間半)

四高短歌會

五月二十二日。於桂月堂。

- ◎大正九年夏季登山班
 - 第一班 日本アルプス越
 - 第二班 白山登山
 - 第三班 立山登山
 - 第四班 針木越
 - 第五班 白馬登山
 - 第六班 燕から乗鞍まで
- 但し第三班から第五班までは連續するやうになつてゐる。

◎今學年度中の旅行又は遠足に参加した回数が多い人

- 一三甲 (委員) 廣瀬 壽雄君
- 一三乙 (委員) 福富 六郎君
- 一三乙 相田 二郎君
- 二二丙 海野 武雄君
- 二二丙 北村 得三君
- 二二丙 (委員) 澤田武太郎君
- 二二丙 (委員) 山口 學君
- 三二二 石川 元雄君

饑舌の後の淋しき思ふゆゑ云ひたい事も黙つて仕舞ふ
俺の云ふ冗談は他人が笑はないかう氣がついて止めて仕舞つた
萬年筆のサククをばいと抜く音がふさ面白く又抜いてみる
どん栗を並べてみたり集めたり淋しい男氣をば紛らす
淋しさに強ひて笑へど空虚なる聲にいよいよ悲しかりけり

大島 英夫

父の上に安き日あれさ寝る前の數分にして
——心なごめる
日曜が土曜の如き氣がしてならぬ日なり夕陽照る照る子供が遊ぶ
いやな男いやな男と話するされど——皮肉りし後のさびしさ
ほこりなる線路が病みし目に痛し三たびはそちを見ざりけるかも

いつになつたらいつになつたら戀を得ることぞあの女この女敷へけるかも

各務 虎雄

春くるさ何か心のはしけやし夕べは花をふと買ひきたる
としころのうら儂さもめでたさも忘れんさするねがひある頃
錦色にはほる春の夕ぐれの水にあやしくおのゝく心
しどけなく廊下をゆく頃の女心の春の風かな
いさかひて涙ながせばわりなくも女人めきたる驕慢のわく

小水曾三郎

桐の花相寄りて咲く丘裾のかなたに遠き海青みはも
一人ゆく目に海の青しみ來り山並低くはるばるこそり
此畫の光の中に吾はあれどさびしらにこそ竹は小鳴れ
何となくもの足らぬかな汽車をいでふるさとの街あるかんさする

動物園一首

二見 武雄

ひつそりさ丹頂鶴あはれ地に坐せりこの丹頂はみこもりにけり
とろさんと太鼓をうてば丹青の風ぐるまいつせいにまはりけるかも
くれなゐの郵便函はかなしけれ燃えたる家のさむきあけがた
不盡山

中野 重治

自らも知るはなほうとわが性は人のいふなる饑舌なれば
新しき紺がすりきて春あさきふる里の野をわれは朝ゆく
川げたのクローバはよし六月の光にいれて肌をふるれば
いつしかと涙いづなり壁見れば學校へ出ぬ今日この頃は

劍道部

花が咲いたと云つても我部の選手は殆んど毎日道場へ来て練習にはげみ來るべき南下に着々と用意して居ました四月十三日から五月一日まで毎日午後練習をやる事に定めて益々致しました五月になつてからは一週に四日づつやつて居りました。

五月十七日には卒業生送別試合をやりました、が一二年の方はすばらしい馬力で不戦者三人を残して勝ち、三年が安心して卒業出來る様に一二年の方は腕前をふるつて見せてやりました。

俄然送別試合のすんだ翌日京都の方から南下が八月になるかも知れぬと云つて來ました僕等は十二月を望んで居ますが大學で左様定めてしまへば何とも出來ないので差しあたり又練習の方針をかへて五月二十三日から猛練習をはじめて戦の爲め備へをして居ます。

我部は之れ以上何も申し上げますまい唯私等は諸君の満腔の熱誠をこめて御應援下さる事を切に希望致して筆を擱きます。

劍道部參宮武者修業

此の擧の芽を出したのは、丁度寒稽古の終り頃練習後の一片の茶話からであつた。抑も我々が「斬る」と云ふ事は、その裏に伏しいあるものがある様に思はれるけれども、正しい行爲の結果を神に感謝する云ふ事に於いては、其處に野心もなければ、何等の邪念も含んでゐないと思ふ。この意味に於いて我々は今此の參宮武者修業の壯擧を試み、昨冬我々の熱き血と涙と正義を以て勝ち得たる優勝を神に感謝する云ふ事は當然であり又我々のせなければならぬ事である。

且つ一方に於いては地方に於ける劍道界に刺激を與へ、青年の惰眠を覺醒せしめなければならぬ云ふのが我々の目的であつた。而して多數の同士と、古賀先生の熱心なる御盡力によつて、斷行する事に決定したのは三月であつた。

試験は終る。花は咲く。ホート部は墨堤に、庭球弓術部は洛陽に、講演部は或は東に或は西に、既に意氣揚々出陣した。我々も彼れ等と共に征途についた。

岐阜に着いたのは四月一日の朝であつた。我々によつて名付けられた兎電車によつて、一寸と京都を思ひ出させる様な絹笠山の麓に

ある武徳殿へ行つた。十時から稽古すると云ふので近くのワドンやで夕の疲れと試験の疲れを一時に一睡の間に癒す事となつた。稽古には各先生達は勿論那市の青年指導者より師範農林及支部の若手三十名ばかりで實に盛にして門出をして氣持のよい稽古が出来た。且つ始めて長良川の景を賞する事が出来た。名古屋一泊。

二日、夕からの雨は未だ止まない。きたない宿に押し込められる。而も當地劍道界のホロを見せつけらる。名古屋に行く實に氣持が悪つた。それと云ふのは近頃京都の門奈大先生が赴任せられその外大先生方の集まれる此地に余りに多く期待をしすぎたからであつた。兎に角巡查教習所で稽古するといふので朝十時頃教習所へ行つた。そして巡查の卵三十位とその後で先生と云ふ二段位を頭に十數人稽古した。此處の所長は伊藤先生など一所に一高を出で而もその人の令兄が四高出身だと云ふので何だか親しい様な氣かして前の氣分をいくらか調和した。その日は夕方伊勢の津へ向ひ一泊した。津では縣下の劍客を全部支部へ集め且つ着いた晩は主な先生方や武専や慶應の人達によつて歓迎會が開かれ、

何等懸隔なき接待振りに加ふるに、名古屋の劍道界に反し、かれ等の間に何等の蟬りもなく平和の美さを見て實によい感じがした。翌三日の支部に於ける稽古には縣下唯教師三人の欠席者あるのみにて例年の支部大會より以上の盛大であつた。

山田にても稽古する豫定であつたが丁度警察の道場は改築中であり伊勢の大學(皇學館)は休眼であり且つ津の支部へ皆集合した關係から稽古はなく、眞に參宮のみに費した。此の地に來て先づ感じた事は、伊勢參宮者は殆ど眞の參宮者にあらずして、參宮を口實とする遊覽者なりと云ふ事で神都としての山田市は余りに穢れてゐる様に思つた。

四月五日は或は伊賀越の險を越え或は荒木又衛門の雙討の遺跡を訪れ、五日期上野中學に稽古し直に京都に向つた。

京都に着くと弓術部の優勝を聞いた。我々は疲れた身も忘れて、合宿所へ踊り込んだ、出發してからふり續いた雨は京都入りと共にからりと忘れた様に晴れて、今日迄延びた庭球戦も愈々明六日に舉行する云ふ事であつたので本部に稽古する事になつてゐたが一同稽古を止めて一同その應援する事とした。

聞けば此の頃は武徳會本部の方は稽古なく、唯武道専門學校のみで午前九時より稽古あるこの事で七日午前中武專道場で稽古した。

晝食を宿へ歸つて食つてゐると、堀先生が來られ暫くすると先輩湯ノ川氏の訪問あり又話に一花咲いた。そして三時頃になつて突然又大學道場で稽古しよう云ひ出して、再び大學道場へへ行つた。すると七高出身の酒見氏も來て稽古した。今夜一行内藤先生を訪問する事になつてゐたが又話がはずんで、その方は湯ノ川氏に宜敷く頼んでしまつた。そして歸詰電車に送られて、十一時福井へ向つた。

八日午前五時福井へ着いた。すると同じ修業のために東北方面を廻つた京都の大橋五段及大橋三段に落ち合ひ同じ宿に一睡して、新谷佐々木氏等の案内で公園や飛鳥山へ行き、一時から武徳殿支部で稽古をする事になつた。最後に氣持のよい、満足な而して新しい珍らしい人とも稽古する事が出来たのは實に痛快だつた。

これで到々豫定の武者修業は、何の不詳事もなく無事に終る事が出来た。これ遍に古賀

先生の御盡力と髭大將やオンケルの努力に感謝しなければならぬと共に福井にて勞をこられた新谷佐々木兩君に感謝する。終りに此の一行は次の四名であつた。師範古賀先生、松本哲隆、多羅尾光道、渡邊孝次郎(M.T.生)尙精しくは當時の紙上に發表した唯大略尊い紙面を拜借し校友諸兄への御報告に代ふ。

同人雑誌

■下らない事だけぞ

高坂

自分の作の辯解がしてみたくなつた。五月の中頃に原稿が足りぬと云ふので皆が何か書くとこになつた。

私も何か書かねばならなかつたが、私はどうも気分が創作には向いてゐなかつた。論文も書けさうになかつた。去年の號に載せた論文の色々な缺點が、私を恥かしく思はせたせいもある。とにかく熱さない論文は自分一人にしまつておくべきだと云ふ事を知つた。熱さない創作も出すべきではないと思つたが、自分の所謂「創作」を混ぜない作は、其の不全にもかゝらず、何か本當の物を含んでゐるだらうと云ふ考へから、かつて「めばえ」に書いた「群」を出す事にした。日記からとこはつた通り、作としては冗漫である、讀み返してみたら一と二とは無くてもよいと思はれた。あの二つの代りに、あの中のごれが一つ

のエピソードを長くしたなら作としてはもつと甘い味が出たかも知れなかつた。しかし私には何となくさうしたくなかつた、自分の不具な子供を、その不具なために愛する親の様に。

之を書く時には、もつと何にか言ひたかつたが、熱が冷めたから筆を擱く。ゲーテは自分の作物に序文を書いた事はなかつたと云ふ、私は今フトそれを思ひ出して淋しい心持になつた。

もう學校を去るのかと思ふさ何にもかにもが有難かつた様に思はれる。塾の人達と河原で遊んで来た、歌を歌つたり菓子を食べたりして。六月一日、

■青葉の句

北村

□今度は繪を三枚にしようと思つて、ホルバインとセザンヌとピカソを選んでおいた。ところが印刷費の都合でたうと一枚にへらされて了つた、金のことで、何時も思つた様なのに出来ないのは遺憾だ。表紙にはルツ

の風景を用ゐた。彼はミレーと同時代の人だ。口繪に用ゐたホルバインの「墓上のクリスト」はいい繪だと思ふ。ハンス、ホルバインは十六世紀の初め頃の獨逸の畫家だ。Eugeneに生れ、父のザヨン、ホルバインから繪を教習された。彼は肖像畫家として、異常な名聲をうけた。口繪にした繪は、どちらかと言へば、彼らしくない繪かもしれない。併し、あの繪は、異様な戰慄をたましひの上にもたらさずにはおかない。僕が初めて、あの繪を、友人の米澤君の家で見た時は、一種嚴肅な氣持に襲はれたことを、今でも、はつきり憶えてゐる。亂れた長い髪、瘦せた顔や肩の肉、そして、冷たい肌、而も、その底に、人間味と愛との漂うてゐるのは、嚴肅さの中にも異様な寂しいなつかしさを感ぜさせる。ここはつておろが、あれは、部分畫だ。

今度のせられなかつたのは、來學期に載せる積りだ。

さ、今から氣になる、とにかく、最善をつくすつもりだ。それから、大島君、深町君、本多君の原稿は、僕がおあづかりしておきます。

□あきらめと皮肉と、軽い哀愁とが、時折、僕の心にしこんでくる。もつと、眞面目に、もつと敬虔に、愛を深め、生活を深めたいと思ふ、ひたすらなる祈りを、からかふ様に。僕の今度の「藝」は、一寸氣紛れにかきつけたと言つていい位だ。同時に、時々、皮肉を言ひたがる自分の心を罵りたい様な氣持もあつた。とにかく、僕は、自分の全心を動かす様な創作の熱情が湧いて来ることをまつてゐる。

静かな黄昏だ。六月一日

■お別れの言葉

各務

■藝術的作品の價値は、言ひ足りないかも知れないが、今のわたしの小やかな感じ、から言へば、作者自身の個性が十分閃いてゐるか否か、物の見方や掴み方の如何を問ふのは勿論であるが、作そのもののもつ現實味とロマ

ンテイシズムと藝術的感激との多寡によつて、第一に決定されると思ふ。物の見方や掴み方が秀れてをり、そこに取扱はれた題材の部分々々に、作者自身の経験し得得した味覺が、よく現實化されてゐる上に、ロマンテイシズムが豊かであり、作者の個性と藝術的感激が迸つてゐれば、大体に於て、それは立派な藝術品である。材料は、作者の幻想の産物で結構だ。が、現實化されることを欠いてはならない。ロマンテイックな句が横溢してゐなければならぬ。止め度き興味に、そのかされて作り上げたものでなければならぬ。でないさ、讀者の胸に強く響かなくなる。

■題材は、何處からとつてきててもいい。傳奇的な物でも、倫理觀の入つた物でも、詩情の流れる物でも、何でも構はない。テーマがあつてもなくてもいい。スケールの大小や、筆致の巧拙などいふことは、第二義的或はそれ以下だ。

■勿論、南歐の藝術と北歐の藝術とが目的を異にしてゐるために起るやうに、私の恠うした考も、或る派の人々からは、多かれ少なかれ、迴避される要素を帯んではゐるだらう。が、兎まれ、これは近頃のわたしの抱く一面

の感じである。

■今度の創作の掲載順位は、いたづらから、圖引で決めた。わたしの短篇の「五月」の方は、載せない積りだつたが、埋合せのため、急に後から附加へた。「鬚」も「五月」も、今になつてみると、何れも下らない。が、どうせ習作だと思つて安心してゐる。

■第八十四號(昨年三月)の拙稿「芭蕉選化と支考」中「菊に出て奈良と難波は宵月夜、支考」とあるのは誤、あれは芭蕉翁の句である第八十七號(本年の拙稿「支考生活断章」第二頁第二行の「留一別二句、つは」は「留別二句、一つは」の誤植。これでは意味がとれないと思ふ。又啄木會詠草中佐々木君の歌に「……何が不安をもつてゐる……」とあるのは「何か不平を……」の誤植。この誤植は、あの歌一首を蓋なしにして下す。

■今年は浦井部長の謙讓的な正しい態度と上原教授の御同情とによつて、部の費用は昨年の二倍近くも割りあてられた。十月、その報告に接して喜んだが、その甲斐もなく、九月に五割方騰つてゐた印刷料や紙代は一月に入つて昨年の二倍以上になつた。今學期もまだ下らない。そのため、三學期には畫も三四

枚入れて百六七十頁のものを作らうとしてゐた一學期の企畫は、全然ふいになつてしまつた。残念に思つてゐる。止むを得ず一年の人の原稿は三篇とも來學年へまはすことにして、兎に角雜誌は薄くした。繪もホルバインの「墓上のクリスト」だけにした。紙質も二學期のよりは少しよくしたが、思はしくない。圖畫を入れるのを贅澤だと思ふ人があつては困る。事實、四頁だけ儉約すれば、一枚位の畫なら裕に入るのだから。六月七日。

□余白をかりて、寸し附け加へておきます。

□前に、現實味とか、ロマンテイズムとか、傳奇的とか云ふ字を使つたが、讀みかへしてみると、あの意味が判明してゐない、簡單にまとめて言へば、描かれた材料が實際のものであるか否かは問題でなくして、作品に、現實と同じやうに、生氣が躍動してゐるか否かが大切である。さういふつもりであつた。

□短歌會の報告を準部報として取扱つたのは、先例によつたのである、短歌會にはお氣の毒であるが、左様御承知をねがひたい。短歌會は雜誌部外獨立させたが、たゞへ獨立は

しても、矢張 雜誌部と歩調を共にして貰ひたい。六月九日。

意注

□ 篇幅は四百字又は二百字用紙に認むべし

□ 作品の種類は作者の自由たるべし

□ 締切期日は遵守すべし

大正九年六月十日印刷部本
大正九年六月十日發行
第八十八號

【すら賣に市】

編輯兼發行者 吉村政行
石川縣金澤市早通町五十六番地

印刷者 澤田助太郎
石川縣金澤市高岡町九十番地

印刷所 明治印刷株式會社

發行所 第四高等學校北辰會

第四高等學校北辰會雜誌

大正九年六月十日印刷
大正九年六月十日發行

第八十八號